

47年間 ドイツで暮らして
見たこと 考えたこと



オルセン昌子

4 7 年前のわかれ	3
ドイツ人との第二人生始める	5
1 ドイツでの初めてののお花見はガレージの上	8
2 豊かな国の人気テーマ《片付け》	1 0
3 ウアラウプはドイツ人の生き甲斐	2 0
4 車を愛するドイツ人	2 3
5 ドイツの子育て 日本の子育て	2 8
6 《玄関の靴》について	3 5
7 人生が変わった子犬のアキ登場	4 0
8 三つの例に見る文化の違い	4 5
9 ドイツの森での事件、そしてパーティーでの再会	4 8
1 0 4 3 歳で逝かなければならなかったアネッテ	5 6
1 1 翻訳という楽しみ発見	6 5
1 2 全目玉が真っ黄色だったホームレスドッグのテディ	6 0
1 3 男と女の不思議な関係 ホモサピエンス	6 3
1 4 ボールを蹴飛ばすだけなのに人を魅了するサッカー	6 7
1 5 アキとのお別れ	7 2
1 6 ひょうきん犬ボニー スペインから飛んでくる	7 4
1 7 まぶた裏の父を求めて家族調査に奮闘する夫	8 1
1 8 テディからの贈り物 突然芽生えた絵心	8 7
1 9 ボニーがリューマチにかかってしまった	9 4
2 0 後悔すること	9 6
2 1 津波 神がかりの日本女子サッカーワールドカップ	9 9
2 2 遅すぎた大発見 夢の職業	1 0 5
2 3 エキゾチック好きのドイツ人？	1 1 1
2 4 シリア難民 隣人愛で頑張ったものの…	1 1 4
2 5 アイデンティティ考	1 2 5
2 6 心のよりどころの日本語	1 3 1
2 7 言葉の力	1 3 5
2 8 コロナ禍と地球温暖化の関係 ボニーとの別れ	1 4 0
2 9 戦争は今も一二つの世界大戦の犠牲者の義母	1 4 6
3 0 テラスでのお花見	1 5 4
エピローグ	1 5 7

4 7 年前のわかれ

「今から親不孝をするんだからね」

駅で父がちょっと席を外したとき、見送りに来てくれた年配の親戚の人が私に言った。

父はいつでもフェアだった。親に反対されながらもドイツにお嫁に行くと決めた私のために、けじめを付けなくてはと親戚一同をレストランに招待して結婚式代わりのお別れ会をしてくれた。家を出る前に、花嫁道具を買ってやれないからせめて祝儀にと厚めの封筒を渡してくれた。「大丈夫だから」と言ったけど、父は羽田空港まで見送りに来てくれた。

荷物を無事に預けて、あとはチャックインのみ。出国手続きのために階下に降りる階段の傍に、電話機が一台ぼつんと立っていた。辺りに人影はなかった。それまでは頭がいっぱいで、母にあいさつをするための電話を探そうともしていなかった自分に、はっとした。これを逃したら国内電話はできない。「じゃあ、今から出発するから。いろいろありがとう」と、ちょっとあいさつするつもりで受話器を取ってお金を入れた。

「はい」という母の声が聞こえた。とたん、口から出たのは考えてもいなかった言葉だった。

「お母さん、ごめんね。ごめんね、ごめんね。本当にごめんね。お母さん、ごめんね。ごめんね」

胸が詰まって涙が出てきて止まらなくなった。

ドイツ人と結婚すると決めた娘に悲しんだり腹を立てたり失望したりしていた母が、受話器の向こう側で言った。

「うまくいかなかったら、いつでも帰ってきていいんだからね」

泣きながら「ごめんね」を繰り返すばかりの私に「じゃ、切るから」という声が届き、プツッと電話が切れた。

どうしてこんな思いをしてまで、行くんだろう。ドイツで待っていてくれる人がいることなど頭に入らなかった。何も考えないで、どっぴりと安心して暮らせる母国というところから飛び立って、言葉も、考え方も、食べ物も、文化習慣も、何もわからない他の国で人生を始めようとしている自分。いつも優柔不断で何も決められない自分が、どうして、なんの見通しもつかないこんな冒険の道を選べたのか、

自分が決めたことに自信があるわけでもなく、頭の中はごちゃごちゃのまま、日本から飛びたった。

成田国際空港開港反対デモのニュースでにぎわっていた、そんなある日だった。

ドイツ人との第二の人生の始まり

ドイツで暮らし始める私に、まずはできるだけ楽しい思いをさせようと夫となる人なりに考えたようだった。着いて早々、私達はオーストリアにスキー休暇に行った。

滑るのは面白いとはいえ滑った後には必ずまたリフトに乗らなければならないから、高所恐怖症者としては一人で座ってスキーを履いた足をぶらぶらさせながら、どんどん山の上に引っ張られていくその感覚が何ともいただけない。おまけにスピード恐怖症ときているから、滑り出してビュンビュン滑っているうちにふと恐怖がよぎったりもする。ただの遊びというのにワクワクビクビクの狭間の気分で過ごす羽目になる。

ある日、ついにリフトから転落した。リフトが一斉に即座に止まった。ひっくり返ったカブトムシのようになってバタバタしているみっともない恰好をしながら、人々の同情と哀れみの視線が感じらる気がした。恥ずかしくて穴があったら入りたいという願いは、落ちたとたんにできた雪の穴ですぐに叶った。一体どうやってその穴からはい出したのか、その後どうなったのか何も覚えていない。

翌日、同情した夫となる人が言った。

「今日はスキーは休みにしよう」

折角雪に囲まれているのにもったいないと思う気持ちと、少々ほっとする気持ちが交錯した。

宿は夫の友人の兄上が経営する小ぢんまりとした宿だったから、その夫婦とのお茶を飲みながらのおしゃべりも日本から来たばかりの私にとってはオーストリアの白い雪のように新鮮だった。

午後になって、宿主から借りたそりを引っ張りながら山道をとぼとぼと歩いた。

とうとう、また外国に来てしまった。アメリカじゃなくて今度はドイツだ。折角合格した大学は当時学生運動の真っ盛りだった。子供の頃よく何で？どうして？と聞いてばかりいた娘は過激派学生になりそうな気がして、そんなことになったら嫁ぎ先が見つからないと心配していた父は、短大に行って結婚するのが女の子には一番の幸せだと信じていた。親に逆らって生きる勇気も行動力もない自分を知っていたから言うとおりに短大に進んだ。二年間はあっという間に過ぎてしまって、卒業した時にはまるで食べ始まったメインのごちそうが途中で持っていかれてしま

ったような後味があった。一応会社には入ったけど、このまま結婚したら一体どうなるのか、本当に満たされて一生暮らしていけるのか。自分の行動力の無さを棚に上げて、その日暮しをしていた。そんな時いつも積極的な仲良しの友人が見かねて、米国短期留学の情報を教えてくれた。そうだ、これだと父に相談した。一度だけアメリカで自分の英語力を試してみたいから行かせて、そこで英語を使って様子が分かったら満足して大人しくお見合いでも何でもして結婚するから。父は私の言葉を信じて、それで満足するならと娘の冒険を許してくれた。

半年経って無事に帰国した娘のためにお見合いの話などがあると乗り気になっていた親を片目に、私はアメリカで知り合ったドイツ人と文通をしていた。インターナショナルハウスという学生寮の大食堂で食べる学生達は、真面目に黙々と食べていた。が、一角で大笑いが聞こえてくると、いつもそこにはその元気の良いドイツ人がいた。

帰国後3年間文通している間に、ドイツ本国に戻った彼は真面目な会社員になった。手紙では楽しい交流を続けていたけど国際結婚までは考えなかった。そんな勇氣はなかった。親に逆らって悲しい思いをさせる勇氣はなかった。親を満足させるのが優しい親に応える娘としての義務だと思っていた。自分はどんな人生を送りたいかなどとは具体的には考えもせず、ただ結婚して妻として母親として平凡に暮らすのが一番の幸せだといつも聞かされていたから、そんなものなのだろうと思っていた。

やがてお見合いをした相手は世間で言ういわゆる申し分のない人だった。麻雀とテニスに興味なのは我が興味にも合うから良いとしても、優柔不断さは私に輪をかけていた。それでも、まあ、こんなものかと結婚申し込みを受け入れる寸前だった。

ドイツの彼にはずっと楽しく手紙のやり取りをしていたけど、「親に悲しい思いをさせる勇氣はどうしてもないから日本人と結婚します。これは最後の手紙です」と書いた。

するとどうだろう。手紙が着くか着かないかのうちにドイツから彼がやってきた。「君の人生は君の物だ。親の物ではない。年を取る親に悲しい思いをさせたくないという気持ちは分かるけど、年を取っても人間は学ばなくちゃならない。子供の人生は子どもの物だと、学ばなくちゃならない。〈人生は学ぶためにあるんだよ〉」

優柔不断の私はその言葉を聞いてハッとした。〈人生は学ぶためにある〉！
「そうだ、この人だ！」

今思うと、あのお見合い進行中にドイツから突如としてやってきた彼は、映画『卒業』のダスティ・ Hoffmanを地でいった。教会の祭壇の前で、結婚の誓いをする寸前のエレーンに教会の二階の窓ガラスを叩きながら絶望したように叫ぶ。「エレーン！エレーン！」ドイツから来た彼は、まさにあの役をやったのけた。あの映

画のバックグラウンドになったカリフォルニア大学バークレー校は夫の留学地でもあった。

お見合いの相手が改めて両親に挨拶するために来ることになって、床の間に生け花を活けた。数日してドイツ人の彼が「結婚したいんです」と両親に手を付いて頼んだとき、その生け花はまだ新鮮だった。まるで試合の審判みたいに、日本男性とドイツ男性両方の姿を見ていた花。あの時白い花を基調にして黄色の花をちょっとだけアクセントにして活けた。結局、父の懸念通り、やっぱり過激派的人生を選んでしまった。

それからすったもんだの一年が過ぎて、私は夫となる人とオーストリアの山道を歩いていた。彼がそりを引っ張っているのは、山の頂上にあるレストランでお茶を飲み、周りをそりで滑って遊ぶためと思っていた。お茶を飲んだ後、そりに座った夫となる人が言った。

「さて、じゃあ出発。しっかり背中につかまって」

その辺りをうろうろと滑るぐらいなのにオーバーなと思いながら、夫となる人の背中の後ろに座った。途端に、彼は靴で地面を蹴ったかと思うと、「ユッピー！」と叫びながら、さっき登ってやっと着いたばかりの山頂から、同じ山道を滑り出した。暗くなるのが早い冬の午後、頂上に向かって歩く人の姿はない。

さっきまで二時間程とぼとぼと歩いた細い山道を、木製そりですごいスピードで滑り下りる。一人だったら、そのスピードに途中で気絶したかもしれない。でも、大丈夫、しっかり夫となる人の背中にしがみついているから。

だれもいない山道をビュンビュン滑りながら「ユッピー！」と叫んでは、カーブではうまいこと身を傾け、ザザッと靴でブレーキを掛け、さらにビュンビュン山道を下降する。

「ユッピー！」ビュンビュン、ザザッ、ビュンビュン、

「ユッピー！」ザザッ、ビュンビュン、ビュンビュン

夫となる人の背中にひたすらしがみ付き、ワクワク、ドキドキ、ヒヤヒヤしながら思った。

「これからの人生、このクレイジージャーマンと一体どんなことになるんだろう」

1 ドイツでの初めてののお花見はガレージの上

薄桃色の桜の花がみごとに咲いているのは、日本と同じだった。空は薄青のやわらかな春日和。違っていたのは、桜を愛でるために座しているところがピクニックシートやベンチではなくて、ガレージの屋根上にあるバルコニーだったことだ。

そこでは、笑顔での「これ、どうぞ」「あ、どうも、どうも」「これ、おいしいですね」という飲食中のやり取りではなかった。

目の前にあるのは、テーブルクロスの上に用意された丸い大きなケーキと、コーヒーセット。滝のように流れる語り。大笑いに続く、さらなる語り。昔、共に過ごした時の思い出話で盛り上がっていた。義母の友人が、日本から来た義母の嫁を歓迎したいと、家族ぐるみでお茶に招待してくれたのだった。

飛び交うのはひたすら昔話。義母の昔の友人といえ、戦後苦しかった時にお互いに助け合った間柄の人が多かった。平和で豊かな時代を迎えてから、午後のコーヒーを共にゆっくりと味わうときの満たされた気持ちは、戦後しばらく経ってから国民総罪悪感に苛まれることになったドイツ人の年配者達にとっては、私達には想像できないくらいだった。私が真にそのことを理解したのは、ずっと後になってからだった。

当時、ドイツ語はまだ全く分からなかったから、夫が話の内容を英語で私に説明してくれた。肝心の夫はそのうちに自分までおしゃべりに熱中してしまい、通訳係という任務ばかりか、我をも忘れて一緒になって笑っている。

左隣に座る義兄が、意味が分からないので笑わずに手持無沙汰にしている私に気が付いて通訳をしてくれた。ドイツ語でしゃべって笑っているのに並行して、英語での説明が続く。自分の頭の中で、それが日本語になって理解できた大笑いの理由は、遅ればせながら分かったとしても、いくらなんでも後から笑うには興ざめこの上ない。

それに異文化から飛び込んだばかりの私には、それらの話の可笑しさはもう一つピンとこない可笑しさだった。落語を通訳を通じて理解して日本人のように笑おうと思っても、多分笑えないだろうのと同じように。

おまけに頼りにする夫は笑うのに忙しくて、妻のことなど忘れている。妻帯の身になって日が浅いから普通だったら少し位忘れても仕方ないけど、妻は妻でもわざわざ飛行機に乗って地球の反対側からやって来た妻だ。爆笑と引き換えに簡単に忘れられては困る。

やがて目の前にはっきりとしてきた映像は、水色の空の下、満開の桜の背景、私の前に座っているのは六人のドイツ人。途切れなく次から次へとパッパッと開いて

は動く口、口、その隣で言葉が分からないばかりに、全くぽつんと取り残されている自分の姿だった。人々に囲まれていながらの孤独感がグーッと押し寄せてきて、ついに涙が溢れ出た。

みっともないので席を外したが、すでに時は遅し。場は白けて、みんなが私を慰めようとオロオロし始めた。そうすると増々格好が悪く、周りの人達に気まずい思いをさせて申し訳ないと身の置きどころがなくなった。

ドイツ語が分からないで暮らすというのは、一体どういうことなのか。咲きほころぶ桜を見ながら、しみじみ実感した。本来なら私という日本人お嫁さん歓迎のためのコーヒーのひとつきで、素敵な春の午後になるはずだった。

その後、この義母の友人夫妻から結婚祝いとして日本製の七宝焼きの器が届いた。戦争未亡人として三人の子供を育てる義母を見ていた友人夫妻は、義母の子供達が一人二人と伴侶を見つけて独立するのを見ながら、感慨深い気分になって祝福の気持ちがいっぱいだったに違いない。

今では、第二次世界大戦は遠い昔のことになってしまった。当時は戦後三十年以上経っていたとは言え、戦中を生きた人達にはそれぞれの体験とそれに伴う気持ちがまだまだ鮮明に染み込んでいた。

どういう経由で手に入れたのか聞き損なってしまったが、その七宝焼の贈り物を見る度に、そのお花見の午後が眼の前に蘇る。

2 豊かな国の人気テーマ《片付け》

それにしても、本当に、まず言葉ありきだった。お花見の午後の寂しい思いに懲りて、熱心にドイツ語を学んでからは、人々がどう動いているかだけではなく、どう考えるかも少しずつ分かるようになった。子供を通して、飼い犬を通して、主婦生活の日々ではあったけど、いろんな情報が入ってきた。読書会に誘われたのも子供を通してだった。娘の友人から、「叔母さんが読書会で井上靖の『闘牛』を読んだので、もっと日本のことを知りたいと言っている」と読書会に呼ばれて、日本のことを聞かれるままに話し、会の終わりに、良かったら一緒に本を読みませんかと誘われた。良いきっかけだと早速それ以来毎月、10人程のドイツ人女性に交じって共通の一冊の本を読み、ディスカッションをするようになった。

昔、履歴書などを書くとき、趣味を読書と書く人は趣味がない人だ、などと読書の価値が認められていなかった。スマホに圧倒されている世の今では、読書の価値は益々重要になり小学校で字を習うとドイツでの孫達は、学校から毎日30分の読書を宿題に出されて、それを済ませると親はサインをするというまでに、子供に読書の習慣をつける大切さが強調されている。ドイツ統一前の東ドイツ人はあまり娯楽というものがなかったので国民総読者という程だったという。統一後は自由にどこでも行けるので、旧東独出身者は一時は旅行者のトップに行くようになった。

日本で買った本にしおりが入っていて、〈一冊あれば、旅に出るより遠くに行ける〉というフレーズが付いていて感激した。地球温暖化の今、このフレーズはもっともっと流行っていいはずだ。

ドイツでは、街角や、スーパーの前に昔の公衆電話のブースが立っていて、その中は〈ご自由にどうぞ〉と読者を待ち望んで本達がひしめいている。ちゃんとそのために作ったガラス戸付きの本棚も外の遊び場の一コーナーにあったりする。子供相手に遊び場に来ているお母さんやお祖母ちゃん達が、あるいは家に帰る途中に子供達が覗いて絵本を持って行ける。《自分が読んで、人にも勧めたいと思う本を持ってきてください。》というようなコメントのついているところもある。多分、本の処分所代わりにされるのに辟易してのことかもしれない。こんな風に人々がお金を出さなくても手軽に本に手が届くという環境もあってかどうかはともかく、今また、一時は電子書籍に大分お株を取られた感のあった紙の本だけど、新聞の記事などでは、紙の本に戻ってくる読者が増えているという記事を目にするようになった。

街の書店の前や駅構内には、本が安くなっているコーナーもある。アメリカ人のお客さんを街に連れて行ったとき、「アメリカだったら、路上になんか置いておいたら、支払わないで持っていかれちゃうから、お店前に売り物を置くのは無理ね」とその光景に驚いていた。

以前ケルンからハンブルクの娘を訪ねる車内でお向かいに座る若い女性と読書について話が弾んだことがある。厚ぼったい本を持っていた彼女は、「読出しは面白くなくても最初の50ページには、その本にチャンスを上げる」と言ったのでそれは面白い基準だと印象に残っている。今この書き出しを読みながら、「国際結婚とはいっても人の思い出話なんか読んでもね〜」と本を閉じられる前にお願いしたい。「まあ、そう言わずに、まだ20ページにもならないのですから、もう少し読んでみてください」

結局のところ、それぞれの歴史あってこそその文化だし、人々の考え方は《十人十色》でどちらの文化が勝っているというようなことは絶対に言えないけど。ドイツ人の反応や対処の様子を見ながら、我々日本人だったら？ということを考えるきっかけになるかも知れない。

言葉が分かると、読むばかりではなく、聞いても、見ても入ってくる情報が濃縮になってくる。いろんなメディアで世界各地の人々が爆撃や災害で逃げ回ったり嘆き叫んでいるのを目にすると、《片付け》という話題がなんと贅沢なことかと思う。

自然災害や戦争下では、片付けどころか、一瞬のうちに茫然と立ちすくむ目の前ですべてが破壊される。すべてを失う。片付けしながら、これはどうしようか、取っておくか、処分するかなどと考えるチャンスはない。そう思うと、そんなことをのんびりと考えていられるのは何とありがたい身の上なのかと思う。

以前のイースター祭のとき、三か所に散らばって暮らしている子供達の家族が集まった時も＜溢れる物＞が話題になった。次女が日本で三か月間の研修生となったとき、幼な子三人のために長期育児休暇をとって日本に付いて行った婿が言った。

「日本で三か月間借りた家具付きのあの家は開眼ものだった。家族五人分の和洋食器、寝具、何から何まで揃って、あのシンプルな暮らしは素晴らしい体験だった。子供達も特に玩具もないというのに、毎日満足して遊んでいた。今、家の中がまた物でいっぱい逃げだしたくなるようなとき、あの暮らしを思い出す。僕の理想はあれだね。トランク三個で日本に着いて、買い物をした物が少しばかり増えたとは言え、またトランク三個プラスアルファだけで日本を発った」

その家具付きの家は、古い日本家屋をモダンに改造して二階の押し入れがある寝室以外は、キッチンもリビングも作り付けの収容庫で実に便利にできていた。まさに日本式の昔風のすっきり仕方。日本が消費社会になって、庶民がその対応の仕方に戸惑ってお手上げになる前の暮らしが偲ばれた。外国人客が長期滞在をしたくなるような京都のお寺の直ぐ側だった。

「そうは言っても、やっぱり人間の三大本能は食欲、性欲、所有欲。たとえば、この大きなティーポットは、みんなでこうしてお茶を飲むときにと買ったの。旅行先でたまたま見たとき、物を増やしたくないから一瞬悩んだけど、色から形から値段から気に入って。思い出にもなるし。ポット一つで生きる楽しみが味わえて健康ホルモンが出てくる。ま、そう考えると増えても良いかも？」
つい、自分の所有欲の言い訳をさがした。

大分前クリスマス前のある日、面倒を見ていたシリア人兄弟三人をケルン大聖堂の隣のロンカリ広場のクリスマス市に連れて行ってあげた。世界各国の食べ物の屋台や、きれいな布や木やガラス製の様々な色と形で作られた工芸品的な品々が所狭しと飾られた屋台が立ち並ぶ。

破壊された故郷を後にして、その三か月前に平和なドイツにたどりついたシリア人青年の目に、その光景はどんな風に映ったのだろう。

クリスマス市では右を向いても左を向いても目に入るのは、楽しそうに連れと一緒にむしゃむしゃと飲食している光景ばかり。クリスマスの音楽を耳に寒くて足踏みしながらでも、クリスマス特別の温かいグリューワインなどを飲むのは多くのドイツ人にとってクリスマス前の恒例行事だ。

イスラム教徒の彼らには、キリスト教行事のど真ん中に連れられて来てショック療法だったのだろうか？ドイツを目的地にした以上、ドイツの宗教行事にも慣れないと私達は単純に考えただけだった。

食べ物の屋台の前で言った。

「これには豚肉が入っていないから大丈夫よ、遠慮しないでいいのよ、折角だから何か試してみれば」

彼らは何も食べようとしなかった。イスラム教徒は豚肉を食するのもアルコール類を飲むのも禁じられている。もしかするとイスラム教は消費も禁じているのかもしれない、そう思ってしまうほど溢れる目の前の食べ物にも品々にも関心がないようだった。ガラス製の螺旋状の軸をクルクル回しても、真ん中にあるクリスタルガラス玉が落ちないで上下にだけ動く飾り物を見た時、孫が見たら喜びそうなその飾りをクリスマス用に買ったかったけど、そういう意味のない物を難民の目の前で購入するのは気が引けた。兄弟達はドライヤシの実が入ったリュック一つだけ背負っ

て、戦地となった母国を後にして四、五千キロを歩いてドイツに来た。その若者達の目の前で、美味しそうに食べたり、お金を使ったりするのが恥ずかしく思えた。

随分前のことだが、読書会の一人がいつもは小説ばかり読んでいるけど、たまにはこんな実用書はどうかと一冊の本を推薦した。『風水流ガラクタの片付け』それは不思議な本だった。読み始めると読み進める代わりに自然に片付けたくなる。早く片付けしたくて一気にその本を読み終えて片付け開始。

「面白いから読んでみて」と友人のベティーナに貸してあげると、二、三日して電話してきた。

「読み始めたら、片付けたくなってうずうずしたから読むの止めて片付けし出したの。もう徹底的にやっているんだから。帽子だのテーブルクロスだのいくらあっても、結局好きな物しか手に取らないから、使わないのは捨てることにしたの。時間があったら私の成果見に来ない？」

こういう風に励まし合うのも一つの手だ。早速見に行った。まあ、本当にすごい。その本はまだ読み終えていないというのに、いろんなものが山になっている。テーブルクロスの山を指さした。

「見てよ、こんなピンクのテーブルクロスなんか使う機会ないじゃない。プレゼントにもらったから取っておいたんだけど、趣味が違うから場所取りなだけ。くれた友達には悪いんだけど仕方がない」

可愛い濃薄ピンクのしゃれたチェック模様の厚い立派な布のテーブルクロスは、手芸好きな私に向かって手芸用に貰ってちょうだいと盛んに叫んでいるようだった。でも、その日私の意志力は珍しく強かった。自分でも処分しなくてはと思っている物がいっぱいあるのに、友人の処分物を請け負ったりしては元も子もない。

ボランティアとして熱心に教会に関わっているベティーナは世にどれほどの悲惨と不公平があるかいつも意識して頑張っているから、処分と言ってもただゴミ箱に捨てるだけの無為な処分はしないだろう。

ドイツにはビン回収の大きなコンテナの隣に、古着用コンテナも街角至る所に並んでいる。赤十字も半年に一度は専用のビニール袋を配っては、特定の日に家先に出された古着や靴を回収して回る。

アフリカのタンザニアに実習に行った長女が言った。

「タンザニアでは、道端のシートに広げられた古着を一ユーロぐらいでみんな買っているの。赤十字に出す古着は本当にアフリカにでもどこにでも届いているって分かった」

夫は何でも自分で修理するのが好きなので、電気用、コンピューター用、大工仕事用いろんな種類のコードやネジや部品が、いつの日かの出番を夢見て並んでい

る。しみじみ眺めていると芸術的にさえ見える様々な形の工具コレクション。父親のいなかった夫はきっと子供の頃から大工さんの工具箱を見てはあこがれていたのに違いない。夫の分野の特別ゴミ回収もある。電気製品、コード類、古いペンキなど、片っ端から回収してくれる。持っていくと回収用トラックの前で一人ひとり内容をチェックしながら受け取ってくれて、それらも物によっては開発途上国に流れて行くらしい。

回収してくれる当てもないお皿や雑貨などは、サステナブル意識の強い今では〈自由持ち帰り用〉と書いた紙を添えて、家の前に置いておく人が増えた。30年前には、地域の粗大ゴミ回収がある前夜は、夜の散歩をしている人がぞろぞろいた。何事かと見ると、粗大ゴミの中から良さそうな家具を見つけようと物見遊山だったのだ。折角楽し気な光景だったのに、市が粗大ゴミが溜まった家宅の注文に従って回収する制度にして、夜の蚤の市的光景が消えた。代わりに回収車が着くと、バリバリバリっと、いきなり家具が壊されてゴミになってしまう。ゴミを減らさなければというこの時代に合わせての自然発生蚤の市復活が望まれる。

そういえば、〈お持ち帰りください〉の札が付いた、家先の雑貨は日本でも見たことがある。娘が京都で実習をして住んでいた時、近くに古いお皿などが置いてあった。とても日本的な大皿を娘はありがたくいただいて、ドイツに帰ってきてからも大事に使っている。京都短期滞在の良い思い出となっている。

先日は路上に置いてあったソファに男の人が寝そべっていた。あれは、持ち帰り用なのか、何なんだったろう。ハンブルクでは、男の人が持ちきれないからと、一部の荷物を歩道に置いて、まずは別な荷物を運んで行った、と、別な通りがかりの人が、ン、と思って持って行こうとした、するとさっきの男性が戻ってきて、ちょっと、ちょっと、それは、僕の荷物です、と言ったら、あ、すいません、自由持ち帰り用かと思って… とちょっと漫画的なシーンもあったりして、あの、お持ち帰り用は、かなり人間的で楽しい庶民のアイディアではないだろうか。

今は南ドイツに住む娘の家的小区では、ホーフフローマーケット（庭先のフリーマーケット）があって、そんな週末は、町に申し込んで、庭先に何でも並べて一日中店番兼太陽浴。面白いので、あっちの庭先こっちの家の前と辺りを孫とうろうろ一回り。しばらくして、その孫が電話をしてきて、今回は引っ越し前の大片付けに自分達が品を並べたような。家族中で売り上げ240ユーロ。お店屋さんごっこが大好きな孫達は大分ご機嫌だった。日本人だったら、こんな物家の前に並べたら笑われるかな～とかの思案が出るかも？今の日本人はそんな事ないのかな～。姉に聞いてみたかった。

ところで、その〈風水流〉の本を読みながら、ずっと前に友人カチヤが電話で言っていたことを、はたと思い出した。

「地下室が気になってしょうがないので、一週間休みを取ってひたすら地下室の片付けをしたの。大変だったわよー。思い出の物やいつか役に立つかもしれないと取ってあった物、毎日是要らないけど時々必要な物。地下室って何でも放り込んじゃうでしょう。それを徹底的に処分したの。すっかり片付けが終わった後は、まるで生まれ返ったかのような気分になったの」

カチヤの感覚はまさに本能的なものだった。『風水流のガラクタ片づけ』の本は当時まだ出版されていなかったから、彼女がその本の中の一文章を知ろうはずもない。それなのに、彼女は徹底的に片づけた後、その本に書いてあるように実際に〈まるで生まれ変わったような気分〉になったと言う。

その本に〈風水流〉と銘が打たれているのは、次の文で納得する。〈物事がうまくいかないのは、住まいの状態が煩雑で、エネルギーとなる宇宙からの《気》がうまく流れないからである。〉

なぜだか日々の暮らしがどうも滞って何となくすっきりしないという感覚は、多くの人が経験済みかもしれない。そんなときにこの本はすごい指針になる。

従来のキリスト教や西洋哲学だけでは物足りなくなっている世の中で、風水や禅などアジアの哲学や思想や宗教への関心は増すばかりだ。風水流で《気》と人生と煩雑な暮らしを関連させて、片付けの重要性を指摘するイギリス人女性の一冊を読みながら、読者は書かれている内容を実践しながらその効果に納得しては薦めあったからベストセラーにまでなった。

ドイツ人はもともと片付け魔としては有名で、ある日オランダ人の友人曰く。「私達が訪ねあうときは、前以て急いで片付けるのはなしね。ドイツ人みたいに片付いてなくちゃならないとなると会うのが億劫になるから」

それでも、ドイツ人もフツーの人間なのだとホッとしたことがある。家に引っ越したばかりで何をどこに置いて良いか決まらないで、一応いろんな物を地下室に押し込んでおいた。

ある日、煙突掃除の人が来た。大分乱雑になっているのに気が引けて、階段を下りながら言った。

「地下室に行っても卒倒しないでください。ごちゃごちゃですから」

地下室で辺りを一見するなり煙突掃除屋さんは言った。

「こんなのは全然大したことないですよ。家によってはもっとひどいことになっていますよ」

もしかすると、ドイツ人のリビングが片付いているのは地下室があるお陰なのかもしれない。地下室はお互いにあまり見せ合わないので、実情はもうひとつ分からない。この頃は地下室建設はお金がかかるし、地下室があるとその分物を溜め込むことになるからと地下室を作らない人も大分増えた。

その風水流の本のお陰で徹底的に家中の片づけが済んでから、また何年も時が経った。カチヤが南ドイツから電話をしてきた。

「今週の『フォーカス』に片付け特集が載っているのよ。買って読んでみたけど、とても面白いから教えてあげようと思って。」

わざわざ電話してくるぐらいならと私も早速その週刊誌を購入した。『フォーカス』はビジネスマン向きの週刊誌だから、十ページにわたる記事は哲学者、文学者、動機心理学者による片づけ行為の分析も含まれ、目先の片づけアドバイスだけには終わっていなかった。

記事のタイトルは〈人生を片付けよ！〉サブタイトルは〈見通しが利かなくなった世の中で、秩序とシステム化への望みは増すばかり。場所を作り、正しい位置に戻す、これが幸福と解放への道。ただし、家と魂の大清掃は一度限りの行動ではない、それには日常の努力が不可欠だ〉

〈かのアリストテレスでさえ、様々な不必要な物の集積は、常に《もっと所有したい》という人間の性癖のせいだと言っていたそう。ドイツ人の家には平均1万個の物があるが、実際に利用されているのは五百個に過ぎない。つまり、効率的に満足して日々を過ごすためには、実は所有物のほんの5%しか必要ではないという。そしてこの5%という数字はいろんなことに当てはまる。日々入ってくる情報の内5%だけが有益であり、会議の内容の5%だけが目的につながるもので、メールの5%だけが返答すべきものであり、本やDVD、APPの5%だけが見たり使用したりするもので、友人ですら5%だけが本当の友人だという。〉

そのことを頭に入れておけば、別離も困難ではないというわけだ。

〈家の中が整然としていることそのものが目的なのではなくて、それは大方の人にとって喜びの多い人生の必要条件だ。整頓された状態が日常化して煩雑さから解放されれば、生きる上での決定やその他の本質的なことに集中できるので、必要なエネルギーと物事を見抜く力が生まれる。〉

別な記事は動機心理学者によるもので、これには慰められる。

〈後で役に立つかもしれないと思うのは、物を大切にという教育の成果とも言える。思い出の物を大切にすることは自分のアイデンティティの一部を大切にすること

うなもの。だから、処分したとたんに「去る者は疎し」とばかり、自己のアイデンティティからその部分が消えてしまうような不安が伴う。〉

〈人間の半数は行動派で、失敗などもすぐに乗り越えて次に挑戦できるタイプ。別の半数は足踏み派とでもいおうか、状況にしがみついてなかなか失敗から立ち上がれず、いつまでも責任は誰にあるかとか自分はだめだとかを考えている。つまり行動派は、物事や人間関係などにもぼっぱと潔く一線を引くことができるが、別なタイプはぐずぐずといつまでも拘って、物事ばかりではなくダメになってしまった人間関係などもなかなか諦めきれない。〉

つまり、物に決別できるタイプと、そうじゃないタイプがあるということ。

〈人間には基本的にすがりつく習性がある。一般的に目的達成願望も無意識にある。……片付けがうまくいくためには、片付けた後の整然とした暮らしを想像し、なんてきれいに片付いたんだろうと喜ぶことを想像しているうちに実際にやる気が出てきたりする〉

この週刊誌を読んで、どこの家でも驚くほどきれいになっているドイツ人でも日本人と同じ問題に面していることが分かった。特に今の時代の若い人達は、まず時間がない。整然と日々片づけを怠らない専業主婦も今では滅多にいない。あるのは昔のドイツと違って、これでもかこれでもかと消費をあおる宣伝物とメディア上の宣伝。四十七年前にドイツに来た頃は、日本と違って新聞の広告などは入っていなかったし、宣伝のチラシも滅多にないので驚いた。消費社会になった今では日本人の悩みと同じようなことになっている。

社会経済が潤うために生産側はこぞって消費を奨励し、庶民は便利さやさらに優れた製品の宣伝に操られて消費をあおられ、庶民の購買力増加が政府の経済政策の手柄のようにニュースになり、挙句の果てに、庶民はまるで人生のお荷物を抱え込むような状態になって行き詰まる。

なんだか矛盾している。そういう私も必要性ばかりではなく気分転換ストレス解消の一環として消費を続けてきた。そして今では、人生お片付けの時期に至ってしまった。

確かにその週刊誌のアドバイス通り、人にとって大切な魂がかかわることまでは処分しなくてもいい。心に染み付いている物との別れは、それがただの〈物〉でも身が切られるような意味がある。アイデンティティーの一部喪失、というわけ。

いつも私の机の上にある木の小箱は、六十五年以上前に母が婦人会の箱根旅行から帰ってきた時のお土産。淵が赤くなっていてコケシの絵が描いてある蓋を開けると、蓋の裏側には鏡がついている女の子用の小物入れ。それを渡してくれた時の母

の晴れやかな顔は今でも忘れられない。この小箱を見る度に、晩年のアルツハイマーに病んだ母の顔が二重になって胸がキュツとなる。この手の物は人生最後までお供してもいいはずだ。片付けるだけが人生じゃない。

四十七年前にドイツに来て義母の家に行ったとき、義母が「私はコーヒー党で、お茶用のポットがないから一緒に買いに行きましょう」とシュットガルトの大きなデパートに連れて行ってくれた。丸っこい形のうぐいす色で半渦巻き状のレリーフの模様のそのポット、実をいうと私の趣味ではないけど、やっぱりその思い出のために処分できない。モダンなストレートの線か曲線のポットが好まれる今、そのうちに大きくなった孫が「これ昔っぽくてカッコいい」と言ってくれるかも。

伯母は十歳年上の寝たきりのご主人を十年間面倒を見た。十年過ぎた頃、伯母が伯父さんに言ったそうだ。

「お父さん、もう私疲れてしまいましたから、逝ってくれてもいいんですよ。」

「悪いなー。もうすぐ迎えが来るからなー」

そう答えた伯父に、まもなく本当にお迎えが来たと伯母が語っていた。伯母は八十歳になっていた。それからは、よくリュックを背負って区の図書館に行っては沢山の本を借りてきた。面倒を見る伴侶もいない伯母は、夢中で本読みして気がつくとき暗くなっていたりしたそうだ。

「それにしても、私達老人が読む本がないのよね」

その言葉はドイツ人友人の祖母も言っていたそうだ。その祖母の時代は主婦が本を読むのは特に褒められたことじゃなかったもので、料理の最中鍋の中身をかき混ぜながら本を読んで、家人が来ると慌てて布巾を本に被せたと言う。

伯母は時間が惜しくてたまらなかったのだろう、並行して絵を習い始めた。若い人が描いたのかと思うような色合いの白、黄色、ピンク、薄紫のコスモスの花。伯母は自分がしたかったことに熱中した。幸い楽しむ時間が五年間残されていた。コスモスに感心していると「じゃあ、あなたにあげる」とくれた。机の前の壁に飾ってあるコスモスの花からは〈老いても、なお〉という伯母の生への喜びを感じる。

私がドイツに去ってからしばらくして、父は大きな宇宙科学博覧会というのに行った。そこにあった〈十年後に届く葉書〉というブースに一枚の葉書を託したようだ。十年後、日本に住み始まった我が家に、その葉書は届いた。ドイツ生活当初、極短期間しか住んでいなかった住所に宛てたその葉書は、ケルンの住所を経て、その後住んだ北ドイツの三か所の住所を経て、再びケルンの住所をたどって日本の新しい住所宛に届いた。あの葉書、大事に取っておいてはずなのに、どこにいつてし

まったんだろう。あの葉書を絶対に見つけるためにも、書類を片っ端から整理しなくては。あの葉書に書いてあった「結婚に反対して、悪かったね」という文章、あれをもう一度どうしても父亡き後の今、読んでみたい。生存中、あの手紙が本当に十年後に私宛に届いたこと、なんだか気恥ずかしくて報告しそこなってしまった。父も恥ずかしくて、その葉書のこと、聞けなかったのかも知れない。こんな照れくさはドイツ人にはないかもしれない。今度ドイツ人の我が子達に聞いてみよう。

近所の友人はリビングを大きくするリフォームの際、本好きな旦那さんとどう話し合ったのか分からないけど、壁いっぱいあった本棚をリビングからすっきり追い出してしまった。リフォーム完成後、そこはモデルルームのようにランプも暖炉も友人の好きな紺を基調色にしてすっきりときれいだった。以前本がぎっしりと並んでいた壁の前には、上品なアンティーク調ソファが大きくなったリビングの新たなアクセントのように置いてあった。実家のホテルのロビーにあったソファを紺のダマスク織布で張替えたという。そのリビングで友人の五十歳の大きな誕生会の立食パーティーがあった。たまたま前に立っていた旦那さんがワイングラス片手に、私にぼそっと漏らした。

「本が恋しい」(Ich vermisse Bücher イッヒ フェアミッセ ブッヒアー)
夫妻は小学生の頃からの仲だったけど、やがて半年もしないうちに彼は出て行った。

今では気分転換に気の向くままに、家の中をあちこちほんの少しづつ片付ける。その都度すっきりして確かに気が楽になる。そこで、形がある物の整理ばかりではなく、頭の中にある言葉や文章で体験や思いや考えをまとめて、それぞれの引き出しに整理する〈脳内片付け〉というのもしてみたいと思いたった。四十七年間の体験が消えないうちに。私の日本語が消えないうちに。

3 ウアラウプはドイツ人の生き甲斐

ドイツ語で休暇は Urlaub（ウアラウプ）という。ウアラウプというとそれは神聖でさえあるように、誰も邪魔をしたり困ったものだと思ったりはしない。自分も一年の内にはいつか与えられた休暇日は消化するのだからお互い様。仕事内容は同僚が代理をするか、または顧客なり仕事相手は担当者が休暇から戻るまで辛抱強く待つことになる。

ドイツ人のウアラウプへの情熱のすごさに気がついたのは、夏が来た時だった。アウトバーン（高速道路）は、車の中に休暇中に必要とする物ありったけを詰め込んだ車で賑わう。まるで民族移動のようでさえある。学校が国中で一斉に夏休みに入れば、アウトバーンはそんな車で渋滞で動かなくなってしまうので、州毎に夏休みの始まる時期が異なる。それでも山や海を目指して、南下したり北上したりの子の車の渋滞は夏恒例の光景になる。アルプスや地中海やアドリア海など、選り取り見取りの可能性が多い南下の子の方が俄然多いけれど。

当時は、多くの人々にとって南ヨーロッパで暑い思いをして、太陽の熱を吸収して充電する気分になるのが夏だった。今では、ドイツの家でも夏は十分に暑くなるから、休暇は日常の環境から離れての気分転換。何もしないで英気を養うための二三週間の休暇の神聖さは未だに変わらない。

ドイツに来て初めての秋、私のドイツ語の授業が秋休みの間に夫は短期休暇を取った。夫が自分の生まれた町を私に見せようと北の果ての海辺まで行った。バルト海は波も静かで、雲も重たげに広がり気が滅入るようなお天気だった。

「生まれた病院の建物が今はホテルになっている」

夫は母親に生地的印象を話すべく電話を入れた。

義母にとって、夫が生まれた病院は忘れようもない場所だった。第三子が生まれた所というだけではない。夫が生まれたのは戦争最後の日だった。出産直後、義母が出産を終えてぐったりしていたときに病院構内に知らせが響いた。

「イギリス軍がやって来るから、入院患者は全員隣の建物に移動するように」
生まれたばかりの赤ちゃんを抱きながら、義母は力を振り絞って歩いて隣の建物に移った。

「私が歩いた後には産褥の出血で跡がついてしまった」

戦争中のことを話したがらなかった義母が語った少ないシーンの一つだ。

義母から南ドイツでは素晴らしいお天気だと聞いた夫が言った。

「こんなお天気の所で休暇を過ごしても仕方がないから、南下しよう」

そうしてまた、五百キロほどアウトバーンを走らせて、朝出てきたばかりの中部ドイツのケルンの我が家に着いた。

北ドイツをうろうろする休暇の予定は中止して、山登りの荷物を車に積みなおし、翌朝再出発。まずは南ドイツのシュトゥットガルト近郊の義母の家まで、四百キロ車を飛ばした。

翌朝早く義母宅を出発して、スイスのアルプスに向けてさらに四百キロ走った。

走って走って着いたのは、山岳鉄道の出ているミュレンというところ。リュックを背負って電車に乗り、山歩き。山岳鉄道に乗ったので、いきなり大分上の方に着いた。

ドイツ北端の浜辺で冷たい砂に触って秋を感じた二日後、登山靴を履いてアルプスの山を歩いていた。山の秋の深まりは早く、人影はまるでなかった。カリフォルニアで青年期十一年間を過ごし、ヨセミテ国立公園を自分の庭のように登り詰めていた夫がいたので、何も怖いことはなかった。夫がいれば大丈夫。

登山道脇には放牧牛の飲み水貯水用として古い白い湯船が、ぽつんと置いてあった。登っていくうちに小川がちょろちょろと流れているのに出くわしたとき、夫が言った。

「今日はここで寝よう」

水があって上方に危険になるような物がないなら、テントを張って寝ることができる。私は登りながら、向かい側に名高いユングフラウ ヨッホとアイガーが見えるのが感激で、それだけでワクワクしていたから寝る場所などどうでもよかった。

夫はヨセミテで使っていたほとんど一人用のテントを張り、年季の入ったミニガスコンロと鍋で穀物粉のお粥を作った。夫の手慣れた山上の食事作りの様子は見るのも珍しかった。それは病人か幼児向けの食事のようだったけど、十分おいしかった。食べ終わって、小川でお皿を洗おうとして手を入れた水が冷たかった。飛び上がるほど冷たかった。その冷たい水でお皿を洗った後、歯を磨いて顔を洗った。蛇口から出る水でなくても、文明が保証する水でなくても、地球上のそこにたまたま流れている水は、美味しかった。見ても、触っても、飲んでも清らかだった。あたりは深々と神々しいばかりの静けさ。

本格的な山登り初体験の私には、山岳鉄道に頼ったとはいえ、文明という手がかざされていない無垢の自然の姿に感じ入る日々だった。

この休暇で、大陸にあるドイツという国に住み始めたことを身をもって知った。夫は中部ドイツからバルト海に到達するのに五百キロ近く車を走らせ、またユーザーンして五百キロ走って家に戻り、さらに南下して山に登るために計八百キロも走った。

当時はのんきに環境汚染のことなど他人事で、便利な車はだれもが大好きだった。日本のように鉄道やバスはそれほど充実していなかったから、休暇を楽しむにも、もちろん日常にも車は不可欠だった。今では、インスタグラムなどのソーシャルメディアなどで、旅先の写真を世界中に広めて、それによって住民が困ってしまうほどの旅行ブームになってしまった。地球温暖化対策に、無駄な飛行機旅行などは避けようなどと口にしたら、人の楽しみを台無しにする人と睨まれるのがせいぜい。

その点、日本だったら、海辺からだって山が見えるところがあるし、一日おきに山登りと海遊びの休暇もしようと思えばできるというのに。寒暖に富んでいるから四季も美しいし、起伏に富んだ景色も十分味わえるし。観光中の優しい礼儀正しい日本人との体験を通して、日本ファンも益々増えている。先日もシニアダンスの仲間の一人が、娘が休暇という理由もないのに大好きな日本に行くのよと呆れていた。まあ、そんなことで、日本でも観光ブームで悩まされているというニュースはドイツにも届く。日本でお花見の時期が始まったというのがドイツのニュースになるのだから、世界は小さくなった。

4 車を愛するドイツ人

ドイツに来て目に入ったのは、赤、黄色、オレンジ、緑、青などの車の色だった。日本では当時は白か黒のような目立たない色ばかりだったし、赤い車は消防車や郵便局専用に使われていると疑わなかったのに、ドイツでは普通の人が赤い車を乗り回していた。国中網の目のように繋がるアウトバーンを走って、義母や義姉、義兄、友人を訪ねたとき、至る所ビュンビュン走る車のカラフルさで、あー、遠い異国に来たと思った。

ドイツではアウトバーンが無料だから人々はどんどん使っているけど、他のヨーロッパの国々では、高速道路を走るには通行料金を払わなくてはならなかった。その分と言っていいかどうか分からないけど、ドイツに比べると人々が利用することも少なく、高速道路の数そのものも少なかった。出口を間違えてしまったりしたら、次の出口にたどり着くまで時間がかかるし遠回りになるので慌てたりする。

ドイツは車社会だったけど、結婚して住むことになった住まいはケルン中心部に行く電車の駅にも近く、乗り換えて大学に通うのにも便利な場所だった。ドイツ生活に少しでも早く慣れるようにと夫の会社の人が勧めてくれた会社の女性コーラス部に入るとバスに頼るようになった。

コーラス部の指揮のプロフェッサーが私がどのパートで歌うべきか、「ア、ハ、ハ、ハ、ハー」と声を試してソプラノのパートを受け持って良いとコーラス部参加の許可が出た。ドイツ語ばかりでなく意味も分からないラテン語の歌まで「キリキリヨー」などと歌って、練習の後はコーラスの仲間の女性に交じってお茶を飲むひとときもあり、ドイツに馴染むのにはとてもありがたいひとときだった。団体バスに乗って北のハンブルクの教会や、南の有名なオットボーレン教会まで遠出して歌った。紺のロングドレスをまとった百人以上の女性コーラスのコンサートは、別に入場券を払うわけでもない教会の催し事の一つにすぎなかったかも知れないけれど、大きな教会は聴衆の人でかなりいっぱいになっていた。素人なのに立派な教会で高らかに歌うという経験は思いもかけずの宝物になった。

一週間に一辺とはいえ夕方からの練習に通いだしてから、やはり車の免許が必要だと気が付いた。交通の便が良い日本では免許の必要性をまったく感じなかったし、当時の日本では運転する男性の隣に座って乗せてもらうのが女性の姿だった。ドイツ人の夫も私を隣に乗せて運転するのを喜んでいるようだったし、臆病者とし

て自分で運転をしたいという野望は全くなかった。それなのに、夜遅く夫にコース練習終了後にわざわざ迎えに来てもらうのも悪い気がして自ら運転を習わないと思うようになった。

ドイツでは免許取得のための自動車学校（ファースチュレ）に申し込み、まず最初に運転の理論を夜の授業で学んだ後、その教官が生徒を車で家まで迎えに来る。日本式の教習所という練習用の道路がある施設はなくて、教官はいきなり生徒を運転手席に座らせ、自分は助手席に座り、ハンドルをどう握るか、ギアをどう使うか、ブレーキは、スピードを出すペダルはとすでに夜間教習所で習ったことを車の中で説明する。

大都会のケルンで、だれもかれも時速50キロで走っている街中の車の中に飛び込んで、初めてハンドルを握った初心者がウロウロするのだから、私が教習所の先生だったらいくつ心臓があっても間に合わないと思うけれども、当の教官は自分専用に取り付けられているブレーキに手を触れられるようにして、涼しい顔で「次の角を右に曲がって」、「車線変えて」「しょっちゅうバックミラーを見るんだよ」「早めにブレーキ掛けて」と次から次へと要求する。45分間の練習が終わるとくたくたになる。

試験の前の義務として田舎道走行以外に夜間走行とアウトバーン三時間走行があった。アウトバーンは時速60キロ以上で走らなくてはならないから、私はビュンビュンスピードを出して走っていた。心臓が喉元まで上がってきた感じのドキドキ状態で目をつぶりたい思いで走り続けた。いつも臆病そうな運転をしている生徒があまりにもビュンビュン走るので、さすが教官も怖くなったのかも知れない。

「あなたは、な、なんだってそんなにスピードを出すんですか？」

「速く走れば走るほど、早くアウトバーン走行の時間が終わると思って。私怖くて嫌なんです」

「速く走っても遅く走っても、三時間の長さは変わらないよ」

教官にはかなりギャフンの体験だったかもしれない。

免許試験申し込みに手違いがあって、実際に実地試験をする時期が大分延期されてしまった。夫はアメリカで牧師のホストファミリーのお父さんが助手席に座って、適当に運転の練習をして、試験に申し込んで受ければそれで免許証がもらえるという簡単なやり方で免許を取っていた。ドイツで厳格な練習時間の後やっと免許証を得たというのに、結局のところ臆病者すぎてアウトバーンを走ったのは教官が隣に座っていたそのときだけで、以来二度と乗っていない。そんな馬鹿なと信じられないドイツ人友人が言う。

「アウトバーンは〈自由〉そのもののなのよ！」

私は心臓の平静と引き換えの自由はいらない。更新制度がないドイツの免許証は一生物だから、ありがたや、ありがたや。とは言え、段々に子供達から、あぶなや、あぶなやと思われる年齢に近づいてきた。大丈夫、臆病者として免許返上の時期はわきまえているから。

さて、いよいよ実際に車を運転して自由に動けるようになったと思ったら、自分が小さな命を宿している身となったのに気付いた。ありがたくやと授かった宝物に何かあったら大変だとの心配のあまり、実際に自分でハンドルを握るのは見送って、コーラス部参加のために車の免許を取ったというのに使う機会には恵まれなかった。子供が生まれてしばらくすると夫が言った。

「赤ちゃんは良く寝ていることだし、夜は交通量が少ないから車の運転をしよう。あんまり間を置いたら運転できなくなってしまうよ」

そんなものかと渋々夜間運転の練習をした。小一時間もして帰ってくると、まだ動かないと思った赤ちゃんが二十センチ位の厚さのマットレスから落ちて床に転がっていた。手で触ってカーペットがそれほど濡れている様子もなく、赤ちゃんは泣きもしないでスヤスヤ寝ていたけど、不安になった母親が泣きだした。

「だから、赤ちゃん置いて留守にするの嫌だったのよ～」

「でも、君は嫌だとはっきり言わなかったじゃないか。何も言わないということは、承諾したという意味だよ」

夫の言うその言葉を聞いて、ガーンとなった。〈何も言わないのは同意の意味！〉そんな考え方をしたことは今までになかった。日本では、大体いつだってみんな何も言わない。波風を立てないように。私も夫相手に反抗する気にはならなかったから、黙って一緒に出掛けた。そうと知らずに、そうとは思わずに同意していた。反対するのにはエネルギーが要る。

赤ちゃんがしっかりしてきたから、そろそろ運転してみようかと思うようになった頃、次女が生まれることになった。体内と体外の赤ちゃんを守るために不安で運転はできなかった。そうしているうちに三人目ができて運転をしないまま数年経った。

やがていよいよ上の子が幼稚園に行くことになり、下の子も一歳半でしっかりした幼子になっていた。幼稚園はバギーで三人連れて歩いて行ける距離だけど、急ぐ時など運転ができないと困るかもしれないと練習運転をした。

子供三人を乗せて近くのパン屋さんに走った。ちょっとだけだからと路上駐車をして、子供を車に乗せたままパンを買って急いで帰ろうとした。だが、車のエンジンが掛からない。焦っているうちに、信号で止まっていたパトカーが目に入り手を

振って助けを頼んだ。お巡りさんは後ろに乗せた子供達をじろっと見て、私の代わりに運転席に乗り込んだ。子供達は制服の警官が乗り込んできたのでギョッとしてたようだったけど、緊張しているうちに車のエンジンが掛かった。まだまだボンコツ車ではなかったから、どうしてエンジンが掛からなかったのかは未だに謎。家に帰る途中、後ろの席の三歳の次女が言った。

「パンを買うぐらいで、車に乗るから、こんなことになった」

それから三十年。この言葉を吐いた次女は、偶然にも環境保護第一主義の伴侶を得た。数年前娘の友人がスウェーデン人と結婚して、スウェーデンの結婚式に呼ばれたとき、ボンからハンブルク、ハンブルクからストックホルム、ストックホルムから南スウェーデンのゲーテブルクまで汽車を乗り換えて、最後の二時間だけレンタカーを借りて出席した。環境のために飛行機には乗らない主義の伴侶と共に十二時間の電车道中。往復二十四時間。《塵も積もれば山となる》だから環境保護のためのお手本的姿勢だ。

ちなみにこの娘達は地球温暖化を理由に長い間車を持っていなかった。が、デュッセルドルフからボンの郊外に越してからはずいぶん車が必要になってしまった。仕事の合間に育ち盛りの三人の子供達を医者や習い事や友人宅などに連れていく必要性に負けるのは仕方がない。最近ではせめて、と電気自動車を購入した。

地球温暖化が問題になっている今でも、ドイツは相変わらず車社会。コロナ禍中は感染を避けたいという理由で、それが済んでも、やっぱり便利な車は増え続け、道路はどこも車だらけ。ドイツでは重要な自動車産業を元メルケル首相は〈今まで通り方針 Weiter so ワイター ザー〉で奨励し続けて、ベンツもフォルクスワーゲンも BMW も電気自動車への切り替えに乗り遅れた。

温暖化による気温上昇に合わせてか以前はあまり見かけなかった白い車も大分増えた。カラフルな色は消え、シックな黒の大きい SUV をよく見かける。SUV の電気自動車が走るのを見ては、「分かってないねー」と夫婦してため息をついている。自分達が若かった頃、環境のことなど考えもしないで車を飛ばして地球を痛めてきたことは棚に上げて...

《知らぬは仏》とはよく言ったものだけど、老夫婦としては今や自分達の罪を知ってしまった... で、自分達にできることはと、ソーラーパネルを設置し、地熱利用のために地中掘削工事をした。役所に許可を得た後、道路側に深い穴 7.5 メートルを二本掘る工事中、道行く人が聞いてきた。「そんなことして、元取れますか？」夫は正直に「工事費が高いので、私の年ではもう元は取れないけど、あなた達の世

代だったら、元取れると思いますよ」そして、最後の車として電気自動車も購入した。大きな旅行をしたり休暇をする代わりに、孫達の世代にお詫びの印の出費。

ところで、日本の路上に賑わう軽自動車は可愛くて好感が持てる。実用的で環境にもお財布にも負担が少ないらしいから、アウトバーンを走れない私の夢の車だけど、ドイツでは見たことがない。

5 ドイツの子育て 日本の子育て

新生活を始めた家は、玄関を一、二階の四家族が共同に使う形式のマンションがずらっと並ぶ一角にあった。駐車できる行き止まりの道路から延びる歩道を、並んだバルコニーと遊び場の間を歩いて行く突き当りにあった。これが子育てに理想的な場所だとは学生として住んでいた時期は知らなかった。

長女はお正月過ぎに生まれるはずだったのに一か月早く生まれた。出産一週間後に退院して、ウキウキとして手伝いに来た義母と夫と赤ちゃんの乳母車を押していきなり散歩に行った。予定日より一か月早く生まれてきた赤ちゃんだというのに、手荒いと内心想ったけど、「赤ちゃんは十分大きいから、一か月早く生まれてきても問題ない」という担当医の折り紙付きだったので、生まれた途端にそのことは余計な心配ということになった。

散歩の後は、赤ちゃんが眠っている乳母車のベットの部分を「バルコニーに出しておいたら良い」と義母が言う。洗濯物でもあるまいし、こんな寒い真冬にと新米ママはぞっとしたけど、「私はもっと寒い所で、そうして赤ちゃんを鍛えた」と義母。それならと同意する夫に負けて、別に日本での子育ての様子を知っているわけでもないのと言うとおりにした。あったかい羽毛のベビー布団をかけて頭に毛糸の帽子を被らせて手袋をはめてあげて。赤ちゃんはぐっすり眠っていた。冷たい空気が気持ちがいいのか、散歩中も、その後のバルコニーで置きっぱなしの時間も実に良く眠っていた。夫は通勤し始め、義母が帰った後も、それが日常になって、おぎゃーおぎゃーとも泣かないでスヤスヤ眠って、授乳の時間が来ても邪魔しないでとでも言うかのように眠っていた。

そう言えば、まだ入院中だった時、眠ってばかりいてお乳を飲もうとしない新生児の我が子を心配する新米ママを横目に、赤ちゃんの耳の後ろをつねって（これは夫が目撃した）授乳の時間よと起こしながら、看護婦さんが言っていた言葉を思い出した。

「本来はお腹の中で眠っている時期なのに少し早すぎて生まれたから、食べるより何より眠らせてっていうことなんですよ」

しっかり座れるようになった赤ちゃんを抱っこして、遊びに来た義母は砂場に祖母としてデビューした。小さい赤ちゃんだしと思って遊び場にはまだ行かなかった私を横目に、義母はほかの子供が遊ぶのを見るだけでも刺激になって良いと積極的だった。まあ《郷に入っては郷に従え》と義母を見習った。分からないからと何か

と尻込みだったけど、義母の手引きで遊び場に行く勇気がでて、段々と近所の人との行き来も始まった。

二人目、三人目が生まれる頃は遊び場の常連になった。ちょうど行き止まりの道で、リビングの窓から砂場の子供達が見えたから、ちょっとだけ周囲のお母さんに見てもらって、食事の下ごしらえまでできた。ドイツ人は夕食はパン食の家族が多いから昼食後の午後は至ってリラックスしている。私は夜は暖かい物を食べたかったから、夕食の支度の時間も計算して砂場参りの日々だった。子供達も窓から遊び場にだれかがいるのを見ると、自分達から出て行くようになったから、恥ずかしがりの子供達には常連という立場は大分ありがたかった。近所から遊び場に集まって来る子供達は我が家の三人の内だれかしらとは近い年頃だったから、午後家で個人的に遊ばせる相手としてももてはやされた。だんだん大きくなってきたときには、我が子達は遊び場から最後の子供がお母さんに連れられて家に帰るまで外で遊んでいた。遊び場の隣には同じ形の建物がティー字のように建っていて緑の芝生の大きな空間が広がっていたから、自由にボール遊びなどができた。ちょうど放映されていた子供達が好きな『ハイジ』の番組を見せてあげようと家に連れ帰ったりすると「こんなにお天気が良いのにテレビを見させるんですって」と変に見られた。当時はそんなにもお天気が良いときは子供は外で過ごすべきという風潮だった。

娘達が母親になってからも、幼児の子供達を外で遊ばせるのには毎日熱心だった。

遊び場ではいろんな躰の仕方が見えた。

「ママ、あの子が僕のシャベルを取った」と泣きながら言いに来る子供に対して、「取り返してきなさい」という母親もいれば、「ちゃんとぼくに聞いてから、取ってよ、と言ってらっしゃい」という母親もいた。「そのシャベル使ってもいいから、君のこれ使わせてって言えば？」という母親もいた。はっきりした態度をとっている母親を眺めるのはそれは興味深かった。その対応の仕方によって、私にも気の合うお母さん友達ができた。

盲目の女の子も毎日遊びに来るようになった。その子ケアスティンの親は何でも普通の子と同じようにやらせる方針だった。砂場でシャベルとバケツとふるいで遊ぶのはもちろん、滑り台もブランコも全部どんどんやらせた。やがて我が家にも遊びに来て勝手知らない子供部屋で、何やら一緒に遊んでいた。長女と次女の間の歳だったケアスティンの家にも子供達は呼ばれていった。子供部屋には父親が娘のために作った縄づくりのジャングルジムのような遊具もあった。

やがて学校に入るようになったケアスティンのために、父親は会社勤務の傍ら点字を習って教科書を点字で全部書き写したそうだ。

ある日、引っ込み思案の長女が私に言った。

「ママ、今日の午後、私ダニエルを呼んで家で遊びたいの」

私はダニエルのお母さんに聞いた。

「今日の午後、うちにダニエルを呼びたいのですが。娘と一緒に遊びたいって言っているの」

するとダニエルのお母さんは息子に聞いた。

「ダニエル、今日ナオコの家遊びに行く？」

「いや、今日は後から、僕は一人で遊ぶんだ」

母親が、娘に言った。

「今日はその気にならないって。また次の時ね」

ダニエルは娘と同じ歳で、遊び場と家並の間にある歩道を流行っていた歌を大声で歌いながら子供用自転車でいつも行ったり来たりしている元気いっぱいの男の子だった。

二三日後、玄関のチャイムが鳴ったので開けるとダニエルがいた。

「ナオコいる？」

娘を呼んでくると聞いた。

「ナオコ、僕んどこに遊びに来ない？」

喜んで付いて行った娘の後姿を見ながら思った。ああして、後々たくましくプロポーズできる男の子が育つのか。

確かにドイツの親達は、子供達のことを尊重して、いつも子供に聞いていた。

「君はどうしたい？」「あなたはと思う？」「どうして嫌なの？」

子供は幼いなりにもいちいち自分に問いかける訓練が出来てくる。自分のことは自分で考えて決めるという姿勢が育つ。

その遊び場に来るダニエルや近所の子供達のお陰で、引っ込み思案の我が子達は、大分普通に振舞えるドイツ人の子供のようになっていった。

やがて、夫の勤めの関係で日本に引越すことになるのと並行して、ダニエルの父親もペルーに駐在勤務となった。

クリスマス前の日本に引越した。あてがわれた家からは小学校も幼稚園も近く、自転車で行けば何でも買えるダイエーにも行けた。散歩するのにちょうどよい距離に芦屋川や海岸があり、ドライブすれば六甲山にも登れるので夫も大喜びだった。ドイツ中部に住んでいたなら、山も海岸も日常生活に組み入れることはできなかったけど、その新しい住処では両方が手に届いた。冬の真っ最中だというのに、ジャン

パーも着ないでサイクリングが楽しめた。それでも、お天気が良くても子供の遊び場で子供達を見かけることがなかった。子供達はどこにいるのだろう？

幼稚園に入った次女は灰色の上着とジーンズの半ズボンを身に着けると毎日張り切って通い始めた。

毎朝起きるとさっさと制服を着て出かけるのを楽しみにしていた次女が、ある日元氣なく言った。

「ママ、今、丸虫さんとカブトムシさんの遊びをしてるんだけどね、私、丸虫さんを蹴りたくないの。カブトムシさんは丸虫さんを蹴飛ばさないとならないから、私幼稚園に行きたくない」

「じゃあ、ママが先生に聞いてみるね」

幼稚園に行って、担当の先生に聞いてみた。

「娘が、ただの遊びでも、丸虫さんを蹴飛ばすのが嫌だと言って、今日来たがらなかったぐらいなんです。その時だけ、見ているだけにしても良いですか？」

「例外を作るとみんながそうしたいと言い始めるので、例外はできません」

仕方がないから、娘に言い聞かせて幼稚園に置いてきた。

翌日、隣の街にあるドイツ学園の幼稚園部を訪ねた。快く迎えてくれて、その日は午前中一杯一緒にドイツの子供達と遊んでいた。少数の子供数で、遊ぶのにもまるで自分の好きなことをする自由そのものだった。先生は、子供達は何をしていいかわからないとき、図工や他の遊びの提案をしたり、子供達がまずい空気になると間に入って調整するというぐらいのもので本当に自由そのものだった。

家に帰ってきてから娘に言った。

「今日のドイツ幼稚園に毎日行きたいんだったら、家の前までバスが迎えに来てくれるから心配しなくてもいいのよ。今まで通りにしたいんだったら、それもいいけど、そうするとみんなと同じように丸虫さんを蹴飛ばしたりして遊ばないとね。どっちでも良いから明日までに自分で決めてね」

その後はいつものように姉弟と遊んでいた。翌朝になると、さっさと灰色の制服を着た娘が言った。

「私、やっぱり今までの幼稚園に行く。丸虫さん蹴飛ばさなくちゃならなくても行く。幼稚園にいるマツダのお兄ちゃんが、毎朝、オハヨーって優しいから行く」
大きくなる準備としては、自分がいろいろ考えて自分で決めたりするのも大事かもしれないけど、まだ幼い頃は、優しく理屈なしに支えられるような環境が子供心には安心できて好ましいのかもしれないと思った。

そういえば、長女がドイツの幼稚園に入ったばかりの頃、庭で飛び回っている子供達の中にどうやって入って行っていいかわからない引っ込み思案の娘は、幼稚園の先生の隣で佇んでいた。たまたま見かけたその後ろ姿に私は寂しい思いをした。ドイツの先生は子供達がみんなで騒ぎながら遊具で遊んだり、お互いにふざけたりして遊んでいる様子を安全性を気にして見守っているだけかも知れない。先生の隣に立って他の子供達の様子を見ている内気の子供が、遊びの輪の中に入れないでいるのに気が付かなかったのか。それとも、その様子を見ても、子供が輪に入っているようにちょっとだけ後押しをしてあげようという気は起らなかったのか。ドイツでは、幼い頃から自分で自分の置かれた場所での振舞い方を、人に頼らないで一人でいろんな体験をしながら学んで大きくなっていくのかも知れないと思ったものだ。それで、次女は結局、「マツダのお兄ちゃんが、毎朝優しくオハヨーって言ってくれるから、丸虫さん蹴飛ばさなくちゃならないけど、今までの幼稚園に行く」と一人で決めたのかも知れない。幼い子供にとっては、心から優しく対応してくれる大人がいるのが一番の力になるのかも知れない。

やがて長男も同じ幼稚園に通うようになり、入れ替えに次女は姉の通う近くの小学校に入学した。

息子を迎えての帰り道、友達になったヒロシ君に、息子が直接聞いた。

「ヒロシ君、今日僕の家遊びに来ない？」

「僕、今日は家で自分で遊びたいことがあるんだ」

ヒロシ君が答えると、ヒロシ君のお母さんが言った。

「ヒロシ、それは失礼でしょう。自分で遊ぶのはいつでもできるんだから、折角だから今日は一緒に遊べばいいじゃない」

慌てて私は言った。

「子供なんですから、失礼も何もありません。気にしないで、子供の好きに遊ばせてあげてください」

お母さん達が自分の子供の前で、自分の子供はダメだとか、言うことを聞かないとか、他のお母さん相手にこぼしているのを耳にした。子供はほめて自信をつけさせないといけないのに、他人への礼儀のために自分の子供をだめだと謙遜する。そばで聞いている子供は、母親が必ずしも本心ではなく、ただ謙遜して言っているだけという大人の感覚は分からないから、僕は、私は、ダメなのかと母親の言葉で悲しくなったりしないだろうか。傍でそんなことを耳にしなければならない子ども達を可哀そうに思った。日本人に比べたらほめ上手でもないドイツ人でも、自分の子供の前で、子供の自慢はともかく悪口を言うのはあまり聞かなかった。

ちょうど大切な子育て期にドイツと日本の両国の様子を目の当たりにできたのは幸いだった。ドイツの子育てと、日本の子育ての違いを見ながら、自分でも手探り状態だった。それぞれの文化に短所長所があるから、どちらが良い悪いとかは言えないと思うことが多かった。それでも、周囲の影響というのは、親の影響より強いかもしれない。

日本に引っ越してきて近くの小学校に入学した長女が小学校三年生になった頃、娘は何かというと私に聞いた。「ママはどう思う？」自分で決められない優柔不断は私だけで充分と思っていた母親として、これは望ましい発展ではないと思った。子供達は将来ドイツ人の間で揉まれながら生きていかなくちゃならないのだから。

「あなたはと思う？」と相手に聞いてばかりいたら、〈自我〉は当たり前で、我がままでも何でも無い社会で自我欠乏で大変つらい思いをすることになるかもしれない。

そんなことを考えていた矢先、夫が次の年にドイツに帰国するとのお達しが来た。夫婦であれこれ考えた挙句、息子の小学校入学に合わせ、長女がドイツの小学校で最終学年四年生の一年間を過ごせるように、夫を日本において一足先に子供達とドイツに帰ることにした。

初めはドイツの幼稚園で、朝は自分で持参したパンなどを食べて、子供用に作られた小さな流し場で自分でお皿を洗い、何をして遊ぶか自分で決めて遊び、やがて皆で好き好きに外で遊んで、母親の迎えまで過ごした。

やがて引っ越した日本の幼稚園では、子供達に用意された幼児教育に基づくプログラムの下に遊びや工作などをして、みんなで一緒に半日を過ごした。

我が子三人は、幼稚園と小学校でそれぞれの体験を一杯抱えて、再び、ドイツでそれぞれに自分で考えて行動するのが当たり前の環境に身を置くようになった。いつも自分で考えて行動してばかりいたら、自分勝手な人間になるのではないかという怪訝は、いろんな経験をし、いろんな子供や大人の行動を見ながら、常にスポンジのように吸い込む能力のある子供達にとっては、老婆心のように思える。何かをするのにも他の子供達との折り合いや配慮が必要だということは、ドイツでも子供なりに考えながら大きくなっていくらしい。ただし、明らかなのは、日本での子供時代を少しでも体験した我が子達は、それなりに思いやりや協調精神を身に付けていたから、すぐにドイツ人の良い友達も何人もできて、大した問題もなく以前のドイツの文化社会での暮らしに切り替えることができたようだった。

少しおまけの情報だけど、今八〇歳以上の友人達からは、それでも驚くようなことを聞くことがある。「私が子供の頃は、大人に対しては何でも、Ja ヤー（は

い)と言わなくちゃならなかった」あるいは「今の若い人達は、どうせ何でも知ってるからね」年配に対する尊敬心が足りない、という不満と失望の言葉。ドイツでも、昔は日本と同じような状況だったことを知って驚いたのは一度や二度じゃない。

6 《玄関の靴》について

西洋の暮らしでは家の中に土足で入るのが当たり前と思っていた。そのとおり一昔前はドイツ人は家の中に入っても靴を脱がなかった。今では家の入り口で部屋履きに履き替える人も大分増えているけど、日本のように厳格に分けているわけではない。

「ドイツ人にとって靴は身に着ける衣類の一部だから、脱ぐように要求するのは必ずしも楽ではない」

教えてくれたのは知り合いの年配の建築家ゴーツさんだった。

そういえば、その昔、エリザベス女王の日本訪問の際に〈人前で靴を脱ぐのは女王にとっては初めての体験だ〉という新聞記事があったのを思い出した。ストッキングをはいているとしても、足を人様に見せるのはかなりプライベートなことらしい。

日本留学をして日本文化のファンとなった夫は、お客様には家の中では日本式に靴を脱いでもらうことにした。この夫の強い意志がなかったら、靴で家の中にどこかどかと入られるのは嫌だとはいえ、私一人ではこの習慣をドイツ人相手に主張できたかどうか自信はない。

そのぐらい日常の暮らしの中で、靴は衣類の一部になっている印象がある。例えば、医者診察でベットに横になる必要があるときでさえ、靴のまま横になるので、ベット下方の靴がのる辺りは靴でベットが汚れないようにわざわざ厚いプラスチックの敷物が置いてある。

それでも最近のソファの宣伝チラシなどには、リビングで靴下でリラックスする様子の写真が載っていたりして、時代が変わりつつあるのを感じる。

夫はドイツ人に日本の靴の習慣を説明するとき、「日本では泥棒でも玄関で靴を脱ぐんです」と言う。実のところ、私はそれは本当かどうかわからない。日本では靴を脱ぐのはあまりに当たり前なので、泥棒のニュースが新聞に出るにしても、その泥棒が土足で侵入したかどうかについてはどこにも書かれていないから。

ともかく玄関先での面倒な説明を避けるために、初めて我が家に来る人には、玄関先で靴を脱いでいただきます、と予め警告することになっている。そうすれば、多分脱ぎやすい靴を履いてくるんじゃないかという期待も湧く。

一度その警告を忘れてしまったことがある。美しくおしゃれをしてお茶に来たそのお客様は、決まりとあらばと嫌な顔もせず家に入り口でその素敵なブーツを脱ぎ始めた。そのブーツは素敵なだけあって、その分脱ぐのもかなり厄介な代物だった。なるほど知り合いが教えてくれた通り、そのブーツは装いの一部になってい

た。やっと脱げて、日本のスリッパを履いた時には、装いの決まり具合は台無しになってしまった… 折角、上から下までおめかしして来た彼女の内心の失望を想像すると、我が家の靴脱ぎ方針がぐらついてしまう。

靴を脱ぐ玄関先のあれこれを長年体験した後、夫が退職して玄関先担当になってから、やれやれと大分肩の荷が下りた。

結婚当初住んでいた社宅に、ある日職人さんが窓の点検に来た。辺り一帯の建物を二重窓にするための下見だった。家の入り口で、まだドイツで靴脱ぎ交渉の経歴の浅かった私は、作業用の青い胸当て付きズボン姿の少々お腹が出てがっしりした職人さんを前にして恐る恐る頼んだ。

「すみませんが、我が家は日本式なので靴を脱いでいただけますか？」

すると職人さんは涼しい顔をして答えた。

「靴脱いだら、もっと汚いですよ」

そんな返事は想定外だったので、返す言葉がなくて口をバクバクさせている私に、

「じゃあ、敷物を持ってくるから」

と出て行った。断固として靴は脱ぎたくないらしい。嫌な顔もしないで、大きな敷物をフロアからリビングまで広げている職人さんに感謝の気持ちを込めて言った。

「準備がいいですね」

「なに、高級じゅうたんを敷いている家では、俺達が仕事靴でどこどかと上がると嫌がるから、こんなものを用意しているんですよ」

当時、我が家では間に合わせのただの敷詰めカーペットだったから、職人さんはきっと内心思ったに違いない。…こんなどうでもいいカーペットなのに、何だって靴脱げっていうんだろう？意味が分からない…

幸いにこの職人さんは前向きの人だった。面倒な頼みにご機嫌が悪くなることもなく、さっさと窓際に行って自分の作業を進めた。ブラインドのテープを点検していた職人さんはそのテープが捻じれているのを見ると、ニヤツとして言った。

「これも日本式ですか？」

空気を和らげる効果のユーモアを心得ているドイツ人達は、初めの頃、何にでも自信がなくてオロオロしがちだった私を助けてくれた。ユーモアというのは、優しい人が発する言葉なのかも知れない。

ちなみに、職人さんが靴を脱がないのは仕事中に足の怪我をしたりしたとき、靴を履いていないと仕事に適する身支度が出来ていなかったということで、医療保険支給が下りないこともあるからだと後になって知った。

ドイツではいつどこに行っても、家の中が本当によく片付いてきれいになっている。それでも、靴で家の中を歩くことを考えると、ゴミが落ちていたり、シミになっていたりしない限り、つまり実際にこれと目に見えなければあまり汚いという感覚がないのかなーと思うこともある。

でもその代わり、衣類の一部の役目を果たすというドイツ人の靴はいつもきれいで泥などついていたためしがない。〈路上で足を保護するために履く靴〉の観念がある私は玄関先で使命を済ませた靴を脱いでは、さっさと次の行動に移ってしまう習慣があるので、次に出掛ける間際に靴を履くときになって慌てて磨いたりする羽目になる。磨き忘れて、出先でギョッとして赤くなったこともあった。

家を建てる時、家に入ってからすぐに靴を脱ぐ習慣のことが一目瞭然になるようにと、日本式の玄関を造ることにした。玄関のドアを開けて、タイル張り床上に靴が並んでいて、木の廊下は一段高くなったところから始まっているのを見れば、自然に他の人も靴を脱ぐのではないかと思った。その思考経路については私はもちろんドイツ人の夫も疑いもしなかった。

ベージュの板張り床と薄グレーのタイル張りの間の段差が目立つようにと、日本通の建築家ゴーツさんが、段差の側面用にわざわざきれいな木目のあるこげ茶色の板を取り付けた。ゴーツさんの義理の娘は日本人だったから、ドイツ人建築家でも日本家屋を良く知っていた。だが、それは甘い期待でありとんでもない予測だった。段差があっても、何も言わないと、だれでもそのままよっこらしょと段差を超えて靴を履いたまま入ってくる。

義母のために往診の医者呼んだことがある。（ドイツでは往診の先生に看護婦さんは付いて来ない。）

「すみませんが、靴を脱いでいただきたいんですが」

玄関のドアを開けて入ってきた往診の医者に言うのには、正直大分勇気がいった。医者は診療カバンを手にしたまま、一度入った玄関の外に出て玄関のドアの外側で靴を脱いで入ってきた。私は恐縮して慌てて言った。

「いえ、いえ、どうぞこちらの段の前までいらしてから、靴を脱いでください。」

「別に、もう脱いだからいいですよ」

と気にもせずに、靴下でタイル張りの靴脱ぎ場を歩いて一段上の廊下に足を延ばした。どうぞと勧めたスリッパも履かなかった。二度目の往診時も、三度目の往診時も、恐縮しながらの説明は何の役にも立たなかった。往診の先生の靴は、毎回家の外で北風の中を辛抱強く御主人様を待つ運命になった。

それから仕事で家に来る人には靴カバーを用意した。玄関先の交渉はできるだけ夫に任せる。電気メーターのチェックをする人など、ほんのちょっと地下室に行くだけなのに、靴のことでガタガタ言うのに気が引けてしまう私と違って夫は徹底している。個人的にそれぞれのやり方があるのは当たり前のドイツ人は面倒がったり気分を害したりしなかったが、日本人としてはやはりこちらの都合で相手に面倒な思いをかけることに恐縮してしまう。たかが二、三分家の中に入るだけなのに面倒だろうな、悪いなーとやはり言いにくい。

加えて、我が家には犬がいたので、もしかすると靴を脱ぐように言われた人が、「じゃあ、お宅の犬は靴を履いて散歩をするのですか」と聞いてくることもドイツでは考えられる。

それに備えてと言うわけでもないが、我が家の犬達は森での散歩の度に庭先で足を洗わされる。足を濡らすのが好きじゃないらしい犬達は、この習慣にはいつまでたっても慣れずに足を引っ込めるので、「日本人の家だから、これも運命、我慢してねー」と毎日奮闘する。

夏など、夫や子供達が「土が乾いてるからきれいな足だからいい」と言っても、見えなくても馬の糞などを踏んだかもしれないから洗ってちょうだい、と日本人妻兼母は主張することになる。

ついでながら、ドイツの森や路上に堂々と散歩のアリバイとなっている馬の糞は、犬のそれに比べるとずっと量的に勝っているというのになぜか特別扱いらしく、乗馬して散歩する人達は特に糞用ビニール袋を持つこともない。馬を飼っている友人は、馬の糞は植物の栄養になると肥料の代わりに私に持ってきてくれた…。

どうも日本人ほど体が柔らかくないドイツ人にとって、靴を履いたり脱いだりするのとはしばしば大ごとになる。立ったままだと体がゆらゆらとしてしまうので、座らないと靴が履けない人がいる。靴ひものある靴だと膝まずいて履く人、よっこらしょとタイルの地べたに座り込む人！

日本人だったら当たり前のように廊下の端の段差の上に座るのに、ドイツ人にはその段差が目に入らないのか、その段差を無視して、タイル床に素足で下りて、靴を手にして廊下にまた上がって、目先にある二階への階段によっこらしょと座り込んで靴を履く人も一人ばかりではない。段差と階段は同じような高さだということに。上がり口に置いた椅子も相手にされない。

日本式にお客様が気付かないうちに、靴をそろえて出口に向けて履きやすいように並べる。でも、その日本的思いやりは無残にもまったく余計なことになる。板張

り廊下から一段低くなっているタイル貼りの靴脱場にきちんと並んでいる靴に足先をエレガントに滑り込ませた人は、築三十四年来いまだかつて一人もいない！ただのポンプスでも同じ。せっかく揃って並んでいる靴を手にとって、わざわざまた冷たいタイル上に靴下で降りて、こっちを向いて腰をかがめて頭を下げて靴を履く。長い靴べらを用意してからでも同じこと。

その姿を一段上から見方としては、「苦しゅうない」とばかり立って見下げる侍的気分になってどうも気が引けるので、知らずのうちに日本式に玄関先にひざまずく。

今はタイル上にジュート素材の敷物を置いたから少しは冷たくないし、靴の底から落ちる砂状の汚れが靴下につくこともない。もっと早くにこの方法を思いつけばよかった。日本人の私が我が家の玄関を出入りするドイツ人のために、あーでもない、こーでもないと考えているなど、彼らには思いもつかないだろう。

時代は変わって、すべてが格式張らなくなってきたドイツでは、考え方も実用的になった。靴を脱げば床も汚れないしリラックス気分になる。普通のコップと違って皿洗淨機に任せられないクリスタルグラスも高価な磁器の食器も好まれない。お葬式にも普段着でとお知らせに書かれている。いつでもどこでもジーンズで通るようになってきて、便利で楽だけど、なんだか味気ないな～と思ってしまう。以前は衣類も調度品も使い分けがあって、暮らしにけじめが付いて品があった。

赤茶色の鼻緒が気に入っている桐の下駄、時代と故郷の象徴として自室の壁の飾りになっている。小さい町の靴屋さんにあった見つけものの新品だから、故郷の土は付いていない。

7 人生が変わった子犬のアキ登場

駐在員家族としての日本での暮らしに名残を惜しみながら、私は子供達と一足先にドイツに戻った。一年間の母子家庭の後、夫が加わって、再び私にはホッとする状態になった。日常生活の責任を半分負担してもらえるから。

新しい家に引っ越して来て間もない時だった。宅地用に売り出されたばかりのニンジン畑を買って建てた我が家の隣人は大切な元地主。そのドルパーさんとまだできていない想定上の垣根越しのおしゃべりをしていた夫が家の中に入ってきて言った。

「街の朝市で野菜を売っているドルパーさん、先週の水曜日と土曜日の朝市では、生まれて間もない子犬をかごに入れて置いたんだそうさ。知り合いの人が、飼い犬が十匹以上もの子犬を生んでしまったと困っていたから。野菜スタンドの隣に、モソモソ動く子犬を何匹か入れたかごを置いておいた。そしたら、野菜を買いに来たお客さん達は、思いもかけなく見かけた子犬を可愛い、可愛いと、何匹かがもらわれていったんだって。その子犬の飼い主の家は遠くないそうだから、見に行ってみようか？」

夫は多分週末の楽しみとして子供達を誘ったのだと思った。私も子犬がもごもごと動くのを見たい一心で、テレビを見ている義母に言った。

「ちょっと子犬を見に行くので出かけてきます」

すると義母は左手を振って、自分の胸を叩いて言った。

「Ich, Ich. (イッヒ、イッヒ)」

〈自分がいるから、あなたの仕事は十分にあるのだから、犬など飼ってはダメ〉というジェスチャーと取れた。

義母はその二年前、夫が日本駐在からドイツ勤務に戻る一年前に、脳梗塞で右半身が不自由になった。リハビリ入院もし言葉も訓練したけど元に戻ることはなかった。言えるのは、イッヒ（私）、ヤー（はい）、ダンケ（ありがとう）、ナイン（いいえ）だけだった。

「大丈夫、ただ見てくるだけだから」

私は小さいワンちゃんを頭に軽い気分でそう答えた。「見るだけ」まったくの本心だった。義母は「どうかな～、知らないよ～」とでも言いたげに、天井を見上げて目玉をぐるぐると回した。さすが、人は歳と共に物事を見抜く能力が鋭くなると悟ったのは、それから一時間もしないうちだった。

十分程車に乗った後、ヴィラのような古い威厳のある建物に着いた。階段を上がると若い夫婦が出てきて子犬のいる部屋に案内された。

木の床の部屋は子犬だけに開放されていた。同じ色の子犬が何匹かいるのだと想像していたが、そこでちょろちょろ動いていたのは、白あり、黒あり、白黒の水玉あり、茶色あり、選り取り見取りの子犬だった。

ポルトガルでの休暇中に、飼い犬の雌犬が、浜辺でウロウロしていた野良雄犬にちょっかいを出されたのは一度ばかりじゃなかったそうだ。結果として、こんなにもいろんな色の組み合わせの子犬が一度に同じ母親から生まれたらしい。

まだ生まれて八週間という子犬達は、母犬の周りでおしくらまんじゅうをしながらくっついてお乳を飲んでいたり、追いかけてっこしてたり。

愛くるしい様子の子犬達を、三人の我が子はワクワクしながらうっとりとしと見とれていた。《なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし》清少納言は良くぞ申して下さいました！

やがて、夫が口を開いた。

「君達、どの犬が欲しい？」

子供達は突然の父親の言葉に呆気にとられた。父親の言葉が信じられないらしく、三人揃って言葉もなく父親の顔をしげしげと見上げた。

私も呆然とした。〈だめ！結局、仕事が増えるのは私なんだから、いやだ！だめ！そう言え！〉と自分をけしかける声が頭の中で聞こえた。だが、どうだろう、口から出たのは――

「どうせ飼うなら、この茶色の…」

子供達はまたしても目をまん丸くして、今度は三人揃って一斉に私を見上げた。

自分でも自分の言葉が信じられないでいた。言葉を発してしまってから、さくらいまるこちゃんのように、額に縦じわができるのが感じられた。唯一の茶系色の子犬だった。

「一匹残るとしたら、この子犬を僕達の犬にしようと思っていたんですがね。一番小さいのに一番賢い感じで愛嬌があるから。まあ、いいです。この犬を是非というのでしたら」

若夫婦が言った。彼らもドルパーさんから隣の子供達に子犬を見せてやると聞いていただけなので、まさか、子犬が引き取られるとは思ってはいなかったようだった。

ドイツでは日曜日は今でもお店はどこも閉まっている。キリスト教の安息の日曜日、週末は家族で過ごす法律だ。当時は、土曜日でも午後二時になると一斉閉店になった。

「犬を飼おうとは思ってもいなかったなので用意は何もないし、もうお店も閉まってしまったので、週末の分だけこれで餌をください」

そう言いながら、夫は若夫婦に二百マルク（当時約二万円！）を差し出した。

後日、「雑種犬にお金を払うバカがどこにいる」と近所の人に呆れられた。（ドイツ人には単刀直入な表現力を磨かれる。）

子供達はベージュっぽい茶色の体で胸の辺りが白っぽくなっていて、耳の淵と口先がわずかに黒くなっている愛らしい子犬を、交代に抱っこして車に乗った。車の中では子犬を誰の膝の上にのせるかもめていた。九歳、八歳、七歳の子供達は三人ぎゅうぎゅう膝を寄せ合って、子犬の体が誰のところにも公平にいきわたる様に、子犬の頭から尻尾の先まで伸ばして、それぞれに子犬の体温を感じた。まったくまったく突然に、可愛い子犬が自分達のものになったことが信じられなかった。

三人で子犬をなでながら、名前をどうするか話し合っていた。

すると、運転しながら夫が前方で言った。

「アキにしよう。本当は秋田犬が欲しいと思っていたけど、気が強い犬のようだからいい、せめて名前だけでもアキにしよう。たまにはパパが決めたっていいだろう？」

父親のその言葉に子供達は「ぎゃふん」だった。パパはいつだって自分で決めているじゃない！それでも、その名前は子供達にもすぐ気に入った。その子犬にも気に入ったらしく、途端に子犬のお尻の部分がのっているズボンが濡れた。

「アーッ、アキー！」

子供達は一瞬にして生きている犬を飼うということは、何を意味しているのかを実感した。子犬のアキは、我が家の一員になってすぐにしっかりと家族の潤滑油の役割をし始めた。秋の深まる時期だった。

家までの短い車中、ふっと気がついた。犬を飼うのは、きっと夫の子供の頃からの夢だったのだ。そう言えば、子供の頃ときどき知り合いの家の犬の散歩をしたと言っていたっけ。夫はあの愛くるしい子犬達を見た途端に、喉から手が出るくらい欲しくなってしまったに決まっている。見る者の心を純粹にしてしまうような子犬達を眺めているうちに、きっと子供心に返ってしまったのだろう。欲しい！大人になって自分で何でも決められる身になった。自分の庭さえできたというのに、犬を飼う夢を実現させない理由はない。今がチャンス！…

何を隠そう、そう言えば私だって子供の頃、親に聞きもしないで友人宅から生まれたばかりの子犬をもらって帰ったことがある。父も母も呆れたけど、やはり可愛さには抵抗できなかった。

昔は日本では犬は犬小屋で鎖に繋がれて飼われていた。大分可愛そうな飼い方だったと今になって辛くなる。真っ白の私のワンちゃんチロは、二歳の時に死んでしまった。辺り近所で三匹ぐらいがほぼ同時に急に死んだから、伝染病か毒盛りに違いないという噂だった。

ある日、アキの散歩がてらに森を抜けて小学校に子供達を迎えに行った。

子犬のアキを抱っこして校庭の出入り口で待っていると、突然アキが腕から飛び降りて校庭に飛び出して走り始まった。

ちょうど教室から出てきた二年生の息子が「アキ！」と追いかけて始めると、周りにいた子供達も一緒になって追いかけて、「アキ！」「アキ！」と呼びながら校庭を走り回った。子犬のアキは調子に乗って、ますます一目散に走った。ちょうど下校の時間、子犬の後を追って走る子供達の数が増えるばかりだった。

ドイツの小学校は、二十人前後ぐらいのクラスが二組あって四学年までだから、校庭といっても日本のそれとは比べ物もないぐらい小さい。その分、子犬のアキを追いかけて回す子供達の様子は、毎日校庭でアキを放して見たくなるような光景だった。

三年生の娘の友人のお母さんが近付いてきて聞いた。

「アキという名前はアキヒト天皇にちなんでつけたのですか？」

実はそこまでは考えていなかったが、へ～、すごい名前だと改めて感心した。

ある日曜日の朝早く、七歳の息子が一人でアキと近くの森に散歩に行った。当時、冬の森からは銃のとどろきがよく聞こえた。冬にはイノシシやシカやウサギの猟の解禁時期があった。増えすぎないようにある程度人間が制限しないといけないということだった。(動物愛護意識が強くなった今は、それでも冬になっても銃の響きは聞こえなくなった。)

しばらくすると、息子が一人で帰ってきた。

「アキが逃げた」

と、頭を抱えて玄関先にへなへなと座り込んだ。

森からは銃声が聞こえた。飼い主から5メートル以上離れている場合は、犬が撃たれても飼い主は文句を言えないと他の犬の飼い主から知らされて間もないときだった。

夫はアキを探しに森に向かった。

小さい背中を丸めてうなだれている息子に私はどう声をかけたものかわからなかった。どのくらい時間が経ったかわからない。息子の背中の後ろで一緒に不安感に襲われているだけだった。

私はいつもこんな風に肝心の時にうまい態度ができないダメ母親だった。肩を抱いて慰めなければならないときに、一緒になって固くなって金縛りのようになって、何もできずに子供と同じようにか子供よりももっとおろおろする母親だった。ドイツに住んでの日本人母親として、ドイツではどういう対応をすべきなのかいつも自信がなかった。

突然、息子が立ち上がった。玄関のドアを開けると、ちょうど、困ったな～というような恰好をしてアキが家に近づいて来るところだった。

「アキ！」

と叫んで、家に入れた息子は、アキの横腹を叩いた。

「アキ！逃げたらだめ！」

途端にアキを抱きしめてオイオイと泣き始めた。

あの光景はいまだに忘れられない。息子は幼くして〈愛の鞭〉を本能的に知っていた。息子にとって普段大切なアキを叩くなど思いもよらないことだった。でも、これ以外にはない。

なぜかトルストイの『飛び込め』という短編小説が頭をよぎった。《船の船長の息子が愛猿と戯れながら知らずのうちに、マストの高いところまで登ってしまう。それは男の子が誤って甲板に落ちたら命はないという高さだった。船客も船員も呆然として見つめる中、事態を聞いた父親が来た。ピストルを息子に向けて言った。

「三つ数えるうちに、海に飛び込め！でないとおまえを撃つ。一、二、」息子は海に飛び込んだ。バシッと音がした途端、船長は姿を消した。即座に船員が海から息子を救うためにボートを下した。》

犬を飼うのは子供の情操教育に良いという。まさにその通りになった。我が子達はアキと一緒に成長し、嬉しい時も悲しい時も頭に來た時もアキのカゴの隣に座って、アキを撫でながら、アキ相手に声を出したり出さなかったりしておしゃべりをしていた。

8 三つの例に見る文化の違い

その一

ドイツに住んで九年後、夫の仕事の関係で日本に引っ越した。住み始めた家からさほど遠くないところに、日本家屋一軒がそのまま綺麗な陶器店になっているのを見つけた。開いたままになっている玄関先で、「失礼します」と声をかけて入り、だれも来る様子がないので靴を脱いだ。三十センチ幅程の上がり口にあがり、障子を開けると九十センチ幅の廊下があり、その先は普通の畳の部屋だった。また、「失礼します」と言いながら廊下に一歩足を差し出すと、お店の人が「いらっしやいませ」とスリッパをパタパタさせながら、いそいそと小股で駆け寄ってきた。私にスリッパを手渡すためだった。履いた時にはすでに九十センチ幅の廊下の中ぐらの所に立っていたから、受け取ったスリッパを履いてから一歩で次の部屋に達した。その先の畳の部屋には赤い絨毯が敷き詰めてあった。一瞬、ん、と思ったけど、お店の人がわざわざお店の奥から出てきて差し出してくれたスリッパだったので、履いたまま敷き詰めの絨毯の上を歩き、所狭しと並んだ美しい器に見とれていた。すると、さっきのお店の人がまた来て言った。

「すみません、スリッパは脱いでいただきたいんですが」

外国人ではない日本人の私がそう言われたので、恥ずかしくて赤くなった。それでも、考え込んでしまった。お店の人は九十センチの幅、つまりせいぜい二歩の板の床のために、お客の足が冷たないように、わざわざスリッパを持ってきてくれたのだった！

……でも、きっとお店の人達は裏の方で話していたに違いない。

「さっき来たあの人、おかしい人ね。失礼しますって言って、私が玄関先に行かないうちに、さっさと入って来て上がってしまっ、挙句にスリッパで畳の部屋に入ってしまったの！全然分かってない、日本人の顔してても」

夫が日本で学生だった時、下宿の家のトイレ専用のスリッパを履いたままで廊下に出て居間に行くと、家主さんの家族みんなが「キャー」と言ったという。

日本では、スリッパにもいろいろな役目があって、それぞれ持ち場が決まっている。夫が体験したトイレ専用のスリッパのことは、外国人の間ではかなりスタンダードの日本体験になっているようだ。

その二

ドイツから友人一家が日本の我が家に訪ねてきた。最初はご丁寧に私も同行して案内した。それでも小学校と幼稚園に行っている子供達の面倒もあり、とても忙しくなってしまうので、そのうち、日常生活があるのを理由に、自分達で行動した方が面白いからと朝食後は自由行動にしてもらった。

ある日、並行して我が家で夏休みを過ごすために来ていた夫の高校生の甥も、友人一家と一緒に京都のお寺に行った。

お寺の上り口には下駄が置いてあった。家の入り口では靴を脱ぐのが日本の習慣と我が家で覚えた大柄のドイツ人五人は、その下駄を見て、これはきっとスリッパ代わりに置いてあるのだろうと思った。早速それぞれ靴を脱いで下駄をはいて、よいしょとお寺の廊下に上がって歩き出した。

たまたま向こうからやってきた袈裟を着た若いお坊さんは、大柄のガイジン五人を見て目を丸くしたかと思うと、慌てて背を向けて姿を消した。

間もなく、年配のお坊さんを連れて足早に戻ってきた。年配のお坊さんが下駄を指して、「ノー、ノー」と言って、また入り口まで戻るようにジェスチャーしながら誘導した。下駄を脱がされ、廊下の上にあるスリッパを示された。本物のお坊さんを巻き込んだの文化体験の醍醐味はきっと一生物の思い出になったに違いない。

春休みに友人家族が来た時も、面白い日本体験ができるからと自由行動を勧めた。彼らガイジン一家はレストランに入った。お蕎麦を注文したくてジェスチャーをした。店の外に飾ってあるプラスチックのお蕎麦を示すと、さらに何やら聞いてくる。分からないので、両手を広げて分からないというジェスチャーをした。やがて運ばれたどんぶりの中には、〈灰色のヌードルと白いヌードル、両方〉だった。

「お蕎麦がいいのか、うどんがいいのか聞いてもわからないガイジンさんに、じゃあ、どっちも入れておこうという気遣いだったのね、そんな風に食べた人は日本広しとあなた達だけだわね～」

と感心すると、彼らの日本旅行の楽しみが倍増した。

別なドイツ人友人夫妻が来たときは、自分達で行動して帰ってくるなり言った。

「日本は、私にはうるさすぎる」

「どうして？」

「レストランや喫茶店に入るたびに、大きな声で怒鳴られたのよ」

「それは、元気よく一いらっしゃーい！と歓迎している印なのよ。それからテキパキして声を出すことで、空気がよどんで景気が悪いと思われないように」

大きな声で怒鳴るのがなぜ歓迎の意味なのか、どうしても理解できないと首を傾げていた。

その三

義母は子供達がギムナジウム生徒だった時、同じ年頃のアメリカ人高校生ヴェバリーを一年間ホームステイに預かった。その後、夫がアメリカのヴェバリーの家でホームステイをした。そんな関係でヴェバリーは我が家にも何度か泊まりに来たことがある。

ある日の食事中、ヴェバリーが思い出したように言った。

「私の母は、〈ドイツがあなたをダメにした〉と昔よく私に言ったものよ。」

それを聞いて私達は笑い出した。義母が言ったことがあるからだ。

「アメリカが私の息子をダメにした。」

ヴェバリーは留学生としてドイツで一年間過ごしている間に、ドイツの女生徒は特に〈カワイイ〜女の子〉でなくても、〈カワイイ〜〉ジャスチャーや声や素振りなどしないで男子と同等の態度をしていても、男の子と恋愛して結婚していると気が付いた。それで絶対にドイツ人男性を見つけて結婚したいと思ったそう。

ドイツ人男生徒とラブストーリーはあったけど、結局アメリカ人と結婚した。息子が生まれてから一年半で離婚となった。ヴェバリーは、〈カワイイ〜〉ジェスチャーはできそうもない女性だったから、もしかしたらドイツ男性だったら長持ちしたかも？

義母は夫をヨーロッパ紳士に育てたつもりだった。結婚当初、義兄は日曜日でも背広で我が家に来ていたことや、ナイフとフォークでパンを食べていたのを見れば、彼らの母親のしつけの成果には十分納得する。

だが夫は人間形成期の青年期にアメリカで十一年間を過ごした。アメリカ人の多くは、ナイフは最初肉を切るときに使うだけで、あとは右手でフォークだけで食べ、左手は左の太ももかテーブルの上に置く。アメリカでも意識のある人達はナイフとフォークでヨーロッパ式に食べるらしいが、大体の人はやはりフォークだけで食べていた。フォークだけ使って食べると食べる速度が増す。夫は見事にアメリカ式を学び、母親が苦勞した躰をすっかりアメリカに置き忘れてきた。

9 ドイツの森にて散歩中の事件、そしてパーティでの再会

ドイツではゼロや五の付く誕生日には大きな誕生日会を催す人が結構多い。夫の友人からそんな誕生日会に招待された。

食事の間の余興としてマリリン モンローに似た感じの女性が、招待客の間をそれらしく媚た感じで歩いては歌っていた。誕生日会の主人公である友人の隣に立って姿態をくねくねさせて、「ハーピ バースディ トゥー ユー ミスター プレジデントー」と歌う様子はかなり様になっていた。

招待客の夫婦は、ネームプレートでバラバラに男女交互に座らされるので、たまたま隣り合った人と話がうまくできるかどうかで時間の過ぎ方が大分違ってくる。ドイツ人男性は日本人女性と隣り合わせでゆっくり話す機会など普段はないので、大体の人が興味をもって話しかけてくる。

その日も、隣の男性が食事の合間に話しかけてきた。

「ドイツにどの位住んでいますか？」

定番の質問から始まって、やがて、

「ドイツでは何が一番気に入っていますか？」

という質問が出た。

もちろん、即座に答えた。

「ドイツの森です」

「この美しい森と、そこを散策するという習慣がドイツになかったら、きっと、ベートーベンも、ゲーテも、シラーも、ブラームスも、カントも出なかったのではないかと思うほどです」

これは愛犬アキと森を歩きながらよく思うことなので、隣に座るドイツ人へのゴマすりではない。ドイツの森には管理人がいて、人々がどこでも歩けるように自然のままに整備されている。嵐で大木が倒れて道が塞がれても、障害になる大木の部分はすぐに切って取り除かれ、道はまた歩ける状態に戻る。

我が市の中心街に行く近道となる近くの森の中の道路は、日曜日は散歩の人に開放されて車の通行は禁止になる。最寄りの駅に近道の別な森の中の道路は、土曜日の午後二時からと日曜日は散歩人優先のために通行禁止になるので、車で駅に向かうときは、時間によってどの駅を使うべきか気をつけなければならない。

以前、ドイツ人と結婚しているアメリカ人女性のお茶会に呼ばれた時も、ドイツに住んで好ましいのはどこの森にでも散歩に行ける道があることだと話題になった。

さて、隣に座る人が偶然にも森を隔てた近くの住宅地に住んでいることが分かって話しが盛り上がった。その森で時々ジョギングをしていると言う隣人に、「犬と散歩していると犬の飼い主同士で興味深い話をしたり、面白い体験をすることがあるんですよ」と、調子に乗って一番緊迫感のあったシーンの話をした。

— 残念ながら我が家の犬は、ジョッガーが苦手で特に男性だと吠えるので困ってしまいます。あるとき、近付いてくる男性ジョッガー相手に向かって吠え始めたんです。他のジョッガーのように、吠えるのを無視してそのまま走り去ってくれば、すぐに吠え止んだはずなのですが、その男性は何を思ったのか急に立ち止まって私に向かって怒りだしました。犬は私を守ろうとばかり、ますます吠えるし、男性もますます怒るし。

「アンタはちゃんと犬をしつけていないから、犬がこんな態度になる、市に訴えてやる。警官の友人だっているんだから！」

我が犬は吠え続け、男性は怒鳴り続けました。

「さっさと先に行って下さい！すぐに吠え止むから早く行って！」

つい私まで大声を出しました。

すると、その男性、突然に手を伸ばして私の手から傘をひったくって、私の犬に向かって突き始まったのです。

怖かったので、私は犬の前に立ちはだかりながら泣き出してしまいました。

「止めて！止めて！」

「ワンワン！」「ワンワン」

傘でフェンシングのような恰好で突いてくる男性。

やっと、自分が先に進まないうちは事態は収まらないと気が付いたのか、傘を手にしたまま、走り出しました。

泣きながらも、もうかなり頭に来ていたので、背中に向かって怒鳴り返しました。

「私の傘、置いて行って！」

その男性、私の傘を地面に投げつけて走り去りました。毎日犬と散歩していると、まあ、いろんなことがあるものです。—

話し終えながら、話を聞いていた隣人の目と私の目がジッとかち合った。その瞬間、私達二人は全く同時に悟った。隣席の人は、あの時の男性だった。まぎれもなく、あのジョッガーだった。その当人にも、もう記憶の外にあったあの日の森の出来事が突然に蘇ったらしい。

言葉もなく目を合わせたまま、おしゃべりで賑やかだった誕生会のパーティは、一瞬にして深い森の静けさを帯び、周囲全体がシーンと静まりかえった気がした。

スローモーション的にお互いに顔を背けて、誕生会の間、二度とその方向に顔を向けなかった。

「その時の男は、こんな顔でしたか？」と、その男性が自分の顔を平手で上から下まで撫でながら言わなかったのは救いだっただ。言っていたら、私は、きっと『むじな』の男のように「ひえーっ！」と逃げ出していたに違いない。

思いがけなくドイツで犬を飼い始めてから、偶然がつながって結局二十八年間も犬との日常が続いた。毎日毎日ドイツの森を歩きながら、木々や小川のせせらぎにどのくらい癒されてきたことか。森の中でも街中でも犬を連れていっていると、それはいろんな体験と出会いがあった。夫とお茶を飲みながらの懐古話。

「犬を飼うのは家族計画には入っていなかったけど、家族のために最高の決定だったね」といつも一致する。犬は心を豊かにして、人生がバラエティいっぱいになる。

今では三人の子供達の家族は、犬を飼う長女、鶏とウサギを飼う次女、猫二匹を飼う長男とそれぞれに動物を日々の仲間にして暮らしている。それぞれの動物に気持ちと行動があり、それを観察し話題にして楽しいひとときが生まれる。人間をつなげてくれるのは純粋な動物の特技かも知れない。

10 43歳で逝かなければならなかったアネッテ

義兄と夫は、まるでサッカー試合の賭けでもするかのように、どちらの方が先に結婚するか賭けをした。私達が先に結婚して賭けに勝つと、負けた義兄がデュッセルドルフで当時は唯一だった日本レストラン『日本館』に招待してくれた。

同席した義兄のガールフレンドの大人しくて優しいアネッテは、以来一番の仲良しになった。私のまだうまくもないドイツ語に辛抱強く耳を傾けてくれたアネッテとは本当に気が合って、いつもいっぱい話すことがあった。

アネッテは義兄の熱心な求愛にもかかわらず、同棲はしても結婚にはなかなか承諾しなかった。ころっと意見を変えたのは、私達が結婚して三度目の冬に子供が生まれてすぐだった。赤ちゃんを抱いてににこにこしながらじっと見つめていたアネッテは、まもなく入籍し夏には盛大な結婚式をし、冬の終わりには自分も母親となった。

以後、多かれ少なかれ並行して私達は三人の子持ちとなり、一緒に子供達を遊ばせる名目でよく行き来したものだ。やがて義兄一家は仕事の都合でクウェートに引っ越し、夫は日本駐在員となって私達は日本に引っ越した。

クウェートからドイツに戻った義兄一家には、さらに四人目の子が生まれ、仕事の都合で南ドイツに落ち着いた。

日本から戻った私達はドイツ中部のケルン近郊に家を建て、長距離にもかかわらず以前のような行き来が再開した。

義兄とアネッテは偶然にもヘルマン・ヘッセの生まれ故郷のカルフ市に家を見つけた。《幸福とは愛。愛することができる人は幸せだ》そう言ったヘルマン・ヘッセの大ファンだったアネッテ。四人の子を持って、忙しいながらも幸せいっぱいそうだった。

ある日、アネッテから電話があった。予定していた四十歳の誕生日会を中止する知らせだった。長年の育児休暇の後に復帰した職場での居心地が悪いと悩んでいたところだった。どうしても出勤の気力が湧かないので休んで病気証明書をもらうために医者に行くと乳癌が見つかった。即手術日が決められ、入院が誕生日会とかち合ってしまうという。

私達家族は誕生日のお祝いの代わりに、手術後のお見舞いに行った。久しぶりに会う子供達七人は大喜びで一緒に遊んでいたが、大人達は打ちひしがれていた。ア

ネッテは母親も叔父も癌で失っていたので不安もあり、多忙な日々を言い訳に自分の体の変化を長い間無視してしまったという。

翌春二度目の手術の後、義兄の日本出張に伴ってアネッテも日本にやってきた。偶然一時帰国中だった私は東京のホテルに彼女を迎えに行き、気を良くしてデパートの地階は日本文化の要点とばかり二人であれこれ試食して楽しんだ。

その後、手術後のアネッテを気遣う私の両親の待つ実家に向かった。地方の町案内と銘打って散歩をしながら、思い立って姉の一人暮らしの義母の家に寄ると、八十歳を過ぎているのに面倒がらずに喜んでくれた。

「まあ、まあ、こんなところまで、よくいらっしゃいました。ちょうど、てんぷらを揚げたところだから、一口どうぞ」

懐かしい友人を迎えるような初対面の老婦人の様子は、アネッテにはとても印象深く、いつまでも思い出しては話す一コマになった。ドイツでも田舎ではそんな飾らない人々の行き来があるように、日本にもまだまだそんな原風景があった。

すでに両親を亡くしていたアネッテの癌再発には私の両親も胸を痛めた。ドイツでの結婚式に出席した後、観光地を案内してくれた義兄とアネッテを知っていた父は、何とかして喜んでもらおうと一生懸命だった。

二日後、父が予約しておいてくれた浜辺の旅館に泊まった。座敷のテーブルにいくつも並べられたお皿が和服姿の女性の手で丁寧に下げられては、また新しく並べられては下げられるセレモニーの夕食にアネッテは大喜びだった。それでも、三週間前の二度目の手術のショックは深かった。いくら楽しく語り合っても、言葉の切れ目につい悲しさが漂った。

化学療法と放射線治療に頼るアネッテの闘病は続き、二年が過ぎた。回復するかと思うと、別なところに転移した癌細胞が見つかった。やがて、三週間のリハビリ入院の後、アネッテは言った。

「もう、癌はいいの。もう医者には行かない。行くとまた何か見つかるだけだし」

まもなく電話が入った。アネッテの末っ子、七歳のトビアスの声だった。

「僕達も犬を飼った！ヨシっていう名前付けたんだ！」

私が呆れてアネッテに話しかけると、彼女はあっさりと答えた。

「もう癌のことは考えたくないの。犬がいれば、散歩で他の犬の飼い主とほかの話もできるし。その方が気が紛れていいの」

リハビリ入院中に試したダンスや山水画に意欲が湧いた。夫婦でダンスに出かけたり、山水画のセミナーを見つけて本格的に習いだした。描かれた竹や花の絵には

彼女の良い感覚と才能が表れていた。《好きこそ物の上手なり》アネッテは山水画をもっともっと描くつもりでいた。

闘病三年目の一年間は医者に行かずに、子育て真っ只中の母親の毎日そのものだった。子供達の話聞き、学校の雑事の面倒を見、スポーツや音楽教室に送り迎えに忙しいアネッテのために、義兄は車に〈ママタクシー〉というステッカーを貼った。

アネッテは子供達に何も話さなかった。子供まで重い気持ちにしたくない、と。

辛くても、多分いつか子を残して逝かなくてはならない母親には、子供達を精神的に強くする課題があると思っていた私にはもどかしく思えた。健康だから簡単に言えると思われるかもしれない。他人事だから簡単に思ったりしないように、同じ年頃の子供を持つ母親として私は一緒になって考えた。一緒になって考えて、一緒になって悩んで、一緒になって悲しんで、それが彼女のために自分にできる唯一のことだと思っていた。脳梗塞で身体が不自由になった義母の面倒もあり、かなりうつ病的になってしまった私にかかりつけの医者が言った。

「あなたは一緒になって悩まなくていいのです。少し他のことを考えなさい」友人は言った。

「一緒になって悲しがっていたら、元気付けるエネルギーを伝えられない」

義兄の日本出張中、アネッテの手伝いに行った。我が子達は父親と夏休みの休暇に出かけた。南ドイツの子供達の学校はまだ夏休みに入っていなかったから、アネッテの代わりに車で送迎したり、食事の支度をしながら、母と子の様子を横目にこれからのことを考えた。酸素吸入のチューブを付けながらできるだけ普通に暮らしているアネッテの残りの日々が少なくなっているのは明らかだった。

まだ若い私達はわざと楽し気に共通の思い出に花が咲いた。日本での三日間のことは、アネッテはまるで故郷を想うかのように話した。

「あの時浜辺で散歩したときの小石、今でも持っているのよ」

太平洋海岸の海辺で砂の中に見つけた灰色の小石を、アネッテはずっと上着のポケットに入れて持っていた。形も色も特に目立つわけではない石だったけど、一つだけ砂の中で見つけた石はアネッテには特別な物だった。

庭でいっぱい取れたからと友人が持ってきたズッキーニを、オリーブ油で炒めてニンニクのすりおろしと塩コショウだけで味付けして出した。

「単純な作り方なのに、美味しいわね、私も元気になったらやってみるわ」亡くなる十日前だった。

その一年前に事故で急死したダイアナ妃に視線や髪型が似た感じのアネッテが言った。

「あんな風に突然死ねたら、どんなに良いでしょうね」

人ごとだからと言い返されるのを覚悟で勇気を出して言った。

「癌闘病は苦しい辛いことだけど、周囲の愛する人達にお別れを言う機会があるし、苦しみながら人間として成長できるという意味では、悪くないと思うんだけど。ダイアナ妃は突然に亡くなってしまって、子供達にさよならも言えなかった。残された子供達は今どんな気持ちになっているか。あなたも子供達ともっと本当のことを話した方がいいと思うんだけど」

「私もそうすべきだとは思っているけど、まだ時間があると思うの」

義兄が出張から帰ってきてすぐ、アネッテは入院した。一週間もしないで医者が言った。

「これ以上は時間の問題ですから自宅療養でもいいです」

義兄が家で留守番をしている私に電話をしてきた。

「退院できるそうだけど、子供達が怖がるんだったら入院したままにするから、みんなに聞いてくれる？」

あちこちに散らばって遊んでいた子供達四人を集めた。

「ママ、退院してもいいんだって」

ワーンと飛び上がって喜ぶ子供達に続けた。

「ママは元気になって帰って来るんじゃないの。もう元気にはなれないの。それで医者さんが家で過ごしてもいいっていうの。つまり、ママが家に帰ってきたら、この家で死ぬこともあるの。それでも、あなた達は怖くないかどうか、パパが聞いてっていうの。あなた達が怖くないんだったら、ママは今日まもなくこの家に帰って来られるのよ」

目の前で、十六歳から八歳の子供達四人が泣き崩れた。

アネッテは寝たまま退院してきた。ベット際に行こうとしない子供達に言った。

「ママのところに行って、お話ししなさい」

「ママは眠ってばかりいる」

返ってくるのはいつもそんな沈んだ声だった。

教会の介護担当者が介護用ベットをリビングに入れる相談をするためにやってきた。

いつもどおりに暮らすだけが望みだったアネッテは、いつもどおりに自分の寝室の自分のベットで、二階の子供達が深い眠りにいる夜半過ぎ、義兄に見守られてこ

の世を去った。退院して四日後だった。子供達に何も言わないまま、すーっと逝ってしまった。

最後に入院する前に、アネッテがふと私に言った。

「私、まだ自分の人生、生きていないのよ」

「あんなにいい子供達四人を生んで、うまく育ててきたじゃない。それは素晴らしいことよ」

「子供を育てるのはだれでもやっていること。自分で興味のあること、まだ何もやっていないの。母親としてじゃなく、一人の人間としてやってみたいこと、私まだ何もやっていないのよ。私の人生、まだ生きていないの」

アネッテのその言葉は、私の人生の原点となった。

1 1 翻訳という楽しみ発見

翻訳の楽しさを発見したのは、幼子の育児の真っ最中だった。

「奥さんが日本人だったらこれ出来るかなと頼まれたんだけど」と夫が同僚から特許関係の資料を預かってきた。同僚では無礼があってはならないと日本人的思考方もあったし勉強にもなるしと思い、何度か翻訳を手伝った。

しばらくすると、その同僚が「これができるなら、是非正式に会社に日本語翻訳者として登録すべきだ」と言ってくれた。

そのうちに社報編集長から声をかけられた。

「会社社報の日本語版を出すことにしたので、やってみませんか」

一歳の子がいるし、子育てが最優先だから期待に沿えるかどうかわからないと返事をする、その女性編集長は励ましてくれた。

「それでもいいから、やってみませんか」

「そこまで言ってくれるのなら、やってみれば」

と夫も励ましてくれた。編集長には「ただし妻は初心者だから俸給は三分の二でいい」と自ら申し出た。

社報の内容は特許関係より重厚で興味深かった。化学関係の難解な記事などもあり、時間の確保にも苦労はしたけど、仕事の内容としては納得いけるものを提出した。印刷された日本語の社報を手にした時の喜びは言葉に言い表せない。

子育ての傍ら、年二回発行の社報を訳しながら充実感でいっぱいだった。昼間は外で子供を徹底的に遊ばせて、早く十分に寝るように疲れさず作戦と、お天気が悪い時も、近所の遊び相手を呼んで遊び疲れてくたくたになった子供はよく寝てくれた。夜の課題が弾みになって日中も楽しんで子育てをした。子供が眠りにつくと台所仕事を手際よく片付けて、翻訳の原稿前に座った。

当時はコンピュータはなかったので手書きで、いちいち辞書をめくる作業だった。何度も出てくる化学用語は索引カードに集めた。難しそうなドイツ語の文章に自分が手を加えることで、すっきり分かる日本語の文章になっていくのがワクワクするほど面白かった。それはドイツ語という雲がかかっている空が、ドイツ語雲の上を日本語で置き換えたとたんに、晴れた青空が出てくるという魔法だった。

年二回の周期なので、翻訳がない時期は子育てを心からゆっくりと楽しんで本当に満たされた日々だった。

二人目の子供の陣痛が始まった時も翻訳をしていた。赤ちゃんが生まれたら、しばらくできなくなると思ったので、陣痛が定期的に起こってくるのを意識しながら訳し続けた。やがて夫に言った。

「今からシャワーを浴びるから、その後病院に連れて行ってくれる？もうすぐ生まれると思うから」

夫はそうなるまで机にかじりついている私に呆れて首を振った。

やがて三人目が生まれることになった。ちょうどその頃、私を応援してくれた女性編集長がフリージャーナリストを目指して会社を辞めた。次に編集長になった男性は育児をしながら仕事をする女性を支えるという気など毛頭ない。翻訳作業を速く速くと急かしてきた。私には子供の育児が最優先だったので、これ以上のスピードアップは無理とその仕事を諦めた。諦めるとき、夫に言った。

「子育てが終わったら、是非翻訳をしたい。多分こういうのを天職というのかもしれない。難しくても面白いから楽しいのよ」

「好きなだけやっていいけど、僕が関わらなくていい翻訳をやって」

夫は答えた。

株主や取引先や社員向けに出版されるその社報は、種々の分野の開発報告など専門的内容が多かったので、一記事の訳が終わるたびに夫は私と読み合わせをした。仕事で疲れて帰ってきて、子供が寝た後テレビの前でゆっくりする代わりに、一文一文読み上げては内容の正当性をチェックする作業は責任があるのでかなり負担になっていたらしい。

それから十四年。子育て期間はドイツ語の勉強のためにドイツ語の本ばかり読んでいた。日本語は夢中になると止められずに時間を忘れて読んでしまっ、次の日に子供達のために心身共にしゃんとできないから自己規制していた。

子供達が精神的に自分からどんどん離れていくのを横目に、気は重くなるばかりだった。子育てが終わったらやってみたいはずだった翻訳。でも、自分の頭の中には翻訳できるほどの日本語はもう残っていない。

そんな中で、夫は私専用の日本語が書けるコンピューターを用意してくれた。当時のコンピューターでは任意に言語を選択することはできなかったから、夫は夫なりに、母国語で何か書けたら喜ぶだろうとの思いでやってくれたことだった。それでも、日本語で書こうとしても日本語の文章は出てこない。情けなく、悲しく、不貞腐れた気分だった。

「専用のコンピューターで何しろというの？もう私の頭の中で日本語は消えてしまったのよ」

「例えば、料理のレシピをまとめるとか」

苦し紛れの提案。ダンケ。可愛そうに夫のせいではないのに。

頭の中は実に朦朧とした状態だった。日本駐在員家族としての暮らしの後、ドイツに戻ってからは、脳梗塞後右半身不随となった義母と、ガン闘病中のアネッテを含める家族を巡る暮らしに忙しく、日本人の友人と会っておしゃべりするというような余裕も機会も意欲もエネルギーもまったくなかった。まだインターネットは普及していない時期だったから、日々日本語情報を求めようにも求めようもなかった。もしかすると可能だったとしても、多分そんな時間や気分的余裕はなかった。

普通の専業主婦だったら成長する子供達にほっとしながら、やれやれとゆっくり暮らしたすか、あるいは何か仕事や趣味を見つけようと張り切る時期かもしれない。私はといえば、子供達相手に過ごす時以外に上向きの気持ちになることはなかった。夫は責任ある仕事に夢中で、いわゆる企業戦士になっていた。あっちを向いてもこっちを向いても気が滅入った。おまけに母国語が消えてしまった頭の中の状態が悲しかった。義兄嫁であり親友のアネッテが、三年間の闘病の後に亡くなったのは、ちょうどその頃だった。

義兄の外国出張期間中、亡きアネッテの代理として四人の子供の面倒を見に行った。手伝いに行っていた時に知り合いになったアネッテの友人は、近くの本屋さんで働いていた。アネッテ亡き後も繋がっていたその友人が、自宅に帰る私に一冊の本を渡してくれた。

早速帰りの電車の中で読み始めた。翌日子供達を学校に送り出し、犬のアキとの散歩と家事を済ませた後、ずっとその本を読んだ。夜中に読み終え、ベットに入るとたんに胸の鼓動が高鳴った。ドキドキしていくらたっても止まらない。この心臓どうなってしまったんだろうと不思議がっているうちに、まるで催眠術にでもかけられたかのように立ち上がり、リビングに一直線に行き隅に置いてある自分用のコンピューター机の前に座った。

夫が私のためにわざわざ用意してくれたというのに触ることのできなかったコンピューター。頭の中から日本語が何も出てこないのが明らかになるのが怖くて、触れなかったコンピューター。さっき読み終えた本を持ち出してきて、コンピューターをつけた。本の一ページ目を開いて、ドイツ語の一文を読んで、コンピューターにその一文を日本語で書いた。

《今朝、目が覚めて一番先に、ベッドのわきにかけてあるカレンダーを見ました。あと八日で私の誕生日です。そしたら十一歳になります。》

それは、十歳の女の子ルイーゼが、母親の乳癌発病から死までをどう過ごしたかがルイーゼの言葉で書いてある青少年向けの一冊だった。読みながら、アネッテが

まだ生きている間にこの本を読んでいたら、きっともっと違ったように接していたに違いないと後悔した。

日頃、我が子相手以外に日本語を話す機会もなく、限られた活字を受け身に見るだけの自分に日本語で表現する能力がまだ残っているのか。ギリギリに切羽詰まった気分でした。

夜中過ぎにその訳を始め、一時間もする頃には溢れる涙の合間に見える文章をひたすら追うばかりだった。できる、まだ私には日本語がある、残っている、私はまだちゃんとした日本人だ、まだ日本語がスラスラ出てくる、話さなくても、書くことはできる。さらに一時間訳し続けながら、次第に心が静かになってきた自分に言った。

「明日から、これで生きていこう」

子供達が大きくなっても生きる道はある。一番仲良しのアネッテが亡くなって、子供達がどんどん離れていく時期に、母国語まで自分の中から消えた。一体自分には何が残されているのか。そんな気持ちでいた時だったから、すらすらと出てくる日本語の文章は、一文一文愛おしくてたまらなかった。まだ大丈夫、これで生きられる。心の高揚が静まり、救われた深い安堵感の下に睡魔が襲ってきた。

この翻訳原稿の出版先が見つかるまでに三年かかった。それでも、『ルイーゼの星』（求龍堂）は出版された。編集者と読み合せた時に、特に修正があったのは二か所だけだった。そのことへの喜びは日本に住む日本人には想像できないかもしれない。

出版が決まった時、喜びのあまり、これでいつ死んでもいいと思った。なのに、どうということだろう。出版された本を手にしたときには、死ぬどころか、もっともってやってみたくて欲が出てきた。それでも出版界は厳しい。訳しても出版社先が見つからない迷宮入りの翻訳原稿やダブル翻訳原稿などがもう四、五冊分… それでも面白いので飽きずにやっている。

四十三歳で死を目前にしたアネッテがいくら切望しても叶わなかった〈一人の人間としてやってみたくて〉をやる時間が私にはある。なんと、ありがたいことか。

12 目全体が真っ黄色だったホームレスドッグのテディ

ある日の夕方、玄関のベルが鳴った。ドアを開けると、立っていたのは時々森の中で見かける若いジョギングの女性だった。犬を連れていた。

「この犬、あなたの犬じゃないですか？茶色の犬と散歩しているあなたを思い出して、もしかして逃げ出したのかと思ったので連れてきました。一昨日も森でうろついているのを弟が見かけたというので」

「まあ、わざわざありがとうございます。でも家の犬はここにいます」
ちょうどその時、夫が帰宅した。

「まあ、そんなことなら、置いていっていいですよ。犬の飼い主、何人か知っているから、どこの犬か知っているか聞いてみますから」

我が家のアキはその知らない犬が家に入ってくるのをいびるでもなく、すんなりと受け入れた。

その夜おどおどして立ちっぱなしのその犬を脇目に読書会に出かけた。帰宅すると犬はもういなかった。夫があちこち電話で聞いてみたけど、そんな感じの犬を知っている人はいなかった。誰かが探しているかもしれないからと念のために警察に連絡した。すると間もなく動物センターから人が来て、「決まりですから」と言って、その迷い犬を無理やりに連れて行ってしまったという。

「我が家にも犬がいるから、持ち主が見つかるまでここにおいてもいいですと言ったんだけどね～」と夫。

「あの犬、行くの嫌だ嫌だって、すごく抵抗していた！」

「ほんと、嫌だ嫌だって足でブレーキ掛けて！」

「ほんと、かわいそうだった～！」

と子供達もがっかりしていた。さっきまでいた犬がいなくなってしまったので、大分気が抜けた。

三日経っても、あの夜出かけるときに悲しそうな目で私を見ていた犬を忘れることができなかった。あの犬の目は、三か月前に亡くなったアネッテの悲しそうな目と同じ目だった。夫に言った。

「今日、その動物センターに電話して、あの犬がどうなったか聞いてみるわ。もう持ち主が見つかったかどうか。もしまだだったら、私あの犬飼いたい。あの目が忘れられなくて、ほっとくわけにはいかない。犬が増えて、仕事が増えるのは私なんだし」

「じゃあ、僕が電話してみる」

と夫は出勤した。午後になって夫から電話があった。

「それで、あの犬、どうしたの？どこにいるの？」

「犬は車の中。僕は車の外。だから、寒い」

「えー、どうして犬が車の中で、あなたが外に立ってるの？」

「だから、電話したら、あの犬がまだいるというから、直接動物センターに来たんだよ。犬を家に連れ帰って庭に放して、その犬が駆け回るのを君が見たら喜ぶと思って。それで車に犬を入れてトランクを閉めた途端に、鍵を入れたままにしたのに気が付いたってわけ。合い鍵を持ってここまで来て。今日は、寒い」

犬を連れ帰ると、子供達が思いもかけない話の展開に呆れながら喜んでいて。まず犬のアキと仲良くなれるように庭に放した。するとその犬は、庭の中を狂ったように何周も何周も何周もグルグル、グルグル回りながら走り続けた。それこそ狂ったように走り続けた。一瞬狂犬病なのかと思ったぐらい、それはとても奇妙な行動だった。アキも子供達も夫もみんな呆気にとられて眺めていた。

ワンちゃんは、そのうちにくたびれ果てて、座り込んでしまった。そこを見計らって、バスルームに連れて行ってシャワーで洗った。動物センターで見知らぬ犬に囲まれて、それ以前もホームレス犬としてどの位どの辺りをうろついていたのか見当もつかないので、まずさっぱりと、きれいにした。

それまでは薄汚れた茶色の毛がベチャッと体にくっついていたけど、洗ってみると薄こげ茶の柔らかいふさふさの羽毛のような毛が体中を覆って思いがけなく可愛い犬だった。まるで〈プリンセスの手で壁に投げつけられたカエルが王子様に変身した〉かのような変身ぶりだった。目は瞳孔の区別なく目の中全部が不思議に真っ黄色だった。

次は名前を付けるために夫と子供達とアキと新しい犬を囲んで家族会議。なかなか決まらなくて夜中近くなった。テレビの上に飾ってあったテディベアのぬいぐるみが目に入った。

「テディ！あのぬいぐるみにそっくりじゃない。」

「そうだ。テディ！テディ！」

ぴったりの名前に全員一致で一安心。

「お休み。アキ、お休み、テディ。」

テディは何が何だかわからないのか、おどおどとして立ったままだった。

二、三日後の静まりかえった夜、突然ワンワンとアキの吠える声が聞こえた。夜中過ぎに吠えることなどないアキがなんだろうと起きてみると、テディがソファの上に横になっている。アキはソファの上には座らないと寝られているので、テディ相手に吠えながら、「それはダメ！」「それはダメ！」と犬の隊長として任務を果たそうとしているのだった。

アキとテディ、犬二匹の取りなす行動と様々な光景を目にすることになって、テレビなど知らないぐらいの変化に富んだ日々が始まった。一週間も過ぎると、真っ黄色だった目全体が普通に真ん中だけが黄茶色の目になった。きっと、ホームレス犬として怖い思いをいっぱいしてきた証かもしれない。

予定したわけでもないのに、突然、子供三人と大人二人と犬二匹の家族になった。あと一、二匹増えたら、犬に人間が住まわせてもらっているという雰囲気も出てくるかと思えるほど二匹の犬達は、私達の暮らしの主人公になった。

13 男と女の不思議な関係 ホモサピエンス

日本人同士の夫婦ならお互いに〈いちいち言わなくても分かる〉状態なのが普通で望ましい夫婦関係ということらしいが、日本人の夫を持ったことがないので残念ながらその実情は私には分からない。

ドイツ人を夫にしてからまず最初に明らかになったことは、〈言わなければ分からない〉ということだった。たとえば朝食中に今日夫が済ませると言っていたことを後で確かめる。

「あれ、やってくれた？」

「何を？」

「さっき話し合ったじゃない、あのこと」

「どのこと？ちゃんと主語を入れないと分からないよ」

その主語が長い主語文だと繰り返し面倒なので「あれ、」で済ませたくなる。年数が増してくるとますますそれが増える。

大分以前、アメリカ人と日本人の両親を持つアメリカ人の女の子が我が家に来た時、「私のパパも、よくママ相手に、何？何？主語を言わないとだめだよと言っている」と笑っていたので随分慰められたものだ。

もっとも平均的ドイツ人とは言い難い我が夫だから〈阿吽の呼吸〉というのはドイツ人男性には分からない、と一概に言い切るのは失礼かもしれない。早い話、〈考え方は人それぞれ違うのが当たり前〉のドイツでは〈阿吽の呼吸〉は、男女どちらに対しても期待できないかもしれない。夫と何かギクシャクする度に、仕方がないドイツ人だから分かるわけがないと自分に言い聞かせていた。

そんなある日、読書会の仲間達と世界ベストセラーの『話の聞けない男と地図の読めない女』という本を読んだ。これは男性の言い分を夫が受け持って、女性の言い分を妻が受け持って書いたという夫婦共著だから、生活実践に基づいていて実に説得力がある。

読み始めたばかりで頭の中を稲妻が走った。まず初めにある。

〈男と女の唯一の共通点は、要するに、ホモサピエンスだということだけだ〉

これだ！この一文にお目にかかっただけで、この本を読んだ甲斐があったというもの。それからページを進めると、さらにショッキングな一文。〈夫が冷蔵庫の中のバターが見つからないというので、行っ一緒に見てあげると、目の前のど真ん中にどっかりと陣取っているバターがすぐに目に留まる〉

またしばらく読み進める。

〈男は自分の愛を表現するために、芝刈り機で芝刈りをする〉

私は思わず本を閉じる。自分の心の中の変化に気づく。夫のすべてを許せる。許そう。今まで、「まったく、もう、」と夫個人に対して抱いたイライラ心や失望感。期待をするから、その期待が裏切られる度に失望したり怒ったり。期待をする自分が間違っていた。問題は夫が男だということで、夫個人には罪はない。

まるで宝石店に迷い込んだゾウが身動きするたびに何かが壊れてしまうので途方に暮れるように、一生懸命やったことでも妻は思ったほど喜んでくれないと、夫なりに失望したり怒ったりしている姿を何度見たことだろう。夫は夫で、私は私で、それぞれのズレ方に気が付きながらも、わけがわからず戸惑ったりしてはため息をつくばかりだった。

仕方がない。ホモサピエンスだけが共通点なのだ。ドイツ人で男性で超理工科技術系の人間に、日本人で女性で文科系の超感覚派の自分が思うのと同じように思っ
て欲しいと期待するのがそもそも間違っている。《共通点はホモサピエンスだけ》つまり、期待しないで諦めてかかれということだ。

その本を読み進めながら、夫を捕まえては大切なポイントを声を出して読んで聞かせた。職場でその話をしたらしく、やがて夫は離婚早々の同僚が「今後の参考に読みたい」と言っているからとその本を貸してあげた。戻ってきたその本は、さらに別な友人のところに出張に行き、出張を重ねているうちに行き先が分からなくなった。

もう読んだ本だから別にいいと思っていたが、夫は妻のご機嫌を直してくれたありがたい一冊と思っているらしく、また新しく買ってきた。読んでしまった本として棚に並んでいたのも、また誰かに貸してあげているうちにまたどこかに出かけたまま帰ってこなくなった。どこで眠っていてもいい。あの一冊は、どのぐらいの夫婦の離婚を救ったか分からない。それにしても、あの手の本に興味を持つ人がそんなにもいるので世界ベストセラーにまでなる。男女関係での葛藤で悩む人がそれだけいると知って安心したものだった。

その本を貸してあげた友人の一人は、それを手始めに夫婦間に関する本を読み漁った。夫婦でカップルのセラピーにも行った。友人の夫は買って来た花束を「これ、もし、役に立つんだったら」と突き出した(!) そうだ。友人夫婦は夫側の精一杯の表現の花束にも関わらず、結局別れた。カヌー漕ぎやペタンクゲームやカーニバル仮装など、いつもよく一緒に行動していて羨ましいような二人だったけど、別れた。ホモサピエンスという共通点があっても、いやそれ以上に趣味や楽しみを共有するという共通点があっても、結局別れた。

この友人夫婦は、日本滞在中の我が家にも泊まりに来たことがあって仲良くしていたが、離婚してからは私と友人との交流だけになって、残念ながら友人の前夫とは会わなくなってしまった。大人まで成長できるかが案じられた先天性の肺腸疾患のある一人娘を夫婦で二十年以上見守った後、無事に娘が独立して暮らすようになってから、まるでタガが外れたように別れた。離婚後しばらくして娘の結婚式があった。離婚してから初めて会った前夫は一日中新しいパートナーと手をつないでいたから、友人は複雑な気分で折角の一人娘の結婚식을十分に楽しめなかったと残念がっていた。

そのうちにその新しいパートナーとも別れた友人の前夫は、新たにケルン大学に入学して考古学で博士号を取得した。女性のご機嫌を取る時間を割く必要がなくなった彼は、夢だった博士号を取るまで研究する時間が取れた。考古学者になった喜びがまだ冷めないうちに、彼は肺の病気に罹り、呆気ないうちにこの世を去ってしまった。離婚以来、友人の手前会っていなかった彼に博士号取得への祝福を伝えるためにも久しぶりに招待して、是非考古学の話聞いてみたいと思っていた矢先だった。最期に入院した彼は、後始末をする一人娘のために個人的な証明書やカードなどを全てきちんとテーブルの上に並べて置いた。一人暮らしのスッキリと片付いたリビングには、白い皮のソファがあったという。

友人は前夫のマンションを空ける作業を娘夫婦とした後、残された物すべてを自分のところに引き取って遺品整理をした。前夫を去ったとき、友人はそれまで家族で使っていた赤い皮のソファを持って出た。前夫が喜んでいなかった絵を思い切り描き、展覧会で絵を売るまでになった。前夫が喜んでいなかったコンピューターも自分で覚えて、ホームページも、展覧会案内も全部自分で作った。

夫を去ってまで自己実現をしたかった友人の紅白歌合戦のような夫婦人生劇。デュエットを止めてから、それぞれ自分一人でマイクを持って、それぞれ立派に歌っていた。遺品の片づけが終わった後しばらくして、友人が言った。

「あの人と一緒に暮らし続けることはできなかったけど、本当はとても愛していたって気が付いたの」

ある時、アメリカ人夫妻二組が我が家に来て十日ほど行動を共にした。一組は白人の夫と日系三世の妻。もう一組は日系三世の夫と白人妻。十日間、愉しくわいわい過ごした後、いよいよ最後の夕食の時、白人妻のデニスが改まって言った。

「あなた達と一緒に過ごして、楽しいドイツ旅行ができたけど、私にとって一番印象に残るのはこういうことなの。今まで私は夫のゲリーと問題があったりするといつも思ったの。仕方がない、ゲリーは日系だから、私とは本当に分かり合えないのかもしれない。それが、あなた達ドイツ人と日本人の夫婦を見ていたら、何のこ

とはない、私とゲリーがやっていることと同じことをやっている。あなたと私は女同士で、アメリカ人と日本人の違いはあるけれど、何の行き違いもなく分かり合えた。それなのに長年暮らしを共にしている夫とは、どうしたって分からないことがある。そのことを私は今まで日系出身とそうでない出身の違いと思い込んでいたの。それでもここで、あなた達と一緒に過ごして、今回、はっきりと分かったのよ。つまり、私がゲリーと問題があるのは、ゲリーが男で、私が女だからということ、ただただ、そのことが原因だというのが分かったの。今回の旅行では、そのことがとても良い嬉しい一番の収穫なのよ」

そう言いながら、デニスはゲリーの肩に頭を寄せた。

日本の誰だったかの俳優に似ている丸顔の懐かしい感じのゲリーは髭を生やして、メガネの奥のところに優しくそうな目をニコニコさせながら言った。

「僕も時々途方に暮れるよ。まず結婚のプレゼントからして間違っただろう」

「何のプレゼントだったの？」

聞くと、デニスが即座に答えた。

「小型扇風機」

「エーッ、結婚記念のプレゼントに？指輪とかネックレスとかの代わりに？」

「そう、指輪の代わりに」

うなずきながらデニスが言った。

「暑かったから、喜ぶだろうと思ったんだけどね〜」

未だに不可解そうにゲリーがつぶやいた。

「それはいいアイディアだったのにね」

相槌を打つ我が夫を横目に、私達日米妻三人は目を見合わせて噴き出した。それは大笑いに発展して、わけのわからなそうな旦那方三人も巻き添えになった。

おっとりしたデニスは、体いっぱい揺すって笑いながら、私にウインクした。

14 ボールを蹴飛ばすだけなのに、人を魅了するサッカー

二〇〇二年、日本と韓国がサッカーワールドカップ共同開催国になった。初日が近づいたある日、地方のラジオ局から電話があり、日本語でサッカー用語を吹き込みたいから手伝ってくれないかという。ラジオ局が一体どこからひっそりと主婦業で暮らしている私の電話番号を手に入れたのかは不思議だったが、日本の宣伝のためならと引き受けることにした。

二、三日してラジオ局からという人が訪ねてきた。私のような者に何だってこんなことを聞いてくるのか、何か騙されているのかもしれないと半信半疑で心配になったので、玄関のドアを閉めるふりをして家の前を見ると、本当にラジオ局の名前が入っている車が止まっていた。

我が家のリビングで、「ゴール!」「ファウル」と慌てて確かめた日本語のサッカー用語の吹き込みとなった。ワールドカップ開催中にときどき雰囲気が出るように放送中に流すということだった。そんなことならと少々感情を入れて吹き込もうとしたけど、「ゴ〜ル!」「ファウル!」では感情を入れようにも限度がある。それとも、スポーツっぽく勢いがつくように、叫べばいいってことかな〜?

ついでに開催初日にラジオ局に来てくれないかと頼まれた。野次馬根性が高じて、また承諾。

ワールドカップの初日、朝早くラジオ放送局に向かった。先日我が家に来た青年が迎えてくれて案内された放送室は、斜めのテーブルのような所に無数のボタンが並んでいてテレビで見たことがある管制塔のような感じだった。渡されたマイクのついたイヤホンを耳に当てると、隣に座るアナウンサーの声が聞こえて放送局にいる臨場感が増した。

「皆さん、おはようございます。今日はいよいよ日本でのワールドカップの初日です。スタジオにはこの街に住む日本人女性がお客様に来ています。日本に関する質問があったらどしどしお電話ください。向こう一時間お電話をお待ちして控えています」

日本に関する質問!そんなこと言われたって何でも答えられるとは限らない!ぞーっとして、口から心臓が飛び出しそうにドキドキしてきた。バックミュージックが流れてきた。電話は一向にかかってこない。音楽と共に気持ちが落ち着いてきた。

「日本でのサッカーは、スポーツとしてどのような地位にありますか」

さすがバックミュージックだけに番組を任すわけにいかないアナウンサーが声をかけてきた。

「日本ではアメリカの影響で野球の人气が一番です。私は息子からサッカーの面白さを教わったのですが、今回のワールドカップをきっかけに日本の皆さんにも是非その面白さを知って欲しいと願っています」

「日本人にはどうして野球が面白いんでしょうね」

窮地！そんなことは考えたこともないし、読んだことも、聞いたこともない！

「もしかすると、日本人のお風呂文化と関係があるかもしれませんね。日本人は毎日のようにお風呂に入るのが好きです。サッカーは面白い試合となったら、一瞬でも席を外せなくなりますから、夢中になったらお風呂に入る暇はまずないです。でも、野球だと九回裏までありますから、ちょっとお風呂にと席を外すこともできるし、お醤油が足りなくなったら近くのスーパーに一走りもできます。でも、サッカーは良い試合だとハラハラして、トイレにさえ行けなくなる。試合が終わるまで、家族のだれもお風呂に入りたくない。そのうちに家族用に湯船に張って熱くしたお風呂のお湯が冷めてくるし… 野球の方が比較的のんびりと見ていられて、日本人の性に合っていると言えるのかも知れません」

当時ドイツには野球をまったく知らない人が少なくなかった。（多分、今でも）そういう時、夫が野球の試合の仕方を説明しているのを聞いて笑わずにはいられなかった。

「試合場の真ん中に、ボールを投げるピッチャーが立っていて、そこから離れた所に、バットという棒を持って、投げられてくるボールを当てて打とうと待っているバッターが立っている…」

夫の説明を聞いたドイツ人が、さらに質問をする。

「ピッチャーとバッター以外の守りの人は、そのマットの辺りで、何してるの？ただ立っているだけ？」

「そう、ボールが飛んでくるまで、立って待っている」

「ふ～ん」(野球ファンの人にはきっと良い説明ではない。ごめんなさい)

あのラジオ局であと何を聞かれてなんと返事をしたのか、残念ながらもう忘れてしまった。いつ電話がかかってくるか内心ハラハラしながら、バックミュージックの合間に手持無沙汰のアナウンサーがしてくる質問に何とか答えて、無事に一時間が過ぎ最後の質問となった。

「初日の今日は前回の優勝国フランスとセネガルの試合がありますが、どう見ますか」

一体あのアナウンサーは、なぜズブの素人にそんな質問をしたのか。ワールドカップの初日担当となった青年は、特別頑張って良い番組を作ろうとわざわざ日本人を呼んで自分の吹込みスタジオに座らせた。が、肝心のラジオ聴者はだれ一人電話をしてこない。折角特別のワールドカップ放送を任せられたというのに、聴者からの反応はゼロ。失望感いっぱいにならない若いアナウンサーのために、できるだけプロフェッショナルに応答しようと思った。

「さっきカーラジオで、今日はフランスのジダンが出場しないと言っていましたから、だとするとセネガルの勝利も見込めるかもしれませんね」

その日、実際にセネガルが前回の優勝国フランスを破ったというニュースが入ったとき、ラジオ放送での私の言葉を聞いていた夫は、私の顔を見ておなかを抱えて笑った。

「何もわからない君が、サッカーの専門家のようにセネガルの勝利をラジオで予告した！」

地方放送のその番組は、カーラジオでは渋滞報告なども含めて出勤道中で聞かれる時間帯に流れた。ただし、その初日はドイツではたまたま祝日だった。つまり平均的カーラジオ聴者の大方は寝坊してベットにいる時間帯だったから、日本に関する質問の電話が放送局にかかって来なかったのも無理はない。ただ唯一の反応は、それからしばらくしてかかりつけの医者に行ったとき。看護婦さんの一人が私を見て、ニコツとした。

「ラジオ、聞きましたよ！」

日本での開催中、日本のサッカー観衆の応援のし仕方は拍手をするだけで「まるでウィンブルドンでのテニス観戦と同じですね」とのドイツ人解説者の言葉があった。

今では日本のサッカーも盛り上がり、サポーターの様子も本格的になった。特にいつも話題になるのは、日本人観衆が試合の後ゴミ袋を持ってお掃除をするシーン。テレビでそれを見ながらなんとなくいい気持ちになるのは、きっと日本人の私だけではない。今はドイツのオーケストラには必ずと言っていいほど日本人奏者がいるのと同じように、ドイツの各地のサッカーチームにも多くの小回りの利く日本人選手が活躍するようになった。

福島原発事故の後、他の数々の都市と同じくベルリンでも原発反対デモがあった。当時ベルリンに住んでいた息子達を訪問中だったので、近くにあったデモと一緒に参加した。お天気も良くデモ日和の週末。大勢の参加者で前も後ろも見渡せない人込みに運ばれるようにただ歩いているだけだった。政府の建物が並んでいるあたりに並んでいる警察官が、何か物々しい印象を与えていたけど、それ以外はいたってのどかなシーンだった。

四角い白旗の真ん中に赤く四角に染めた旗を持っている人がいた。その赤いところには黒字の〈香川〉という漢字が浮き出ている。「どうして香川ですか？」と思わず声を掛けると、「僕が知っているのは、香川という漢字だけですから」という返事だった。当時、優秀なドルトムントサッカーチームで活躍していた日本人の香川選手。世界中で愛されるスポーツであるサッカーの選手は、国の代表として大きな親善大使になるのだとつくづく実感した。我が初デモ参加の収穫だ。

四十七年前にドイツに来てケルンに住み始めた年、ケルンのサッカーチームはドイツマイスターになる一歩手前にいた。たまたま耳にするラジオのサッカー試合中継からは「オクデラ、オクデラ！」という日本人の名前が盛んに聞こえてきた。当時はサッカーにはまったく無関心だったけど、同国人が同じ街のどこかで活躍しているということとても心強く思った。同じく何度も名前を耳にしたのは「リットバースキー！」だった。奥寺選手と一緒にマイスター候補のケルンチームで大活躍していた新鮮な17歳の選手だった。今では日本人の奥さんと日本で暮らしているという。

結婚したばかりの頃はまだテレビがなかったので、夫は近くに住んでいた義兄の所に行って、そのいよいよマイスターになりかかっているケルンのサッカーの試合を一緒に見ようと兄弟で気を良くしていた。うららかな春の気持ちよく晴れた週末の午後、大の男二人が、なぜ、たかがひとつのボールを蹴とばすスポーツのために大騒ぎしているのかまったく理解出来なかった。それなのに今はどうだろう、「気分転換に何か面白いサッカー試合ないかな〜？」そう言い出すのは、この私となった。

私にサッカーの面白さを教えてくれた息子が言ったことがある。

「マルクスは《 Religion ist Opium für das Volk 宗教は民衆のアヘンである》って言ったけど、今はむしろ、〈サッカーは民衆のアヘンである〉っていう感じだね」

そうかも知れない。テレビで良いドラマを観るのも良いけど、良いドラマには、苦しみや悲しみや複雑な人間の感情模様が詰まっているから、自らの人生で大変な人や大変な時には、見てさらに重荷になることもある。難しい歴史ドラマは見甲斐はあるけど、仕事で疲れているときや何かで頭がいっぱいのときは、それどころじゃない。その点、サッカー観戦中は、何も考えない。一試合四十五分を二回、ひたすらただの一つのボールが転がるのを見守るだけだ。選手達の必死の様子ももちろん見ものだけど（見ものじゃないときもあるけど）、とにかくひたすらボールの動きを見守る。これはもしかすると瞑想にも似た状態ではないか。何も他のことを考

えない。邪念を入れずに、ひたすらボールの動きを見つめる。その後方の観客席で生きるか死ぬかの騒ぎのように試合に夢中になっているスタジアム内のファン達を見ると、テレビの前で観戦中だろう人々を想像すると、息子が言った言葉に納得する。サッカーを見ている間中、観衆は本当は頭一杯の葛藤や悩み事などを忘れていられる。

日本の親戚の八十歳をとくに過ぎたお婆ちゃんは未亡人になってから、サッカーを見るために目覚まし時計を掛けて、夜中に一人で起きて外国で試合をする日本チームを応援した。

別な親戚のお婆ちゃんは、炬燵にあたって息子と二人でサッカー観戦をした。日本サッカー選手が頑張っている最中に、そのお婆ちゃんは事切れた。

「母に悪かった。すぐに気がつけば助かったかも知れないのに、あんまりハラハラしてテレビに夢中になっていたから、すぐに気が付かなかった。悪かったと今でも後悔してね～」

親戚の人の言葉に、即座に言った。

「私がもっと年取って、息子と一緒にサッカーのテレビ観戦中にくろっと逝けたら、それこそ最高の死の瞬間。絶対に後悔する必要はないですよ。お婆さんには最上の最期だったに違いないです」

約二千年前にはローマ人はコロセウムで剣闘士や動物の生と死の闘いを面白がった。五百年前からスペイン人を魅了してきた闘牛は、今では動物保護のための禁止派と伝統保持派がその存続を巡って議論が止まない。時代が変わっても、人々は同じように雑念を忘れて、何かに熱中する瞬間が欲しいらしい。

人間も牛も危険にさらさないサッカーは、熱中して応援する人々に生きる楽しみを与える。サッカーは、何もない貧しい国の子供達でも T シャツを丸めてボールのようにすると、それを転がしながらだれでも熱中して遊べる。それでみんなに愛されるスポーツになったということだ。

夢中になると幼子のようになる今は亡き義兄は、日本チームが世界の舞台に姿を見せるようになった頃、日本チームのチームワークの素晴らしさを褒めたたえるために夜中でさえ電話をしてきた。あの義兄と夫と一緒にサッカー観戦をしたかった。一緒にサッカー観戦をするというのは、一緒にお酒を飲むのと同じような意味合いがある。サッカーを話題にすれば、世界中どこに行っても見知らぬ人とすんなりと和気あいあいのおしゃべりが始まる。

15 アキとのお別れ

子供達がそれぞれの大学街に引っ越してしまってから、犬二匹と夫婦だけの生活になっていた。末の息子が家を出たのと、夫が退職して家に引っ込むのが同時進行になった。それまで常に駆け回っていたような気分のいろんな義務や課題の詰まった日常から解放されて、急にすべてがスローモーションになった感があった。

そんな気が緩みっぱなしの日々だったから、アキの変化にも気が付かなかったのかと後になって大分後ろめたい気がしたが、夫もアキの変化には特に気付かなかった。十三歳になるので、ゆっくりになってきたのは歳のせいだと思っていた。

春休みのペルー旅行に出発する娘と息子を空港で見送ったとき、別れ際の子供達が言った。

「アキ、お医者さんに連れて行ってね」

すぐに治りそうな小さな傷だったアキの足の傷はなかなか治らず、どうも変だと思い始めたところだった。

獣医に見せると血液検査をされて、見習い獣医の手際が悪かったので、再度の検査になり結果が出るまでにまた時間がかかった。見つかったのは手遅れのガンだった。足の検査をして、腸のガンが見つかった。

女史獣医の「もって後二、三週間ぐらいかもしれない」という言葉に、夫婦でとことん悩んだ。旅行から帰って来た子供達に、「アキは君達の不在中に死んでしまった」と言えるのか。折角のペルー旅行やスペインの留学期間の邪魔をしていいのか。邪魔すべきなのか。ペルーやスペインはいつでもそのままあるけど、アキは子供達が一緒に大きくなった仲間だ。子供達が何も知らないうちに姿を消してしまうわけにはいかない。毎日悩んだ挙句、子供達に知らせることにした。

ペルーとスペインから子供達が戻ってきた。アキは子供達を見たせいかまた元気が出た。二、三週間経っても、大丈夫だった。

安定している状態に長女はまたスペインに戻り、次女は大学街ボンに戻った。「アキとできるだけ一緒にいたい」と息子は毎日往復2時間かけて、家からアーヘンの大学に通った。

三か月過ぎるとアキはいよいよ元気がなくなり震え始まった。そして私の側に身をぴったり寄せては、助けてというかのような仕草をするようになった。

長女が留学先のスペインから帰ってきた。熱があって震える様子のアキを見て、家族みんなが自然に楽にしてあげた方がいいのかもしれないという意見になった。

アキのパラダイスだった庭に獣医さん呼んで、永遠のお別れをした。テディは離れた所で立ったまま見ているだけだった。アキのベット用カゴにアキを横たえ、周りを庭の花いっぱい飾って、家の中に連れて行った。

子供達は、一晩中、もう目を閉じたままのアキに触りながらアキの周りで寝た。翌日もいつまでも離れられず、朝食も昼食も取らずにアキの周りにいる大きくなった子供達三人に、夫が言った。

「もう、さよならしないとね」

〈犬は人間と違うのだから、必ずしも寿命を全うする必要はない。苦しむ必要はない。犬は犬らしく楽しく自然の中を駆け回って暮らすのが人生だ。犬が辛くしているときは、飼い主の自己満足で長らく生かせなくてもいい〉ドイツで犬猫を飼う人達は、だれもそんな考えを持っている。安楽死ということが人間にも適用される国もヨーロッパにはある。犬猫の安楽死についての善し悪しの議論は生まれない。

愛犬も自然に命を全うするようにずっと看護して見守る日本の友人や知り合いの様子を見ると、私はどちらがいいのか答えが見つからない。

16 ひょうきん犬のボニー ― スペインから飛んでくる

長女が通っているギムナジウム（小学五年生から、大学進学を目標にして学ぶ学校）で気に入っている英語の先生が、週一回スペイン語クラブをやっていたので、娘は友人とそこでスペイン語の文法を学んだ。その後、ミヒャエル エンデの『モモ』をドイツ語とスペイン語で読み比べしたりして、自分でスペイン語を習い続けた。

大学に進んでから、EU 圏内で盛んなエラスムス留学制度でスペインに一年間行ってみたいと思い応募すると面接に呼ばれた。二人の教授と関係者二人が面接試験官として座っている前で、娘はスペイン語で留学の動機を説明した。

「私の母は日本人なので、知っている文化といえばドイツと日本だけです。未知の文化圏のスペインで学び、もっと視野を広めたいと思います」

途端に教授達はスペイン語での質問の代わりに、ドイツ語でいろいろと日本文化のことを聞き始まった。スペインやスペイン語にはまったく関係ない話になってしまったので、もうダメだと思いながら面接の結果を廊下で待っていた。一緒に待っている留学希望学生達は、お互いにスペイン語でべらべらと上手に話していた。

これじゃ、いくらなんでも私なんて受かる見込みはないんだから、むしろ早く帰りたいとばかり思っていた。やがて、ドアが開いて呼び入れられた。

「おめでとう。これは留学手続きの書類です」

スペインのグラナダ大学に留学した娘は、時間があるとバスと電車を乗り換えては、ドイツ人女性が開設した犬センターの掃除のボランティアをした。そこでは約二百匹の犬が暮らしていた。おとなしい犬と気難しい犬が六匹単位で檻に入れられて、二時間交代で犬達は大きな一本のクルミの木だけが立っている中庭で、自由に過ごすという日課だった。

その中の一匹の犬が、檻や庭の掃除をしている娘を見かけると、テニスボールを口にくわえて来ては投げってくれとせがんだ。娘がボールを投げると夢中で取りに行っては、彼女の前で口からそのボールを放し、また娘が投げるまでじーっと待っている。真っ黒で何の取柄もないその犬はこうして娘の心を捉えた。

やがて一年の留学期間を終えてドイツの我が家に帰って来た。アキは長女が戻るまで頑張っていたが、限界だった。三人の子供達にとっては、アキとの別れは自分達の子供時代への別れであり、親の家に対しても距離ができる始まりのようだった。

新学期に向けて自分の大学街に戻る前に、スペインの犬が忘れられない娘は我々夫婦への説得を開始した。あの犬は余りにも目立たない普通の犬だから、私達が引き取ってやらなかったら、きっと誰の目にも留まらないで、一生あの檻の中で暮らす運命になるとくどくどと繰り返した。

私は犬に死なれるのがどんなに辛いかつくづく経験したばかりなので言った。「死なれるのがいやだから、犬はもういない。絶対いない。悲しくていやだから、もういい」

まだテディもいるし、私達だって段々年を取ってくれば、以前と違って二匹を飼うエネルギーもなくなってくる。もうテディだけでいい。テディ一匹だけで甘やかしてあげたい。そしてテディがいなくなったら、犬のことで心配せずに気軽にあちこちに出かけられる。もうすぐ退職になる夫と一緒に飛行機に乗ってゆっくりと日本帰国もできる。私は動物愛護より、むしろ自己愛護的防衛を試みた。

が、娘は諦めなかった。

「あんなに可哀そうな犬がうようよ生きているというのに、森が近くて時間がある年金暮らしのパパ達が引き取らなかったら一体だれが引き取れるの」

「アキが死んだばかりで、私はもっとお弔いの時間が欲しい」
あまり説得力のない理由まで上げて抵抗した。

「アキは同士の犬が救われるなら、お弔いの気持ちや期間など、きっとどうでもいいと思う」

それでも、悲しすぎる愛犬との別れはもう二度と嫌だ、と逃げ腰一遍だった。

そんな母子の会話が耳に入ったのかどうか、いつの間にか夫はそのスペインの動物センターのドイツ人センター長とメール通信を始めてしまった。

「らちが明かないから、ただその話の犬の名前をはっきり聞くだけだったんだ」

娘の言う名前と説明の犬が一致しないというので、写真が送られてきた。

一目ぼれ、だった。

ヨーロッパ内ではインターネットでの犬猫探しが盛んだ。新しい飼い主が見つかり、動物の同伴者になると申し出た飛行機乗客が、新しい飼い主が待っている空港で、カゴに入ったその犬猫を手渡す。娘達はそんな役目を引き受けて、これまでに犬猫五匹の国境を超える新生活スタートの手伝いをした。

ある日、スペインのマラガ空港からフランクフルト空港への乗客の一人が犬を同伴しても良いと名乗り出たので、急にスペインのグラナダから新しい犬が来ることになった。

娘と夫は大喜びでアウトバーン百五十キロを飛ばして迎えに行った。フランクフルト空港で初対面となった夫は、フライト前に与えられた精神安定剤の影響からか、よろよろと檻から出てきたワンちゃんを見たとたんに言ったそうだ。

「ハロー、マイン、シェッツヒェン！（ハロー、僕の宝ちゃん！）」

また子供達が時間を割いて集まってきた。相変わらずの私達の生活突然変化に狐につつまれたような息子も、「もっとアキのお弔いの時間が欲しかったのに」と涙の抵抗をしながらの次女も、「可哀そうな犬は一日でも早く救ってあげる方がアキにも嬉しいはず」という姉の言葉になだめられ一緒に名前を考えた。

スペインでの名前はどうも馴染めないの、我が家での名前をと皆で頭をひねった。黒い体に胸の所だけ白いので、ミルキーが面白いという私の提案は、そんな皮肉の名前は可哀そうだと却下され、やがてボニーという名前で全員一致となった。

ボニーは、一才ぐらいの時に動物センターの玄関先に繋がれて捨てられていた犬で、そこでちょうど一年間過ごした。テディの時のように何かを怯えたような様子もなく、おっとりとはしていたが、世の中のルールがまるで分っていなかった。

二才だというのに、家の廊下で腰を落としたかと思うと、当然のように目の前で用足しをする。私の目をじっと見つめながら。

観葉植物の細い葉っぱが落ちているのを廊下で見つけては、まるで大蛇相手にでも戦うかのように一人でジャンプしたり、足先で触ろうとしながら、恐ろしがってまた足を引いては構え直し。たかが二、三センチの細い細い葉っぱ一枚相手にいつまでも大騒ぎをしている。テラスの椅子が強風で突然倒れた時など、ボニーは驚いて一メートルも横に飛び退いた。

森の中でリードを放すと、飼い主の側を歩くという当たり前のことも分からない。放したとたんに、すごい勢いで駆け出してはいなくなってしまう。ラブラドルとセッターの雑種ではないか、と獣医さんが推測しただけあってあまりにも足が速い。どちらの方向に行ったのかも検討が付かず、茫然と立ちつくすことになる。

「黒い犬を待ってるんですか、あっちの方で見かけましたよ」

他の犬の飼い主が教えてくれる。そっちの方に向かって歩いて、その方面から来た人に黒い犬の行方を聞く。

「さあ、全然見ませんでしたねー」

そのとたんに、今来た方角から突然出現する。

ある日森の散歩中に姿を消したボニーは、待っても待っても戻って来なかった。テディはいつでも大人しく周りをウロウロしながら一緒に待っている。いくら探しても見つからないので、諦めてテディと家にとぼとぼと帰ってきた。

リードを放さなければいいのだろうけど、自由に嬉しそうに駆け回るのを見たさに、つい放してしまう。時としては、あまりにも速く歩きたいボニーに、グイグイとリードを引っ張られて指の皮が痛くなる。で、ついにリードを放してしまう。それにしても、一体どうしたらいいのだろう。森は大きすぎるし、道を見失って木々の間も駆け回るボニーを探すのは不可能に近かった。

やがて、一台の車が止まった。小さい子供を乗せた若いお母さんが車の中から、ボニーを連れてきた。大通りを走っていたとき、犬が道路の真ん中でうろうろしているので車を止めて乗せて、近くの獣医さんに行って聞くと、我が家の新しい犬ということが分かって連れてきてくれたのだった。

時速七十キロで車が走るその大道路でうろうろしていたと聞いてぞっとした。なんでそんな全然関係のない方向にまで行ってしまったのか。ビュンビュン行き交う車のシーンなど知らないボニーは、森の中とは様子が違うので、きっとバカ走りもできずにうろたえていたに違いない。車の事故がなくて良かった！

それにしても親切な人がいたものだ。車のトランクではなくて自分の幼子が座っている後部のチャイルドシートの横の足元に、海の物とも山の物とも知らないボニーを乗せて獣医に行き、我が家まで連れてきてくれた。もしかするとこの見知らぬ元気そうな黒い犬が、自分の幼子を噛むかも知れないなどとは少しも疑わなかったらしい。お礼をするのに住所を聞くと、私達も犬を飼っているからお互い様ですと、あくまでもいい人だった。

ボニーをスカウトしてきた当の娘は大学街アーヘンに戻ってしまった。「子供達がいなくなってしまったから、ママ、ちょうどすることできて、よかったね」森の中でテディと共に立ち往生しては他の犬の飼い主に同情されながら、そんな娘の声が聞こえてくるような日々だった。

男性である夫はいながらにして権威を発するのか、私のように困ることはなかった。私はアキからもボニーからもランク下に見られていた。そう言えば、日本で『犬はドイツ人に馴れさせろ』という本を書店で見かけたことがある。

しばらくして、カトリック教徒の《Weltjugendtag 世界青年の日》がケルンで開催された。一週間、世界中から敬虔なカトリック教徒が集まって、一緒に礼拝などをして過ごす。ケルン近郊の市町村の教会裏などにはテントが設けられ、ホールなども世界中から集まる青年達の宿泊施設として用意された。我が家はカトリック教

徒ではないが宿泊宿として申し出た。夫も私もアメリカでホストファミリーにお世話になったことがあるし、特に夫は機会があるとオープンハウスとして提供するのが好きだ。

お世話をするようになったのは、偶然にも、夫が青年として十一年間過ごしたカリフォルニアから来た母親一人と女子四人だった。お世話といっても大したことはない。世界中から集まる青年達は各国のカトリック教徒と交流体験を深めるために、朝から晩まで一緒に過ごすことが目的なので、朝起きると若者達は朝食から教会ホールに集まって一緒に食事をする。私達はベットを提供し教会までの送り迎えすること以外に何もすることはない。

ある日、その日のプログラムが少し早く終わったアメリカ人達を教会に迎えに行った。家に戻ると、家の前にはテディとボニーが仲良く二匹で並んでぼかーんと立っている。背後の玄関のドアはからりと全開き。夫と顔を見合わせた。

「玄関はちゃんと閉めていったのに…」

アメリカ人と私に玄関前で犬達と待っているようにと言い告げて、夫は勇敢に家の中にそろーっと入って行った。もしかして泥棒が入って家の中を荒らしている最中かも知れない、ドアの後ろに隠れているかもしれない。抜き足差し足で夫はそろりそろりと家の中を見回る。

あのぐらいなら自分もできると、待ってられなくなった私も同じように靴を脱いで抜き足差し足で直接二階に向かった。テレビのシーンで見たことがあるような格好をしながら、静かーに、静かーに、一部屋、一部屋、見回す。そっとドアの後ろも。ドアの後ろに誰かが潜んでいたりしたら、一体どっちが先にキャーと叫ぶのか…。

胸をドキドキさせながら、それでも、なんだか誰かが隠れているはずなどない、という考えもないわけではなかった。でも、そうでないとしたら、一体誰がドアを開けたというのか。いくら見回しても誰も隠れてはいない。そーっと階段を降りると、一階と地下室を見回った夫が玄関口に来たところだった。目が合った。不思議この上ない。と、二人、同時に言った。

「ボニー！」

ボニー以外考えられなかった。我が家の新しい状況変化は、ボニーだけ。ボニーがドイツ式の横長のドアノブを下に押したまま、後ろ足でジャンプしながらバックして玄関のドアを開けた。考えられるのはその可能性だけだった。開けたドアからテディと二匹揃って玄関を出て、家の前で悠々と通る車や通り過ぎる人を眺めていたのだ。

ちなみに、生後八週間で我が家に来たアキは《ローマの休日》のオードリー・ヘプバーン演じるプリンセスのように、自分から家を逃げ出すのを面白がっていた。

が、この二匹の犬達は捨て犬兼ホームレス出身だけあって、自分から家を逃げ出すような勿体ないことは絶対しなかった。

何がどうなっているのかと思いながら玄関先に立っていたアメリカ人五人に夫が説明をした。続く反応はもちろん撫で撫で。

「オ～、ボニー！オ～、ボニー！」

何が何だか分からないテディは長い尻尾をぶらぶら振って一緒に喜んでいた。

翌日、夫は早速アメリカ式の丸い取っ手を玄関用に買いに行った。

そうか、ボニーの特技はドアを開けることか。そういえば、アキにも特技があった。私の背中をジーっと見つめて、立ち上がらせ、おやつの入っている瓶の方に行かせる催眠術。娘のクラリネットに合わせて犬吠合唱。テディは喜ぶと、ニコニコしながら長い尻尾をいつまでもぶらぶら。犬はそれぞれに特技があるらしい。

やがてボニーもここが自分の居場所だという意識を持つようになった。それでも自分の家を守るために、知らない人が玄関先に姿を見せると吠えるという犬の本能的な態度を取るまでには一年以上かかった。その間、まったく一度も吠えたことのないボニーを見ては、「このワンちゃんは吠えることができないのかもしれない」と哀れに思ったりした。

休暇に出かけるためにガレージ内の車に早めに荷物を詰め始めると、置いていかれたりしたら大変とばかり、テディとボニーは我先にと荷物の間にぎゅうぎゅう乗り込む。

「今、荷物を積んでも出かけるのは明日なのよ。今夜は自分のベットで寝てね」
車と荷物にしがみついたワンちゃん達は、なんだか哀れだった。

ボニーの特技はドアを開けるだけではなく、ボールや枝を投げると必ずそのものを見つけて取ってきては、投げた人の足元に置いて、また投げってくれるまで長い舌を垂らして嬉しそうにワクワクしながらいつまでも待っていることだった。夫の退職後、その特技を生かして少し遠くの老人ホームに連れて行きセラピードッグとしてボランティアをすることにした。

隔週水曜日とは言え、夫と二人の朝は忙しくなった。ボニーとテディを連れて、五十分はかかる離れた町の老人ホームに出かける。行くと十人ぐらいの認知症の老人達が部屋に丸くなって座って待っている。

ボニーはボールを投げてもらっては、投げてくれた人の足元に正確に戻した。テディは大体私の隣でニコニコしながら立って見ていた。それでもときとしてテディも「ボールで遊ぼう」と投げる気のない別な老人相手になにやら遊んでいた。

四十五分間ボールで遊んだ後、ボール遊び担当者のギターに合わせて皆で歌を歌ってボール遊び会が終わる。歌っている間中、セラピードッグの二匹もちろん尻尾をぶらぶら振りながら一緒に歌った。

「ボニーは今まで来た犬の中で一番優秀で適性のある犬です」

その担当者が褒めてくれた。ボニーは若かったし、目を輝かせて舌を垂らして、投げられるボールを、投げる人を見つめて、体中で楽しがっているのが見えてみんなの人気者になった。

それでも森で一時間朝の散歩をしてから、大急ぎで五十分車を飛ばして時間通りに着く、というボランティアとはいえ伴う義務感がプレッシャーになり、段々に苦痛になってきてしまった。

特に夫は長年の会社での責任から解放されたばかりだったので、次の責任を背負うことも時間の制約も段々重荷になってしまった。雪の中を急いで車を走らせてヒヤッとしたことがあったりして、老人のために役に立っているという当初の喜びが少しずつ負担になり、重く肩に乗りかかってきた。一年半ほど頑張ったが、ついに諦めた。

「やっぱり、こういうことは近場じゃないと続かないよ」

朝の忙しさも退職者には負担になったから、あれは、もしかして午後のプログラムだったらもう少し長続きできたかもしれない。

夫は散歩で歩いて行ける老人ホーム所長に提案した。

「セラピードッグとしての経験があるから、毎週来てあげられるんですが、いかがですか？」

多分その老人ホームは新しいことや面倒なことは避ける方針なのかもしれない。提案は残念ながら受け入れられず、ボニーは犬として特に際立った才能にもかかわらず、飼い主の意志の弱さのせいで、セラピードッグという栄誉ある仕事から手を引かざるを得なくなった。宝の持ち腐れのように悪かったと今でも思っている。

それでも、ボニーは、少なくともその類まれな才能で自分の人生を切り開いた。張り切り屋ボニーはその能力を活かして、娘に存在を自己アピールできた。スペインのアルハンブラ犬猫センターの檻の中で他の五匹と寝起きし、クルミの大木が一本だけ立っている裸土の庭で二時間だけ自由に動き回れる生活から解放された。ドイツの深い森の中で好き勝手に駆け回り川で泳いで得意になる。そんな暮らしを手に入れることができた。何と言っても、我々初老夫婦の元気付け係になってくれた。子供達が飛び立った後、空っぽになってしまった巣に、どかっと座って、口を開けて長い舌を出して、遊ぼ！といつも発破かけてくれた。

17 まぶた裏の父を求めて家族調査に奮闘する夫

夫の退職を目前に、義兄が六十三歳で急死した。アネッテが亡くなって六年後だった。夫は定年後はお互いに庭仕事を手伝ったりして、兄と一緒にいろんなことをしたいと考えていた。青年期に十一年という長期間をアメリカで過ごした夫は、その分抜けていた年月の穴埋めをしたいとばかり兄弟で共に過ごす時間を楽しみにしていた。義兄も夫もアメリカとドイツと離れてはいたけれど、手紙の交換をしながら繋がっていた。夫の悲しみは見ても痛々しかった。

退職すると夫は家族調査を始めた。親戚を大切にしていた亡き義兄は家族関係や祖先などにとっても関心を持っていた。夫は家族調査をすることで亡き兄と繋がりを感じたのかもしれない。情報を集めるためにあちこちの親戚や知人を訪ねたりしながら、亡き義兄の思い出話なども大いに加わって、親戚との関係はそれなりに親密性を増した。それはまるでアメリカ滞在が長く親戚関係が手薄になってしまった夫に、義兄が取り繋ぎしているかのようなようだった。〈血は水よりも濃い〉だけあって、家族調査のためにどんな遠い親戚に行っても歓迎されすぐに話が弾んだようだった。

家族調査をきっかけに旧東ドイツの都市やポーランドの都市、南ドイツ北ドイツ等、まるで退職記念旅行のように方々に出かけることになった。あちこちの市の歴史資料館を訪ね、昔の書類をめくっては過去の詳しい家族の状況を探す夫。ふらふらと街の観光をしたり、犬達と散歩をしたり、時間が余ると気が済むまで車内で本を読んだ。それぞれに満足しながら旅先の収穫を喜んでいた。

旧東ドイツの都市は一九九〇年の東西統一後きれいに整備されて、しかも昔の外装を大切に修復したので、それぞれの趣がある街ばかりだ。（国民は統一以来ずっと、旧東ドイツ復興のために所得税の五、五％をさらに連帯税として払ってきた。二〇二一年からは、一部の超高給取りだけが払っている）戦後できるだけ早くの復興を目指して都市建設をした西ドイツ側とは大違いだ。

東西ドイツ統一直後、旧東ドイツ見学のバス旅行をした友人がいる。窓ガラスのガラスが壊れていて、修理にガラスがないから新聞で窓が覆われていたと話していたし、ホテルがなかったから、国境を超えてチェコのホテルに泊まったそうだ。

ある日、コトブスという市に来た。夫が資料館に行っている間、私は犬達と街中観光をして過ごした。外壁一面ガラス製の建物内にある保育所を見たときは、復興と開発の様子に感心しながらも複雑な西側ドイツ人の国民感情なども推し量られた。

当時の運輸大臣が、西側ドイツにも差し迫って修理や車線増加が必要なところがあると発言した時はすごい批判にあった。子供達の大学街アーヘンに行くと、ケルン アーヘン間の二車線のアウトバーンはいつも渋滞だったが、旧東ドイツでは三車線のアウトバーンを走る車は数えるほどだった。当時、年配の知人が旧東ドイツは元々人口が少ない地方だと言っていたけど、統一後の開発は公平に行われていた。

市内観光も長い犬達との散歩もこなして車の中で読書をしていた。資料館から出てきた夫は、親切な資料館の人が根気よく見つけてくれたと満足しながら、ちょっと街を歩こうと言った。それでも資料館の書類によると探している通りは大分離れていて、うろうろと歩き出した方向とはだいぶ違う。少しばかり街を歩いた後、少々待ちくたびれ気味の私は急かした。

「探したい道路はずっと離れているんだったら、むしろ早く車でそっちに行こう」どこまでも日本人である。

すると、のんびり当てもなく建物の周りをうろうろしていた夫が、急に立ち止まって辺りを見回し、真面目な顔をして独り言のようにつぶやいた。

「ちょっと待って。ここ、僕は知っているような気がするんだ」
周りより少しだけ小高い所に建っているその建物は裁判所だという。言ったかと思うと、夫は急に目の前にある階段を下りだした。もはや、うろうろというような歩調ではなかった。まるで目指すようにさっさと階段を下りて、道路を横断して右側に流れているシュプレー川沿いの歩道を歩き出した。川の右側はシュプレー公園が広がっている。辺りをしみじみと見回し、左側の家並みを見ながら歩いていた夫が、立ち止まった。

「あれ、見て！ ひいお祖母さんの名前、アナっていう名前だった。あその家の壁に書いてある。〈ヴィラ アナ〉！ あの家だよ。僕達が去年、みんなでポーランドまで行って探して見つからなかった家。立ってるのは、ポーランドじゃなくて、ここだったんだ」

実に不思議な出会いだった。

この街に来るのは初めてのはずの夫なのに、この辺りを〈知っているような気がした〉。夫は夢遊病者のように歩きだして、まもなく、ぱっと家族の昔の家を見つけた。理工系で理論的なことしか信じないようなドイツ人男性の夫が、「ちょっと待って。ここは何だか知っている気がする」と言って、何かに引っ張られるように下の道路につながる階段に向かってさっさと歩き出した。

義母のリビングにいつも飾ってあった写真に写っている家のバルコニーには将校らしい制服を着た男性が立っていた。（後になって、親戚の人が、その人は夫の祖母の弟だと断定した。）何十年も壁に掛ったままになっていた額縁入りの手のひら

に載るぐらいの写真の由来など、現役の忙しい子供達にはどうでもよいことだったかもしれない。夫が関心を持つようになった時、義母はすでに言葉の不自由な身になり、義兄は他界してしまっていた。

話のできなくなった義母相手に夫が地図を広げて、その写真の家がありそうな町のいろんな名前を挙げては、ここか、ここかと聞きだしていた。義母が多分これだろうという名前をやっと口から絞り出して、その名前を頼りにポーランドまで行ったのは、ちょうどその一年前のことだった。すでに二、三度ポーランドに行ったことがある親戚の夫婦ハンツとマーグリットと一緒にしてくれた。二人とも癌を患っていたけど、夫の家族調査に乗り気になってくれた。

「今年ならまだ一緒に行けるよ。来年はわからないけど」

出発前になって大学が休みになる子供達が揃って一緒に行きたいと言った。もう親に付いて旅行する気はない、家族調査などと面倒なことにも興味などないと思っていたから嬉しい驚きだった。親戚のハンツが大きな子供達相手に、街の真ん中で建物の説明をしているのを見るとまるで高校の先生と生徒のようにも見えた。

年配のハンツは何でも覚えていた。その昔若かった義母が第一次世界大戦後に戦争未亡人となった母親と祖母と三代で一緒に住んでいた建物の三階の窓を指して、あそこがリビングで、寝室で、キッチンでと説明する。夫の父親の仕事場のあった建物、夫の両親が結婚式を挙げた場所など、まるで昨日のことのよう説明しながら教えてくれた。

そこはポーランドのポーゼンという街で、夫の祖先がドイツ領だったポーランドに住んでいた。ドイツとロシアとオーストリアに分割されたポーランドはその間百五十年間近くも地図上存在しなかった。占領する側としてはただの史実だけど、その間のポーランド人の屈辱感はどんなだったろう。満州に住んでいた日本人家族もいるのと同じように、夫の祖先もポーランドに住んでいた。

一年前の家族探求旅行中、義母のリビングに掛かってあった古い写真を手にして、同じ名前の村や町三か所をナビで探し出しては、写真にある家を見つけようとした。ハンツ夫妻と大学生の子供達も熱心に、まるで宝探しのよう家を探した。三か所で探しても見つからなかったのが、多分戦争で焼けてしまったのだろうという結論で納得することにしたのだった。

それがどうだろう。一年経って、突然、偶然にもその家が見つかった。ポーランドではなく旧東ドイツのコトブス市にその家はあった。神のお告げのように夫は一度も来たことのない所で、まるでその家に引っ張られるように足を進めたのだった。

その家は外壁など見る限り昔のままに大切に修復されていた。夫は家のチャイムを鳴らして、その住人に話を聞きたい気持ち山々だった。が、ちょうどその頃、旧東ドイツにある家屋について、旧西ドイツ人が急に名乗り出て一昔前の所有権を主張したという複雑な問題が起こったばかりだった。

「その手口だと思われるから、やめておこう」

夫は名残惜しそうにその家〈ヴィラ アナ〉を後にした。

気の長い家族調査により、三十年戦争以後の家族のつながりがまとまって、八百人程の祖先の系列の名前と情報が集まった。ヨーロッパで一六一八年から三十年間続いたカトリックとプロテスタント間の戦争は一番長くて一番残虐だったという。その三十年戦争でそれまで教会に保存されていた住民の家族情報などはすべて焼失した。

夫の調べた昔の親戚の中には、息子がクリスマスの午前中に亡くなってその日の午後母親が亡くなったなどの悲劇もあった。

戦時中ポーランドの方から逃げてくる経路を絵図にしてサイコロで子供達と遊んだ親戚は、その絵図を見せてくれた。そのサイコロゲームの写真を別な知人に見せると、「私はここに描いてあるこの橋を自転車で通って逃げて来たのよ」と、ゲームの絵を感慨深く見ていた。

夫の祖父は家業のビール醸造を継ぐ代わりに、画家になろうとしてベニスに行って、ベニスで知り合った友人を頼って中国青島に行った。親の意向に従わなかったので破門され、ひいお祖父さんは長男の名前を家系図にさえ載せなかった。

現在ポツダムにあるその当時のビール醸造工場の建物は、旧東ドイツ時代には管理事務所の建物になり、今はレストランや事務所などが入っている一般用の建物になった。ドイツのがっしりとした石の建物は、時代を超えて外壁は昔通りに修復されても、内部は歴史の変化にもまれながら時代の要望に沿って改装され生き延びている。

義母がまだ元気で普通に話せた頃、「これは私の父の青島滞在期の唯一の記念品なのよ」と私に青い布を手渡してくれた。義母は子供の頃、屋根裏部屋に行っては、若かった父親が青島にいた頃母親宛に書き送った絵入りの手紙を読むのを楽しみにしていたという。義母の父親は第一次世界大戦で戦死した。屋根裏に保存されていた古い手紙を読むことで、義母は少しでも父親という人間を知りたかったのかもしれない。多分夫も第二次世界大戦で戦死した父親を知りたいという潜在意識で、退職後に家族調査を始めたように。

戦中ポーランドから逃げ出すときに、手紙どころか全て置いてこなくてはならなかった。義母が育った土地を急いで後にしたときには、義母は三人目の妊婦で、一

歳の子を抱いて、もう一つの手で二歳の幼子の手を握って逃げたのだから。そのドイツ領ポーランドの地ブレスラウ市脱出用にドイツ人住民に用意された最後の汽車に乗って。青島の記念の精密な刺繍入りの青い一枚の小振りテーブルクロスは、今、私のリビングの飾り戸棚のガラス戸の中に謎めいた雰囲気収まっている。

第二次世界大戦末期、ポーランドからの脱出のための交通機関は海上にもあった。避難民のために最後に出された客船グストロフは、ロシアの魚雷に突撃されて九千人以上の人々が亡くなった。その切符を買って乗ろうとしていた夫の義叔母と従兄弟は、体の具合が悪くなったので出発直前に乗るのを見合わせたため命が助かった。

そのとき助かった従兄弟はミュンヘンに住んでいて遠距離のためにあまり行き来はしていなかったというのに、家族調査をしている夫にはとても協力的だった。いろいろな昔話が出てきくと彼もそのペースに巻かれたのだろう。

「ポーランドに一緒に行こう、そしたらお祖母さんがどの家に住んでいたか教えてあげられる」

空路でミュンヘンから来た従兄弟と陸路で行った私達はツヨッポルトという高級リゾート地の浜辺で合流した。浜辺に沿った林の中で散策した遊歩道には、EUの援助でできたという看板が立っていた。家族調査を通して歴史や戦争の実態が少しでも見えてきた後、平和に特別ありがたみを感じる散歩だった。

ツヨッポルトの海の近くに住んでいた夫の祖母は、戦後はボーデン湖湖畔に住み始めた。水辺が好きな祖母は浜辺の地から湖湖畔の地に移った。戦争後この祖母は家のリビングの壁紙を新しくした。その時遊びに行っていた夫は新しい壁の紙が嬉しくて言った。

「お祖母ちゃん、台所に行っていて、僕何もしないから」

戦後だれもお金がない時期に、壁紙を新しく喜んでいたお祖母ちゃんが後からリビングに行ってみると、壁紙には見事にぐるぐる模様の落書きがしてあった。〈顔中線引いたみたいにしわだらけだったお祖母ちゃん〉は笑っても怒りはしなかった。息子二人を戦死で失ったというのに、どこに住んでも満足していた様子のお祖母ちゃんを思い出す度に夫は言う。

「ああいう人を、〈人生の芸術家 Lebenskünstler レーベンスクンストラー〉って言うんだね」

夫の従兄弟のように、避難民が乗ったその悲劇の客船グストロフに乗り損なった一人にルーペルト ノイデックがいる。彼はやがて同じ難民としての体験から、

ベトナム戦争の難民を救うためにカップアナムールという名の船を出した。ノイデ
ィックは、罪なくも自分の居場所から追い立てられてしまう紛争地の人々を助ける
ために一生を捧げた。

人々が生きてきた足跡を追って親戚や知人の話を聞きながら、夫の気の長い家族
調査のお供をしながらつくづく思った。どんな時代にもどんな所にもどんな人に
も、悲喜こもごものロマンいっぱい的人生がある。一人の人間の人生は、それぞれ
に人の胸を打つ一冊の本になる。

18 テディからの贈り物 突然芽生えた私の絵心

子供達が家にいた頃は規則正しい暮らしだった。ところが、夫が退職にあたって特に楽しみにしていたのは〈時間に縛られない〉ことだった。当初は自由満喫の挙句知らないうちに姿を消して、できた食事が冷たくなってしまった。妻帯者であり犬の飼い主である限りまだまだ縛られることはあると諭し、試行錯誤の末夫は犬の散歩で一日のスタート、朝食は新聞を読みながらゆっくり取って、昼食なしのおやつだけと決めた。夫も太りすぎると心配する必要もなく、夕食の支度までまとまった時間が取れると私も主婦業半分降りる気分で満足だった。ワンちゃん達はそんな日常のメリハリ付け係として大役を受け持つことになった。

やはり時間に縛られないことほどありがたいことはない。山登りや家族調査にも足の向くまま気の向くままだった。私達の老化はまだだったが、始まった気まま人生と並行して、テディの老化が目立つようになってきた。

山を歩いている最中に突然立ち止まって、これ以上歩けないよとばかりに横になってグーグー寝入ってしまうテディ。家族調査に出かけた先のホテルでは夜中にテディが部屋で粗相をしたりしないかハラハラした。国外旅行に出ても、出先でもしテディに何かあったらどうしたらいいんだろうと思うと心から休暇が楽しめなくなってきた。

足を引きずるようになったので、靴を縫って足が擦れないようにしてあげた。やがて家でも粗相をするようになって、当時は日本のように犬用のおむつが売っているわけでもなく（今では犬用の車椅子も売っている）、自作のおむつをいっぱい縫った。尻尾用の穴がついた結構様になるおむつだった。厚地のおむつを大量に縫った挙句にミシンが壊れた。

廊下に敷いた絨毯は取り除き、洗濯機でどんどん洗える敷物を敷いた。段々に、後ろ足が弱ってきてなかなか立ち上がれなくなった。

テディの様子を見に来た息子が昔読んだ日本語の『車いすの花子』という犬の本を思い出して、ああいう車いすがあれば良い、と自分で設計して金具の部分を赤く塗って手の込んだ可愛い犬用車いすを作った。車いすといってもテディ用のは後ろ足をぶら下げて、そのかわりに小さいタイヤが後ろ足代わりになる仕組みの車いすだった。

後ろ足が思うように動かなくなっていたテディは、散歩するときにはその車いすをつけると普通に歩けるようになった。それを付けて歩いているとドイツ人の反応はそれぞれだった。「犬がそこまでして生きるべきなのか。」「犬は自由に闊歩で

きるのが一番幸せではないか。そうまでして生かしておくのは飼い主のエゴではないか。」「車椅子の犬、なんて哀れだろう。」そうかと思うと、わざわざ車を止めて、「犬でも車いすがあれば、こんな風に暮らしていけるんですね。」と肯定して感心してくれる人もいた。

人々のいろんな反応の視線を感じながら、日本人の私は辛かった。ドイツでは犬にとっては自由に駆け回れるのが一番の幸せという考えが大多数だ。そんな中でまだまだとテディにしがみつく飼い主の私は、だんだん肩身が狭くなるのを感じた。夫は私の気が済むまでテディの面倒を見ればいいと言ってくれた。でもやはり彼にはドイツ人の一般的な考えがあると知りながら一人でいつまでもテディにすがって頑張るのには限界があった。

そのうちに、ひとところでぐるぐる回ったりするテディに、なにやらどうもボケが始まったらしいと気が付いたとき、決心がついた。

子供達に連絡した。獣医さんに往診を頼むから、時間があったらお別れに来て欲しいと。その日に合わせて子供達三人が、ハンブルクとベルリンとデュッセルドルフから日帰りで駆けつけた。みんなで最期の散歩をした。子供達三人が揃っての久しぶりの散歩にテディは大喜びだった。

その二、三日前は、やはりもうこれ以上だめだと意気消沈して獣医に電話したというのに。テディの嬉しそうな顔を見ながら、まだこうして喜べるのに、どうして、どうして、と自問自答で頭がいっぱいだった。最期の往診、延期すべきか？どのくらい？また子供達が駆けつけるのか？子供達がいなくなった途端に、また、往診を早くしてくださいと頼むことになるのか？

でもドイツの風習の中で、動物の身にならないで、いつまでも傍にいて欲しいとしがみつくのは飼い主の身勝手という考え方に負けた。獣医さんが来て、テディの最期がきた。

テディごめんね、と救われなかった。テディの最期になんともなく納得しなくて、悪かった、可愛そうだったと、いつまでも悲しさが抜けなかった。

子供達は、テディがいつも私の後ばかり付いてくるので、〈ママのシャッテン（影）〉と呼んでいた。二、三年来私のシャッテンの具合に一喜一憂しては、常にはらはらして暮らしていた私自身つくづく疲れ果てていた。

気を紛らわすためにと息子のいるベルリンに出かけた。息子は短期実習のために、学生の共同生活の家の一部屋をまた借りしていた。ドイツでは短期留学や実習やその他の理由で借りている部屋を一時留守にするとき、その部屋をさらにまた貸しする方法がある。息子はベルリンでの三ヶ月の滞在期間中、一ヶ月毎にまた借り

式の部屋を引っ越して過ごした。部屋のあるところは毎月異なった地域で、そこからいつも自転車で実習に通っていたから、その間にベルリン市内の状況が大分良く分かったと満足していた。

（ドイツ東西統一後、それまでの、西ドイツのボンを首都にするか、昔のベルリンを首都にするかの国会議論は一日中かかった。それだけあって、あれは正しい決定だった。今、ベルリンは政治家ばかりでなく、観光客、芸術家からも好まれるエネルギーギッシュな興味深い街になった。その多様性寛容性は、今となっては少々目に余ることもある。あちこちの国から来た難民移民達が自国の問題のためにデモをしたりする。）

仕事中の息子の迷惑にならないよう住所を頼りに一人でその部屋に行きついた。旧東ドイツ地区にその家はあった。

二、三メートル近くありそうな高さの傷んではいるけど重厚な玄関のドアを開けると、中は天井の高い建物で古いが立派な流れるようなカーブのある木製手すりの階段が目に入った。息子の部屋があるはずのドアのベルを鳴らすと、同居の学生がドアを開けてくれた。息子の部屋に案内されて荷物を置く。ん、これは何だ？

四、五十平方メートルはある一室。コンクリート打ちっぱなしの床は、明るい緑色のペンキで塗られただけだった。その大きな部屋の隅っこに置いてあるマットレスのない木枠とスプリングの金具だけのダブルベットは、まるでベットの骸骨のような様子を呈していた。二、三メートル位の幅で大きな窓が斜めに中庭に突き出ているコーナーには机が置いてあった。机と言っても、それはドア板を工具用木足の上に置いただけのものだった。大きさとしては十分な机ではある。真ん中にあるなんの表情もない薄灰色のソファは、座る部分を引き出すとダブルベットになる。かろうじて唯一のまともな家具だった。

私は《不思議な国のアリス》のように、緑の床を眺め、壁にかかっている赤い百合の絵を眺めた。眺めているうちに、それが百合ではなくて目一杯咲き果てて、花びらがばらばらに広がっている赤いチューリップなのに気がついた。散ってしまう一瞬前の花びらをを描くというその発想。描かれた絵は、美しく気品があった。額に収まったその古い絵が掛かっている向かい側の壁には、ありったけのペンキの残り色を、思うままに筆を揺すって、はねつけるようにして色を付けただけの高さ二メートル幅六十センチ程の板が、無造作に立てかけてあった。

これは一体何なんだろう。普通の主婦として今までに絶対にそういう形ではあり得るとは思ひもしなかった現代極限的状态の住まい。呆れたり感心したり感動しながら、呆気にとられていた。

どぎつい緑色の床を眺め、残り物の板切れに筆をはねつけただけに違いない技法の絵とも言えない絵を見ながら思った。

「描きたい。私も、こんな風に思いっきり色と戯れてみたい。」

息子が帰ってきた。息子に壁にかかっている萎れ始まったチューリップの絵の由縁を聞いた。萎れている花びらは、透き通るような赤朱色で美しい曲線を描いて垂れ下がっていた。背景は透き通るようなレースのカーテン。この透き通ったような色はどうしたら描けるのか。また借りしているだけで、隅に置いてある大きな二つのスポーツバック以外にその部屋とは何の関係もない息子が言った。

「そんなに気になるなら、どんな絵か調べてみる」

フリーダー ヴェーゲルトというサインを基にインターネットで調べた。

「これと同じ絵、50ユーロで買えるよ。欲しい？」

「まあ、一晩考えてみるね」

「じゃあ、今からガールフレンドと夕食に待ち合わせをしているから、一緒に行こう」

息子が言った。息子の実習に合わせて、やはり三か月の実習を見つけて彼女もベルリンに来ているという。知らなかった。私がベルリンに来たのは、テディに死なれていつまでも気が沈んでしまうので、息子とおしゃべりしたり美味しいものを食べたりして気を紛らわそうと思ってのことだった。息子はそんな母親の思惑など、これっぽっちも思いつかなかった。

幸いにガールフレンドは感じのいい子で一目で気に入った。

そうは言っても、息子を我が物と思いやすい母親にとっては、もしかするとこれは究極のショック療法ではないか。シャッテンのテディが死んで、気を落としている母親がどういう気持ちで遠いベルリンまで来たのか、そんな考えは若くて人生真っ只中の息子の頭にはない。

が、まあ、現実が甘くないのは世の常。

「イイ子、見つけたじゃな〜い！おめでとう！乾杯！」

夕食後、若い二人は私の前から姿を消した。

「じゃあ僕はもっと場所がある彼女の所に行くから、ゆっくり自由にしてね」

ベルリンの気候は、中部ドイツのケルン辺りより一か月は遅れているらしく、三月だというのにまだまだ寒かった。緑色の部屋に一人戻った身に寒さが応えた。で

も、寒さよりもっと強かったのは色の魔力だった。部屋の中をうろうろしながら思った。描きたい。このチューリップの絵、やっぱり欲しい。息子に明日インターネットで買ってもらおう。息子にすっぽかされた思いは、とっくに色に圧倒されていた。

緑色の部屋から、コンクリート壁に真紅のペンキを塗った洗面所に行くために廊下に出ると、向かい側の部屋に住む学生が壁から額縁や棚などを外していた。

「引っ越しですか？」

あいさつ代わりに聞いた。

「僕達だれもこの家、出ないといけないんです。あと一週間で、全部空っぽにしないでくちゃならない。持ち主がこの家を新しく改築するんで、今の住人全員追い出されるんです。」

若者が答えた。

「空っぽにするっていうことは、自分達の持ち物以外全部捨てるということ？」

「そう、片っ端から捨てる。台所のソファの上のあの手紙の山も。学生が入っては出て、入っては出てしているうちにあんなに溜まってしまって、もうどれが誰ののか分からない。だから、自分達の物を持ち出した後の残りの物は全部捨てるんです」

台所に置いてあるソファの上には、確かに三、四十センチの封筒が山になっていた。流しの中のお皿も山になっていた。

「息子が借りている部屋に掛かっているあの絵は、あの部屋の学生の物なんでしょうね」

「いや、あれはいつもあそこに掛かったまま。あの部屋の学生はもう戻って来ないですよ。僕はここでは誰よりも一番長い間住んでいるけど、あの絵はいつも同じところに掛かっていて、あの部屋にはもう何人学生が入れ替わったか分からない。だから、あの絵もゴミとして出すつもりです」

「エーッ、ゴミはないでしょう。もったいない！」

「もちろんゴミです。粗大ゴミ。台所のソファも、ここにある椅子も本棚も全部粗大ゴミ。あの絵も、板切れも粗大ゴミ」

「って言うことは、あの絵、私がもらってしまっても良いってということ？」

「もちろん！是非、持って行って下さい！じゃなかったら、あの絵の運命はただの粗大ゴミになるだけ」

学生は顔をほころばせた。思いもかけないプレゼントに私も「ダンケシェーン、ダンケシェーン（ありがとう）」と浮かれ気分で部屋に戻った。

その学生は、これも使って、これも使ってと梱包用に段ボールの切れ端をくれ、ガムテープを貸してくれた。私が〈あんな絵〉一枚で小躍りしているのが可笑しか

ったに違いない。一生懸命大事そうに絵を包んでいる私を横目に、面白くもない片付けをしていた学生のご機嫌が良くなって、寒さが和らいだ感じさえした。

それから二日間ベルリンの街の観光と美術館巡りをしてから、娘のいるハンブルクに電車で向かった。梱包した絵の宝物を抱えながら。

ハンブルクでは美術館だけにした。描きたいと思った後に見る絵画は、以前ぼんやりと眺めていた時より筆のタッチや色使いが生き活きして画家の巨匠が急に身近な存在になった。

また家に帰ると、テディの姿がなかった。悲しみが戻ってきてしまった。テディの晩年の様子が蘇って心がうずいた。そんなとき、犬友達のイリスが南フランスのプロバンスから電話をしてきた。

「気分転換にいらっしゃい」

夫とボニーはもう車に乗っていた。靴を履きながら思い出して、慌ててダンスから数年前に日本で買った水彩画の携帯用セットを持ち出した。それまでも旅行に持って行こうと思えば持って行けたはずなのに、なぜか手が出なかった。

プロバンスに着いてイリス夫妻と朝食をとっていると、近所の人がふらりと寄った。「この人はオランダ人芸術家なのよ」と、イリスが本棚からその画家の絵の分厚い写真集を持ってきた。プロバンス在住の本物の画家が目前でこの絵は自分でも気に入っているだの、この絵はどうのこうのと話している。夢のようだ。

その近所の画家が帰ってから言った。

「実は急に絵が描きたくなくて、携帯の水彩絵の具セットを持ってきたの」

するとどうだろう。彼女も絵が描きたくなくて、たまたまドイツのスーパーのセールで見たアクリルの絵の具セットを買って持ってきたところだという。

その日の午後から毎日二人で絵を描いた。何も知らないで、ただのスケッチ用紙にアクリル絵の具で絵を描くと、白い薄い紙は丸まってしまった。リンゴやバナナ、お皿やコップ、やがて窓から見える景色を描いた。周りにあるものの形を、色を、アクリル絵の具で手あたり次第に描いた。まるで、サリバン先生から文字を掌に示されてはっと気が付いたとき、次から次へと掌に文字で物の名前を教えてもらいたがった盲目で耳も聞こえなくなってしまうヘレン・ケラーのように。まあ、それは大分オーバーだけど、気持ちはまるでそんな風だった。手あたり次第に描いてみた。子供時代に戻ったような爽快な気分だった。

十日ほどしてプロバンスを後にしながら車の中でぼんやり思った。すぐ引き続き絵を描かなければ、絵を描いたのは多分休暇中のお楽しみということになってしまうかも…。

するとどうだろう。帰宅した家の郵便受けには、近くのスーパーの宣伝チラシが押し込んであった。手に取ると、何とそれはアクリル絵の具、絵筆、アクリル専用の硬い画用紙やキャンバスが、翌日からの目玉セール商品として載っていた。

ずっと絵を描いている人には当たり前のことかもしれないけど、自己流で素人として絵を描きながらすごい発見をした。明るい絵を描こうといくら明るい色を使っても、深みのある明るい絵は描けない。絵筆で黒っぽい影を入れる。とたんに、明るく輝く部分が生まれ、絵はいきいきする。

人生には陰の時があるからこそ、明るい時をより味わえる。絵を描くようになってからは、物事がより鮮明に見えてきて生きるのがますます面白くなってきた。これはテディの死を巡っての進展だから、私のシャッテンのテディの贈り物のような気がする。

19 ボニーがリューマチにかかってしまった

テディがいなくなって、ボニーがひとりっこ犬になってから二、三か月ぐらい経った頃、ボニーが歩けなくなった。足を引きずってやっとのことで歩いた。獣医さんはいろんな検査をしてくれたけど、念のために八十キロほど離れた街にある大きな動物病院での精密検査を勧めてくれた。

朝早く出かけて行った病院では、検査のために一日中ボニーを預けなければならなかった。内科、外科などいろいろの専門家の獣医が十何人もいる病院だった。午後遅く迎えに行くと、獣医さんは十枚程のレントゲン写真を広げながら言った。

「全身検査の結果では、ボニーはリューマチです。もう一生治らないでしょう」「つまり、今からコルチゾンを一、二週間続けて与え、具合が良くなったら止め、また症状が出てきたら、またコルチゾン投薬をする。一生そうするしか方法はないです」

可愛そうにまだ若いのにリューマチで強い薬に頼る人生になってしまった。いつも元気印のボニーまで病気になってしまった！

私はテディのことばかり考えていた自分に気が付いた。テディの死後はボニーと散歩に行っても心から一緒に散歩をしていなかった。テディの晩年のことを思い出しては、「まったく、アキといい、ボニーといい、雌犬は威張っていて、テディは小さくなって可愛そうなことをした」と過ぎてしまったことなのに不満だった。今となっては生きているボニーに気を回さなくてはならないのに。悪かった！きっと寂しかったに違いない！

「ボニー、ごめんねー。悪かったねー。気にしてあげないで、ごめんねー」ボニーを撫でながら謝っているうちに涙が出てきた。ボニーが私をじっと見返していた。

それからは本気になってボニーと森を歩いた。ボニーは枝を投げると喜んで取って来ては、「また、投げて」とその枝を私の足元に落とす。それが大好きだった。コルチゾン投薬期間が過ぎて、具合が良いときはそうして遊んだ。するとどうだろう。何週間かしたら足はまた具合が悪くなるはずだった。それなのに、まったく悪くなる様子がない。何か月経ってもボニーは元気一杯だった。

それはリューマチなどではなく、心の病だった。寂しかったボニーは心を病んで歩けなくなってしまった。夫がいくら「ボニー」、「ボニー」と言って可愛がっても、ちゃんと私の内心を読んでいたに違いない。私の気持ちはもうこの世にいらなくなってしまったテディの方ばかり向いていた。元気一杯のボニーが大人しいテディをお尻の下に敷いている感じだったのをいつまでも根に持っていた私を、犬のボニ

ーはちゃんと見抜いていた。ひとりっこ犬になってしまったボニーは、夫からの愛だけではなく私の愛も切望していたのだった。

人間でそこまで犬の気持ちを分かろうとする人はどのぐらいいるのだろう。私には邪念がありすぎて相手の犬をしっかりと見ることはできていなかった。犬達は、でも、本気だ。本気で全身全霊を掛けて飼い主を見ている。犬は人間の気持ちをちゃんとお見通しだ。犬が幸せに生きられるかどうかは飼い主次第で、満足して生きている犬を見ることで飼い主も喜びと愛する心で満たされる。

20 後悔すること

その一

日本で暮らした後、夫は益々日本ファンになり家を建てる時には日本庭園の真似をして大きな石を置くことにした。中ぐらいの大きさでも人手では動かなかったので、クレーン車が運搬するという大ごとになった。石の置き場所が決まって池を造るクロアチア人職人さんが来た。

この家が出来上がるまでには職人さんの顔触れが色々と変わった。敷地に家の地下室になる部分を掘るブルドーザーを運転していたのは旧東ドイツ人、地下室の床のコンクリート流しはポーランド人で、壁レンガを一つ一つ積み上げたのはイギリス人二人、地上階の壁レンガを積み上げたのはドイツ人とトルコ人、と粗構造はドイツ人以外にも三か国の外国出身の職人さん達のお世話になった。

今から三十四年前でも、ヨーロッパでの労働力流通はすでに盛んだった。ドイツ統一の一年後だったから、旧東ドイツから西側に働きに来る人達もどっと増えた。

社会主義下での仕事ぶりと旧西ドイツでの違いがいろんな観点から話題になるような時期だった。旧東ドイツ出身の職人さんは、仕事をする資材がなくなると真っ昼間でもさっさと帰ってしまうという声が聞かれた。

旧東ドイツでは保育所に子供を預けて働きに行くのが当然だった母親達は、旧西ドイツに来たら保育所が足りないのでは家で自分の子供の面倒を見なくてはならないとの不満があった。西側では、母親が家で我が幼子を自分で見るのは当たり前時代だった。

会社勤務がある夫に代わって、もちろん日本庭園に詳しいのは私とばかりクロアチア人造園師にいろいろと日本庭園の説明をした。池の形や盛り土の基本ができた。庭について大分おしゃべりをしたので馴染んだその職人さんが、いよいよ最終日となった日に右手の親指と人差し指中指をこすり合わせながら（紙幣を数える仕草のジャスチャー）言った。

「今ならサービスで、ついでにこの石に穴をあけてあげます。あとから日本的に水を垂らしたりするのにあった方がいいと思いますよ」

造園職人として初めて手掛ける個人的ミニミニ日本庭園のことを、一緒になって考えてくれたのかもしれない。優柔不断なので夫の意見を聞こうと電話したが席を外していて捕まらなかった。実際にどうやって竹筒から水が落ちるようにしたら良いかなど具体的なことなどはまったく調べても考えてもいなかったのに、目の前の

職人さんの右手の三本の指先の動きと、「今なら、ただ」つまり〈本日限りの出血大サービス、無料でいたします〉とばかりの言葉に惑わされてしまった。

「まあ、ありがとうございます。じゃあ、もう来なくなってしまう前に折角だからついでにやっといってください」

自分ではうまいこと経済交渉をしたような気分になっていた。夫がいなくても大丈夫、もう十分自分でやれるじゃないと我ながら気を良くしていた。

夫が帰宅して、その話をすると、夫は一言だけ言った。

「折角の石、可哀そうなことをしたね」

夫のその一言を聞いたとき、私はいかに自分が日本人であることから遠のいてしまったかを実感して全身から血が引く思いだった。

その穴を活用して竹棒を通して水を落とすという風流な仕掛けは実現されないまま月日が経ってしまった。その石の真ん中の穴を見る度に情けなくなるので、大きな平たい石でその穴を隠してしまった。段々には隣に植えたモミジの木が育ち、枝を垂らせて、私の大失敗の穴隠しの石どころか、大石そのものさえ隠すようになった。隠しても私にはちゃんと見えてしまう。

その二

夫は初めて所有した中古車に懲りてから新車主義になっていた。日本に引っ越してから市場状況を調べもせず新車を買った。

その車をドイツに引越す前にいくらで売れるか聞くと、四、五年足らずで自転車に毛が生えただけぐらいしか乗っていなくて走行距離もたかが知れているというのに、購買時の10パーセントの値段にしかならないのを知ってショックを受けた。もったいないので会社の引っ越し荷物の一部としてドイツまで持ってきた。

ハンドルが右側についているその車で学校に子供を迎えに行くと、左側ハンドルに慣れている子供達が集まってきて取り囲んだ。

「クール！」「クール！」（カッコイイ！）

珍しくタクシーを頼んだ時、ドイツでは客は助手席に乗る習慣があるので無意識に左側に座ると目の前にハンドルがあった。タクシーの運転手さんも驚いた。

「僕の代わりに運転してくれるんですか？」

ある日、バス停の二、三メートル先に車を停めて、下校後バスに乗って来る子供を待っていた。待つ間にさっき行った薬局でもらった月刊健康関係サービス小誌を

ハンドルの上にのせて広げて読んでいた。急にトントんと窓をノックされたので見ると、緑色の制服を着た警官が立っている。

「ここは一時停車禁止ですよ」

「あ、すみません。もう、一、二分で子供のバスが着くんです。次の予定に連れて行かなくちゃならないので今日だけ特別です。すぐどきますから。ごめんなさい」

徒歩でパトロールしている姿をときどき見かけるお巡りさん。市民との会話に慣れているせいか、まあ、しょうがないかというような感じでそれ以上は何も言わずに車から離れた。と、急に一、二歩後ろ向きに歩いて、改めて、車の中を覗いて言った。

「ハンドルは、あるんですか？」

その質問が自分の口からもれた途端、お巡りさんは、エッというような顔をした。ハンドルがない！キツネにつままれた気分の一瞬！

その質問にキョトンとして真面目な私はまるでロボットのように、目の前に広げである薬局のマガジンを持ち上げて言った。

「ここにあります」

言った途端に後悔した。警官を馬鹿にするなど、怒られてもいいから言ってみたかった。

「いえ、ないんです」

まあ、これは、古き良き時代の一コマ。今では警官の制服はアメリカのそれに似た紺色の制服となった。その制服姿になったお巡りさん達は、どうももう一つ威圧感があって馴染めない。その制服姿だったら、私はおふざけでもそんなこと言う気にもならないし勇気もないだろう。運転手がいなくても走る車も製造されるようになった今でもハンドルはなお付いている。このドイツの緑色の制服を着ていたお巡りさんの言葉は、世界中でたった一回だけ使われた言葉に違いない。

2 1 津波 そして神業のような日本女子サッカーワールドカップ

女子サッカー ワールドカップがドイツで開催されることになった。ボランティアを募集するという新聞の記事には、試合場となるリストが挙げられ隣市のスタジアムの名前も載っていた。夫が英語と日本語ができるからとボランティアとして申し込むと、応募のお礼にそのスタジアムで行われるサッカー試合の観戦入場券を二枚ずつ二試合分送ってきた。ヨーロッパ全体で優秀なサッカーチーム同士が戦うチャンピオンリーグの試合の券だった。

二度目の観戦のチケットの席は何と一番前の席だった。目の前で選手達が走り抜け、ボールを巡って選手と選手がぶつかり合う。ボールが目前を飛び交うかと思えば、目の前の観客席の仕切りにドカーンとボールがぶつかって、思わず、ワッ、と椅子から飛び上がる。すごい血相をした選手が走ってくる。ハアハアと息が聞こえる勢い。

まるで、常に自分が試合場の真っ只中にさらされているかのようだ。ガッシリとしたサッカー選手達の力と力がぶつかり合う勢いは想像以上の迫力。五感全開、体中で感じたそのひとは、ただのサッカー観戦以上の興奮の内に過ぎた。

目いっぱい面白がって、大の大人の女がいい歳をしてと呆れられるほど小躍りする隣の妻に夫はサッカーより、むしろそんな私を可笑しがっていた。

世の中の善悪や不公平を知らなかった純粋な子供時代に戻った気分で過ごした。二〇一一年三月十日の夜だった。

翌朝、電話が鳴った。寝ぼけながら時計を見ると、八時前だった。

「ママ、日本が、津波。津波で大変！津波！」息子の声だった。

テレビを点けて、へなへなと座り込んだ。目がカーッと開いたまま、感情が消えてしまったような感覚だった。これは何だろう。

テレビの中で人々がアップアップと苦しみながら水の中に姿を消すのが見える。路上を走る車が後ろから押し寄せる津波の波から逃げるようにスピードを上げる。「速く！速く！」思わず叫ぶ。これは何だ、ゲームじゃないのに、これは一体なんだ。昨夜の、サッカーボールのドカーンがまだ体内に残っているというのに、目の前には水が、ドカーン、ドカーン、と襲ってくる。

腰が抜けたように動けなかった。食事何も犬の散歩も着替えも、何も考えられなかった。呆然とテレビの前に座りっぱなしで、その日は言葉もなく一日が過ぎていった。夫も私も全く言葉を失っていた。

ドイツでショック状態で腰が抜けたように何も手に付かないでいる私を慰めてくれたのは、NHKのニュースの後の優しいメロディーだった。いつもと違う優しく静かなメロディーが流れ続けた。優しいふるさとからのメッセージだった。被害者を慰めるための、ショック状態の国民を慰めるためのメロディーは、ドイツにも届いた。優しい国。私の母国。

やがて、翌日から我が家の電話が次々と鳴った。友人、知り合い、親戚から、日本を襲った自然災害へのお見舞いの言葉と、日本の家族の安否を心配してくれる言葉が受話器の向こうから聞こえてきた。

地震の被害にあったかもしれない弟に電話をかけても通じない。個人的なことは何も分からなかった。新聞の開きページには海岸で地震で壊れた車の写真があった。故郷の近くの海岸だった。後になって、茨城県の弟夫婦は五日間電気が通じず外界からまったく閉ざされていたと知った。

人間のちっぽけさを思い知らされる自然災害のニュース。一九九五年の地震のときも、ドイツで無力に日本の自然災害のニュースを呆然と見ていることしかできなかった。

朝、子供達を学校に行かせようとしていたとき、電話が鳴った。父の声だった。「芦屋と神戸、大地震だ」
テレビを点けると、日本の学校の藤棚の下に容器を持って水を求める人々の行列が目に入った。学校に出かけるところだった長女がそれを見て叫んだ。「あー、私の学校〜！」

その五年前まで家族で日本に住んでいたときに娘が毎日通った小学校だった。優しい友達と先生達が大好きで一年生になったばかりの娘が言ったものだ。

「ドイツに帰っても、毎日飛行機で私の学校に通いたい」

地震のすごさが一瞬にわかる画面に、親子でわなわなと震えた。楽しい思いをいっぱいした懐かしい街のあちこちの様子がドイツのテレビに映っている。地震の被害の信じられない光景に呆然と立ち尽くす子供達を、「私の学校！」と泣き出した娘達をドイツの学校に急がせた。阪神大地震も我が家にとっては、近い自然災害だった。遠くて近い自然災害だった。

島国の母国はいつも自然災害にさらされている。どんな被害があっても、日本では被害者が怒ったり泣きわめいたりせずに静かに耐える。そんな姿にドイツ人は感動し、テレビや新聞ではいつもその様子を伝える。

津波の翌日、玄関のチャイムが鳴った。近所の人々が花束を持って立っていた。「どうしていいかわからないけど、これ日本の皆さんにお見舞いと思って、あなたに持ってきたの」

目に浮かんだ涙を抑えながら花束を私の手に渡すと、さっとまた去っていった。

ドイツの周囲の人々の気持ちがありがたくて、日本のために何かしたい、皆さんに代わってお礼を言おうと新聞読者欄にメールを書いた。一流紙だし、まさか掲載されるとは思っていなかったから特にチェックしないでいると、知り合いの人がメールであなたの手紙が載っていると教えてくれた。

二〇一一年三月十九日 Süddeutsche Zeitung (南ドイツ新聞) 掲載

— 津波の犠牲者に対する皆様の暖かい言葉に対し、日本人として、ドイツの皆様は心から感謝いたします。私は第二の故郷のドイツで快く暮らしています。が、母国の皆様が大変な災難に襲われた今、強い絆を感じています。被災者の皆様が、どんなに辛抱強く静かに運命を受け止めているかの様子を見ながら、尊敬の念でいっぱいになっています……そして、子供の頃の教科書に載っていた言葉をふと思い出したのでした。〈我が国には自然資源がない。我々の唯一の資源は我々の勤勉さと能力だけである。〉津波被災地と東京の人々を見ながら思いました。あの教科書の文の実りと現実を、この様子が示していると… —

津波のショックの後に、福島原発事故が続いた。自然災害が人災に繋がった。毎日一日中、日本の事故対策についての放送が続いた。ニュースだけではなく、物理学者などの各分野の専門学者がテレビの座談会で議論していた。どのチャンネルを回しても議論は止むことがなかった。

「あの様子では、きっと炉心熔解に至っていますね」という声が断然だった。座談会ばかりでなく、世界中のいろんな分野の専門学者へのインタビューも多々あった。アメリカの地質学者が言っていた。

「日本の地質では、唯一基の原発もあってはならない…」

日本の原子力事故への対策と奮闘ぶりを見ながら、ドイツ人は原子力という見えない危険を共に考えた。一九八六年にソ連のチェルノブイル原発事故をよく記憶しているからだ。

当時、家の前にあった砂場から子供達の姿が消えた。夫は子供の遊び場の安全性を測るためにガイガー測量器を購入しようとしたがすべて売り切れだった。チェルノブイルと当時住んでいたケルンは、東方に千九百キロメートル離れているというのに新鮮な野菜も牛乳もテーブルからしばらく消えた。

南ドイツのキノコやイノシシ肉は、未だに食用にしないように警告される。その経験があるので、ドイツ人にとって人々が密接に住む日本の状況は他人事ではなかった。ドイツ人は常に行動する。考えて議論しては行動に移す。

三月十二日、バーテンヴルテンベルグ州首都シュトゥットガルトと原子炉二基が建つネッカーヴェストハイムの間に、六万人が集まりお互いに手を繋ぎあって、四十五キロメートルの人間の鎖として原発反対のシンボルとした。これは偶然にも、福島原発事故の前から予定されていたデモだった。

それに引き続いて多くの都市で万単位の人々による脱原発のデモがあった。それはずっと続いた。

十六日には古い方の原子炉が即刻停止となった。三月十四日、向こう三か月間のすべての原子炉検査を指令した当時のメルケル首相は、それからさらに三か月後宣言した。

「超技術先進国である日本の福島大災害を見て、物理学者として原子力発電には〈危険は絶対にありえない〉ということはないと気付きました。現在ドイツにある原子炉八基については即刻、残りの九基については段階的に二〇二二年までに原発廃止とすることを決定します」

当時メルケル首相は、その九か月前、シュレーダー前首相が前年二〇一〇年九月に決定した長期間の脱原発目標を翻し、産業発展のためにこれ以上効率のよいエネルギーはないという理由で、さらなる原発利用を決めたばかりだった。

〈超技術先進国の日本〉の喘ぎを見たドイツ国民がこの苦しい決定を真摯に受け止めたことは言うまでもない。

それから間もなく久しぶりで夫と二人で日本に飛んだ。津波及び福島原発事故の後、折角予定して楽しみにしていた夫との日本旅行はやはり中止しようと思っていた。日本中の皆がショックで心痛の思いで暮らしているところに旅行に行っても楽しむことはできないと夫と決めたのだった。姉にそのことを知らせる電話をしてみると曰く。「外人が原発の放射能汚染を恐れて、みんな自国に飛んで帰ってしまうので、ガイジンじゃなくてフライジンなんて言うぐらい日本国民は失望しているから、中止しないで。一人でも多く外人が日本に来てくれたら、かえって喜ばれるから、中止しないで来てちょうだい」ということだった。

それなら、と予定通りに季節の良い五月に予定通り帰国した。東北に行ったときは、丘の上から街の眺めを一望しようと山道を歩いていると、少し離れて歩いている夫の前に、通りすがりの日本女性が近寄って来て、「日本に来てくださって、どうもありがとうございます」と深々とお辞儀をした。姉の言ったとおりだった。夫も深々とお辞儀をしていた。

十和田湖の遊覧船はだれもお客がいないというのに、予定通りに船が出ていた。お客さんが来たら失望させないようにという計らいだろう。お土産屋さんは軒並みに閉まっていて、私達が泊まったホテルも、「明日からは宿泊客がいないのでしばらくの間閉めますから、もう少し泊まるのでしたら、紹介するホテルにお移り下さい」ということだった。あまりにも寂しい光景に、むしろ先に進もうとバスで青森に抜けることにした。道中バスの外を眺めていると、森の中の白い残雪の間にある小さな湖から温泉のように湯気が沸いていた。ここで地熱エネルギーが得られるのではないかとぼんやり考えながら、すべてが悲しかった。

帰独してから、大きな植木屋に行ったとき、庭師のマイスターが話しかけてきた。

「私は庭専門家だから、日本庭園や文化について学んで、日本にはかねがね尊敬の念を抱いている。でも、今度ばかりは日本政府は国民をなんだと思っているんだと腹を立てた」

翌年またその植木屋に行くと、私を見てその庭師マイスターが近寄ってきた。

「この間、近くの町の会社が土を地上何センチか取り除く機械を何台も、日本に輸出したそうですよ。私は日本のことが気になってしょうがないから、新聞を読んで考える。日本国民は一体どういう人達なのかとね。ドイツでこんなことがあったら、もう国民だれも彼も路上に出て絶対に政府に反対し抵抗する」

津波と福島大災害の被害者達がじっと耐える姿を見ると、だれもが胸を打たれる。ドイツ人もみんな、みんな感動していた。

それでも、原発事故に関しての日本の動きにはドイツ人達は首を傾げた。自分達ではどうしようもない自然災害から引き続いて起こってしまった原発事故に対しても、ただそのまま耐えているだけでいいのだろうか。多くの人々がこの植木屋さんのように思っていた。

夏が来て、女子サッカー ワールドカップが催された。日本チームが着々と勝利を決めていく姿は、ドイツ人のサッカーファンに深い感動を与えた。ドイツ開催だから普段サッカーなどに興味を持たない人達ももちろん試合状況を見守っていた。

メキシコ対日本戦の日、ワンちゃんとの散歩の帰り道近所の人が出た。

「今からメキシコ人の友人と、メキシコの応援に隣町のスタジアムに行くのよ」

慌てて家に帰って夫に言った。

「大変！日本の応援に行かなくちゃ。少しでも応援が多い方がいい！」

息子の侍ブルーのトリコーを着て、夫と日本チームを応援にスタジアムに駆け付けた。チケット売り場で並んでいると、一人の女性が近づいてきて「私達用事ができ

てしまったので、見られないから、あなたに上げます」と二枚の入場券をくれた。いくらお金を払うと言っても取ってくれなかった。それはゴールが目の前に見える席だった。

ついに、日本女子チームは強豪アメリカを差し置いて、優勝した。キャプテンの沢選手が言った。

「魔力のような不思議な力が常に守ってくれました」

《Süddeutsche Zeitung 南ドイツ新聞》も絶賛した。

— 日本人女子チームは、神がかりのように勝利を続けた。大変に印象の強い勝利だった。—

加えて、なにしろすごい一人の選手の言葉があった。試合後、勝利祝福のインタビューに対して息を切らせながら言った。

「地震、津波、福島事故の時、世界中の皆様が応援してくれました。できるだけ何度も勝って、あの応援に対する感謝の言葉の横断幕を持って、できるだけ多く何度もコートを回る機会を作りたかったので頑張りました。」

〈こんなふうに考えるのは、世界広しと言えど日本人だけ！〉外国に長年暮らす者として断言できる。

2 2 遅すぎた大発見 夢の職業

大分以前、日本のある出版社から、「〈ドイツでの仕事と家庭の両立について（ワーク・ライフ・バランス）〉の記事を書いてください」との依頼があった。ジャーナリスト的な仕事はしたことがなかったけど、面白そうなので早速引き受けた。

ちょうどベルリンに定着した息子の所に遊びに行く予定だったので、急遽目的を取材旅行とした。地元一地域だけでの情報収集よりは大都市ベルリンで情報を集めれば説得力が増すし、記事としてもインパクトが強いかもしれない。カメラと取材ノートとインタビューの謝礼のチョコレートが入る大き目のバックに切り替えて、熟年ジャーナリスト誕生！

東西統一後の旧東ベルリンは、四十年間の社会主義下で傷む一方だった建物や道路すべてを復興建設してからというもの、文化と歴史的遺跡が多く残され、それは興味深い素敵な街になった。〈ドイツ観光なら、各地の都市や小都市観光！〉と常々思っている者として、見事に復興した旧東ドイツの街々を見てから、益々のその感を強くしている。

ベルリンでは、友人の娘さんがフランス人と結婚して暮らしているので、まず手始めに仏独夫婦の〈仕事と家庭の両立について〉のインタビューの予定にした。

インタビューの約束まで、まだ大分時間があつた。街を歩きながら考えていた。何か記事にできることはないか。何も考えないでぼんやりと歩きながら目に入るのは、見慣れた普通のドイツの建物で久しぶりとはいえ空はただの青空だ。

でも、ジャーナリストとして書いたら、この光景はどういうふうに表現できるのだろう。〈ベルリンの赤茶のレンガ色の建物は青空の明るさの中でいつもより生き生きして見えた。掃きよせられ少し埃がかかっているような白い残雪が春の真近さを伝えていた。キース・ヘリングの真似のようなグラフィティのある白壁などもベルリンならではの〉…うーん、ちょっと、ありきたりすぎるかな？

通り過ぎた四階建て建物の一階の窓ガラスに子供向けの絵が大きく描かれていて、そこが保育所だと分かった。角を回ってみると、入口付近にロシア語ドイツ語バイリンガルの保育所という看板があった。

バイリンガル教育と〈仕事と家庭の両立〉が必ずしも関係があるかどうかは分からないけど、手始めは情報はできるだけ集めること。これこそ、ロシアが少しでも近いベルリンならではのとその保育所に入ってみたくなった。いくら探しても外部者

が押せるチャイムはない。あるのは関係者だけが入れるように暗号番号付きチャイムだった。

ドイツ中どこでも幼児を守ることは大きな課題だ。デュッセルドルフに住む孫を保育所に迎えに行くときも、娘が予め「子供達の祖母が迎えに行きます」と知らせておかなければならない。「日本の雑誌の記事に使いたいんですけど、子供達の様子を写真に撮っていいですか」と聞いたときも断られた。「個人情報保護のために、写真は一般公開しないことになっています。お祖母さんでも写真は撮れません。保育所でちゃんと個人的成長の記録や、保育所の暮らしの記録としての写真は十分に撮っていますから」

その独露バイリンガル保育所の情報を集めたい一心で、建物の前を張り込み気分で入り口を眺めながらウロウロしていた。そのうちにお迎えの親が来るのではないか。急に背後から来るかも知れないし、ずっと先の方から歩いて来るかも知れない。まるで刑事さんにでもなったような気分だ。

と、急に路上に車が止まった。車から降りた若い女性がこちらの建物めがけてそくそくと歩いてくる。効果あり！来た！子供のお迎えママだ。

足早に数段の階段を上がると暗号を押してドアを開ける態勢に入った。いぶかしく思われぬように気をつけながら私も階段を上った。ドアが閉まらないうちに急いで若いお母さんに続いて、さっと建物の中に滑り込んだ。と、目の前にはもう一つドアがあった。閉まらないうちに靴先をさっと差し込む。

どんな立派な記事を書くジャーナリストでも、必ずしもいつも堂々と建物に入ったり人々に迎えられたりするばかりではないかもしれない。面倒がられたり、煙たがられたりして、きっとかなり面の皮が厚くなければできない。危機地帯で命をかけて報道したり記事を書くジャーナリストに感心しているばかりだったけど、記事を書こうとして〈現場〉に来てみて初めてジャーナリストの苦労が実感できた。

私は胸をドキドキさせながら、まるでコソ泥のように若い母親にくっついて建物の中に侵入した。もしかしたらナントカ侵入罪で捕まるかもしれないような行為だ。若い母親は保育所の先生に挨拶をして自分の子供がいる部屋に向かった。

うまくドアを擦り抜けて中に入り、ほっとして周りを見渡すと向かいにある部屋の小さいトイレや小さい洗面所が目に入った。目の前にある壁には、画用紙で作った大きな木が飾られてあった。広がる枝々の緑色の葉っぱの間には保育所に通って来る小さい子供達の写真が沢山貼ってあった。その下にはカラフルな小さいジャンパーが掛かっている。小さいトイレや洗面台が見えると『ガリバー旅行記』のガリバー的気分になるので私は娘に頼まれるといつも大喜びで保育所に孫を迎えに行ったものだ。

たまたまそこを通った一人の保育所の先生が、見知らぬ日本人の飛び入りをいぶかしげに見た。慌ててバックから雑誌を出して見せた。

「突然にすみません。実は、日本のこの雑誌に〈ドイツの仕事と家族の両立について〉の記事を書くんですが、こちらはドイツとロシアのバイリンガル保育所ということでベルリンならではと思い、ぜひ所長さんにお話をお伺いしたいのですが」すると、丁寧に「ちょっと待って下さい」と姿を消した。

子供の姿が入らないように気を付けながら、大急ぎで何枚か写真を撮る。こういうことを〈コソ撮り〉というのか。所長さんがやってきた。どうぞこちらにと部屋に通されるでもなく、そのまま立ち話だったけど、思いつくままにいろいろな質問をすると快く説明してくれた。それはせいぜい十分程の質疑応答だったけど、熟年後期にしての初体験の突撃インタビューはものすごい印象となった。

ジャーナリストが様々なネタを探しては記事にまとめ、これこそは！と意気揚々と発表しては、読者をうならせたり、読者にけなされたりする過程にはこんな思いもある。インタビュアーによって話は広がったり陳腐になったり、まさに記事の書き手次第だ。

その日の午後の独仏家族を皮切りに、五家族にインタビューをお願いして情報を集めながら思った。この面白さに従事することを、若い頃生きる糧の職業として考えていたらどうだったろう。人生三分の二以上が終わった今頃になって、初めてしみじみ職業ということ考えた。

子供の頃は幼稚園の先生になりたいと思っていた。そのうちに英語との出会いがあって言葉の面白さを知った。高校で美術の時間にポスターを描く課題が出た時、ちょうど読み終わったばかりの『嵐が丘』の本のポスターを描いて本の表紙に翻訳者を自分の名前で入れたら、ただのおふざけだったけど美術の先生がそれを見て「実現するといいね」とにこっとした。あのとき、ハッとすれば良かったかも…

英語と日本語、言葉を操る翻訳というのは面白そうだとなんとなく思っていた。それでも、実際に職業にしたいとまでは考えなかった。大体〈職業〉に付くことすら考えていなかった。

47年前に見たドイツの主婦の家事意識は徹底していた。ダラダラして過ごさない。朝のテレビドラマなどはなかった。専業主婦は朝家族を送り出すと、ぱっぱと家中を片付けてお掃除する、窓掃除も定期的なので、いつどこに行っても家中すっきりピカピカに見えた。きれいな収容戸棚がリビングに陣取っているからか、使ったものは元の所にしまう、無駄なものは買わない置かない、リビングには家族も物を置きっぱなしにはしない。お掃除の後は買い物。当時は、お昼には宿題を持って学校から帰ってくる子供達を待って、しっかり昼食を作っておく。昼食の後は子供

達の宿題の面倒を見る。午後は午前と違ってコーヒーを飲みながら少しだけゆっくり過ごす。感嘆するほど日常生活にリズムがあった。その点、我が家では父親や子供達のリビングでのやりっぱなし、置きっぱなしが横行していたので、ため息付口癖になった。

「みんなの〈ばなし病〉がなかったら、私の仕事は大分減るのに」
きっと日本人母の権力が弱かったせいかもしれない。

ある時、ケルン日本文化会館で丸谷才一さんの講演があった。当時五十年以上は研究し執筆し続けてきた英文学者の、興味深いお話を覚えておきたいと内容をメモする手をもどかしいぐらいだった。と、突然、頭の中に稲妻が走った。

〈丸谷才一さん、素晴らしい。でも、奥さんが全部暮らしのことをやってくれているから、朝から晩まで好きな研究に従事していただけるんじゃない〉

羨望のあまり呆気なくメモを取る手から力が抜けた。私だって朝から晩まで新聞読んで本読んで自分の関心事で過ごしたい。でも私は専業主婦なのだ。これが仕事。退職者夫婦だけの暮らしになって「好きなことやればいいよ」と夫は言ってはくれる。でも実際にそうしたら食事はどうするのか、洗濯は、お掃除は、買い物は、お付き合いは、どうなるのか。主婦という職業に定年はない。自分の能力不足を棚に上げてそんなことを考えた。

以前月一度の読書会に入っていた。娘の友人の叔母さんが入っている読書会で井上靖の『闘牛』を読んだので日本のことを少し話してくれないかと頼まれて行ったことがきっかけになった。その会の終わりに「よかったら私達の仲間に入って一緒に本を読まないか」と誘われた。目標ができてドイツ語本が読めると喜んで参加することにした。

主婦や職業婦人が十二、三人程寄り合って課題の本の内容について話し合う。意見の際に主婦の人が「ただの主婦として見ると、」というような言い方をすると、「そう、そう、主婦ね」と嫌味が飛んだりする。会でみんなが揃うまでのおしゃべりで子供がどうしたこうしたばかりの話が出ると、「そう、あなた達、子供がいなかったら、話すことがないみたいね」などのコメントが出てくる。

主婦専業というのはどうも引け目があるらしく、子育て後はみんな申し合わせたように仕事を探して働き始まった。

今では娘が言う。

「何もかも高くなっているから、以前のママ達のような暮らしをしようと思ったら、今は夫婦二人で稼がないと間に合わないのよ」

でも私は思う。今は女性の男女同権意識と自我意識がずっと強くなっているから、一日中家族が帰って来るのを待って過ごす主婦専業では満たされる気分になら

ない。積極的に自分が働いて得る収入がないから専業主婦というのは価値がなく見える。

「僕がこうして仕事に集中できるのは、君が家を守ってくれているからだ。僕の稼ぎは一緒に稼いだものだ」

と夫は言う。そんな〈縁の下の方持ち〉は尊い行為なんだろうけど…。まあ、自分で時間が管理できる究極的自由業の主婦も、そんなに捨てたものでもない。

〈仕事と家庭の両立について〉インタビューしたのは、もう大分前のことだ。当時、五人中二人の母親が言っていた。「あまり早く幼児を保育所に預けると、ドイツでは未だに悪い母親だと見なされたりする」社会は働く女性を求めているのに、自己実現したいと思う女性も益々増えているのに、世間は未だに子供が小さい間は女性は家にいるものだという伝統的考えからなかなか抜けられないでいる。

記事として出来上がった原稿を読んで、日本の出版社の編集者がメールを書いた。

「ドイツと日本の現状がとても似ているので驚いています」

主婦専業で暮らしてきた年配のドイツ人の友人達も言う。

「今の若いお母さん達の忙しい暮らしは見るだけでも大変。仕事と子供と家事。男の人でも家事半分はすると約束しても、結局何から何まで気が回るのは女なのよ。子供だってどんなにパパが頑張っても、結局やっぱり、ママ、ママとすがりつくのよね。私は主婦専業で暮らせて良かった」

その年配の友人が招待してくれた誕生会に行ったとき、お向かいにいたのはやはり年配の主婦専業だった。話しながら聞いて驚いたのは、医師の国家試験を受かったのに、医師として働き始める前に結婚して子供が出来てそのまま専業主婦になったという。なるほど男の人が〈僕の奥さん〉と飾って置きたい感じの清楚で大人しそうな女性だった。

私達世代は女性の生き方の転換期に生きる娘達の世代の日々を半分羨ましそうに眺めながら、半分は胸をなでおろしているようなところがある。

日本の一昔前は「大きくなったら何になる？」と聞かれたら「お嫁さん」と答えるのが普通だった。「私は職業に就きたい」という自我には目覚めていなかったし、それは奨励されることでもなかった。「女の幸せは結婚して主婦になることだ」おおよそ耳に入るのはそんな言葉ばかりで、職業婦人というのは別世界のことだった。

母親になって子供を持ってから初めて、学校の先生とはなんと意味のある職業かと気づき、病気になって入院してから医者や看護婦の偉大さに気付いた。

自分が面白いと思うことを職業として生きるとしたら、なんと満たされることだろう。職業婦人の娘達の忙しさは見ていても目が回りそうだけど、あっという間に大きくなってしまう子供達を眺めながらの寂しさは、主婦専業のそれとは少し違うかも知れない。

亡きアネッテも言っていたっけ。

「私、元気になったら、勉強し直してソーシャルワーカーになりたいの」

彼女は大人になってからやっと、従事したら満たされるだろう自分の分野を見つけた。でも、実現させるための時間がなかった。

私は熟年後期になってやっと、面白いと思う職業を見つけた。でも、もう人生おまけの時期になってしまっていて実現させるためのエネルギーがない…

日本語の《生き甲斐》に関する本がドイツ語でも何冊も出版されている。茂木健一郎さんの《イキガイ》はベストセラーにもなった。生きて甲斐のある暮らし、満たされて張り合いのある日々は、職業という形ばかりでなく、結局のところ男女みんなが望むところなのだろう。

23 エキゾチックが好きなドイツ人？

その一

日本では、英語やフランス語の文字等が布の模様になっているTシャツや洋服を見かけることがある。それと同じようにドイツでも、漢字がTシャツの模様になっていることがある。その衣類を着る本人はその意味を知らないが、それを知る者として、ぎょっとしたり、ニヤッとしたのは一度や二度ではない。

メモしておかなかったので忘れてしまったが、忘れがたいものには＜屍＞＜骸骨＞若い女性のボリュームのある胸の前の＜使用禁止＞などがある。

その二

植物と庭のインテリアのお店に行くと庭の飾りに東洋ブームに気付かされる代物がある。石やテラコッタでできている仏像の頭だけの部分だ。

仏像の頭だけの品物を店先で見ている間は、一瞥するだけだった。そのうちに、唯一空き地だった我が家の隣の土地に家が建った。その新隣人が引っ越して早々にテラスにテラコッタの仏像の頭の部分を植木鉢の間に置いた。

我が家は少しだけ高くなっているのに、それが垣根を超えて視界に入ってしまう。台所仕事をする度に視線をふと上げるとその仏像の頭がある。見る度に仏様に失礼な気がして気が引けた。隣人が植え込みを植えてそれが見えなくなったとき、つくづくホッとした。

だいぶ以前にケルンの東洋アジア美術館で《奈良の大仏》の展覧会があった。もちろん、大仏様は写真だけだったけど、本堂に備えられている仏像が何種類か展示されていた。

美術品として見ながら、宗教的観点からどうなっているのか知りたくて、たまたま近くにいた館員に聞いた。展示の際には、仏像の目線がすべて美術館訪問者より高くなるように気をつけているということだった。

そう言われてみると、恐れ多い仏教文化の象徴の仏像が美術品として展示の高さの優れによって見事に大役を果たしていた。

その三

最近は刺青がすごいブームだ。ブームというより定着してしまった。あとで後悔することになったらどうするんだろうと、若者の腕が真っ黒になるほどの凄まじい刺青を見る度に心配になる。電車で若い女性の腕や首や胸元にある刺青を見てもパブロフの反射神経のように老婆心が湧く。刺青ファンの若者達、一体何年間位その模様に満足して、何年位経ったら嫌になってしまうのか。後々になって〈若気の至り〉と両腕広げて諦めるのだろうか。お気に入りの洋服でも長年着ているうちに、やっぱりついに飽きてしまうことがあるように、腕の刺青模様がいつか急に嫌になってしまうかもしれない。刺青を取り除きたい人の待ち順番のリストが大分長くて、それも刺青入れより高価だという記事を読んだことがある。

かかりつけの医院の若い美人受付係さんには右腕の内側のちょうど胸の隣に当たる部分に仏像の顔の刺青がある。実にうまく彫ってあると感心して見ざるを得ない。

「あの刺青見た？」

聞くと夫曰く。

「そんな意味ありげな場所には視線を向けないから見たことない」

コンピューターを打つ彼女を見るとその刺青はひとりでに目に飛び込んでくるんだけど。

刺青はやはり遠い日本のエキゾチックさとの兼ね合いがあるのか、ときどき漢字の刺青を見かける。ジロジロ見るのも気が引けるので、流し目で何となく観察して模様が漢字だと気がつくぐらいだが忘れられないこともある。

小柄で小太りのドイツ人熟年後期の婦人のふくらはぎに《女の心》の刺青が彫ってあった。刺青とモチーフを選ぶ動機を想像しながら盗み見をしては面白いがる。

あるとき、当人から刺青と模様の動機と結果を単刀直入見せられたことがある。郵便局に行った時だ。局内にいたのは私だけだった。女性局員さんが聞いてきた。

「あなた、中国の文字分かりますよね？」

「えー、まあ、一応は。」

「私、最近子供達の名前を刺青してもらったんだけど、その字が正しいかどうかはどうも分からないんです。ちょっと見てくれますか？」

「いいですよ」

「ほら、これ」

女性局員はそう言って、カウンターの向こう側で後ろを向いたかと思うと、ぱっと白いティーシャツの背中を肩の上まで持ち上げた。

「クリスチアンとカタリーナという名前なんだけど、どう？そう読める？」

後ろを向きながら私に聞いた。

一応それらしい発音の漢字が並んでいた。うるさく言えば漢字の選択の善し悪しもあったけど、そう言ったとしたらこの子供達にぞっこんの母親の気持ちはどうなるんだろう。消しゴムで消して書き直すわけにはいかない。

まあ本音を言えば、思いもかけないその郵便局員の行為に焦って胸がドキドキしてしまった私には、いつもより冷静には漢字の判断ができなかった。同性の中年女性の背中とは言え、公の郵便局内で目の前で裸の上半身を突然もろに見せられたのだから。おまけにノーブラだった。

「良く書けてますね」

とほめると満足そうだった。

24 シリア人難民 隣人愛から頑張ったものの...

〈地中海でゴムボート転覆。50人の難民が救助されたが、行方不明多数〉
〈ボートの転覆により230人死亡〉

いつの頃からだろう。地中海でのボート転覆による溺死のニュースが後を絶たず増えるばかりだった。やっと無事に浜辺にたどり着いた難民達の救助に当たっているのは、よりもよって自国内の経済困窮で課題十分のギリシャやイタリアの人々だった。

それは当時、ドイツから遠いところのニュースだった。

どうして他のEUの国々は関与しないのか不思議に思っていると、新聞にEUのダブリン協定の説明があった。それによると、難民は最初にたどり着いたところで難民登録をして、その国がその難民の面倒を見るという決まりになっているので、EU圏外との国境や海辺に面しない国は、難民が直接飛行機で到着する以外は直接責任はないという。

まあ、EUの政治家は何と一方的な不公平な協定を涼しい顔で結んだりできるのか。地中海に面しないEU加盟国の人々は、ダブリン協定があるから関係ないとばかりに、まるで左団扇で悲惨なニュースを聞き流しているかのようには見えたと。『民主主義には三権分立に加えて、それを見張る四権としてメディアがあるんだ』と息子に教わった。ドイツのメディアは持続的に難民のニュースを発信し、政治家の無策を批判し続けていた。

アラブ諸国シリアやアフガニスタンではテロや戦争が続き、国民は安全に暮らせる場所を失った。爆撃で死ぬかもしれないのなら、むしろ一か八か行動した方がましだと一番近い先進国のヨーロッパを目指す。

母国が兵器や爆弾で片っ端から破壊されるのを横目に、自分の命を守るために三、四千キロメートル先に安全な場所を求める。その道中を狙ってお金儲けのために密航業者がはびこる。

遠くの出来事だった難民の溺死ニュースが頻繁に流れるようになった。二〇一四年から二年半で地中海の溺死難民の数は一万人に達した。

二〇一五年八月には、ハンガリーからオーストリア間、保冷トラックに乗ったシリア人、アフガニスタン人、イラク人男女大人子供計七十一人の難民が気密な車内で窒息死しているのが発見されたというニュースが流れた。十五平方メートルに七十一人！儲けを狙った密航業者が、難民の弱みにつけ込んでボートや車代としてお

金を巻き上げる。一台の車に乗れるだけ乗せる。乱暴してでも乗せる。難民はヨーロッパにたどり着きたい一心で全財産をつぎ込む。

その十日前にも、同じように保冷トラックで八十一人がオーストリアに着いた。酸素欠乏で苦しみながら、一人の乗客の杖で中から穴を開けたため、辛うじて誰も死なずにすんだという。死亡者がなかったのでニュースにはならなかった。

それから一週間足らずして、ギリシャに渡ろうとした難民の三歳の男の子がトルコの浜辺で死体となって打ち上げられているのが発見された。赤いティシャツの痛々しい幼子の姿は、世界中のメディアを通して人々の関心を揺さぶり起こした。

八月中旬にドイツ移民局の〈シリア人に限りダブリン協定を中断する〉という内部文書がツイッターで漏れたとかで、ドイツを目的地にする難民が急増した。

八月末に、当時のメルケル首相がインタビューで、「私達にはやれます。（ Wir schaffen das ウィア シャッフエン ダス ）」と言ったことで、首相の難民受け入れの姿勢が公になった。

九月初め、首相の「国境は開いています」の一言がゴーサインとなりドイツでは東西ドイツ統一と比較されるぐらいの国を挙げての大騒動、大プロジェクトが始まった。

イスラム教徒の受け入れを拒否するハンガリーから、バスや汽車でどんどん難民がドイツに送られてきた。最初の日だけでも一万人がミュンヘン駅に到着した。急遽ドイツ各地に大きな中央難民受け入れ施設が設けられ、他の国からの難民がシリア人と装ってパスポートを失ったなどのウソ偽りで入国するまでになった。ここまではテレビで見ていたニュースだったけど、あっという間に自分達の直接関わり合う地域にもその波が押し寄せてきた。

市は我が家の近くの閉業になったホテルを買い上げて難民収容所にした。それぞれの地区で市民のボランティアを募ると、我が地区でも初めは数百人もの人が興味をもって集会に集まった。段々にすべきことが具体的に決まってくると、実際に動く人々は徐々に減ってきた。それでも、ヒットラー時代の罪の償いという国民の声もメディアや友人知人から聞こえたほど、国民は総じてかなり前向きだった。

戦時中は自分達もかつては難民としてドイツに逃げてきたと語る高齢者も多かったし、以前は自分も難民だったと語る人たちは高齢者以外にも少なくなかった。ヨーロッパでは各地でいろんな紛争の度に難民の移動がある。亡き義母も旧ドイツ領ポーランドから本国に汽車で逃げてきた難民だった。

若かった時アメリカで外国人として人々の好意を受けた夫は外国人に対してはいつもオープンだ。ボランティアとして早速割り当てられた役目は、イラク人を眼科医に連れていくことだった。英語ができないそのイラク人に従妹だという少し英語のできるイラク人が伴った。その日、夫は彼らに「週末に気分転換に近くの野生動物森に散歩に連れて行ってあげるから、一緒に来たい人を集めて」と誘った。私達は車二台で難民達を迎えに行った。ホテルにはすでに五十人の難民が到着して住み始まっていた。散歩の誘いに応じたのはその中の九人だった。その日一緒に歩きながら私にドイツのこと日本のことを片言の英語で熱心に聞いてくる若者が印象に残った。

二、三日後、避難所での手伝いから戻った夫が言った。

「今日は、イラクでサダム フセインの元将校だったという人に会った。履歴書を書く手伝いをしたんだけど自分の娘二人がどっちが年上か分からない。年が分からなくて、僕の目の前でバグダットにスマホで電話して奥さんに聞いたんだ。もう一人の奥さんはもうドイツに来ているんだって。僕だって子供の誕生日忘れることだってたまにはあるけど、子供の順番ぐらいわかるよ」

まもなく夫はサダム フセインの元将校の付き添いで弁護士事務所に行った。ボランティアの夫は、ついにサダム フセインと間接的にではあるが関わりあうことになった！

人を見かけで判断するのは良くないことだけど、元ホテルの難民収容所で会う彼はサダム フセインの元将校というよりは街角の元パン屋さんのような感じだった。教会関係者として熱心に手伝っている友人のベティーナは「あの人は皆の面倒見がいいから是非ドイツにいられるようにしてあげたい」と言っていたけど、弁護士とのやり取りの時でもどうも信憑性が疑わしいと夫は首を傾げていた。

市の小学校の校庭にもテントが張られて百五十人用のベットが用意された。電話でベットの寝具の用意の手伝いを依頼され、今度は私の出番。十人毎に区切りのカーテンが付いているテントの中の簡易ベットに次々と新品の寝具を包装袋から取り出して用意した。それぞれの寝具の上に新しい毛布も配った。

ここに寝る人達は一体どんな思いや体験をしながらここまでたどり着くのだろう。初めの頃、ホテルに行っても階下に人の姿を見かけなかったので「みんな、どこにいるんですか？」と聞くと市役所から担当者として常勤している人が言った。「みんな疲れて寝ているですよ。朝から晩まで、寝ている」

ドイツ人はきちんとしているから、煩雑にならないように持ち物は誰もベットの下に入れる決まりにするなどいろんな些細なことを話し合いながら、赤十字社員は突然の使命に興奮気味だった。

二つテントの内一つの半分以上を共同のリビングのようにするために職人さんが盛んに床板を貼っていた。夜になるとバスで百五十人が到着する。トイレが八個程並び、シャワーや洗面所用の簡易設備があるバスのようなものが運動場の端に見えた。

「洗濯物は集めて別なところで洗い、個人に戻すことになる」
と赤十字社員が相談していた。それだけの人数の洗濯物を、どうやって分類して区別して洗濯して本人に返してあげるのか、聞きながら私には見当もつかなかった。

ボランティアの一人が言った。

「洗濯ぐらい自分達でできるでしょう」

「ここは学校の運動場なので、下水の設備がないから洗濯設備はできない」

疲れて着く難民のための食事の保温はどうしたら良いかの心配もしていた。（日本のお弁当はなんという便利な食品！）急に湧いた経費や必要な人手の確保や手順などの課題を抱えて何もかも暗中模索そのものだった。後になって、共同のリビング用の場所にも結局五十人分のベットがぎっしりと並んだと耳にした。

翌日また電話が入り、古着の整理を頼まれた。市ではあまり突然の難民受け入れに書類上も実務上も何一つ準備できていなかった。元ホテルのリネン室には市民の寄付の古着がわんさと山のようにになっていた。衣類の寄付はすごかったので間もなく古着はもう十分あるので結構というお触れが出た。

私達は臨機応変の用事を手伝うより、特定の難民の面倒を見ることにしようとパートナーシップを申し込んで、先日の散歩で好感を持ったシリア人ムスタファと、大きな一時収容所から間もなく来るという彼の兄の面倒を見ることにした。

一週間後、兄のアムジャッドがホテルの弟の部屋に落ち着いた。ムスタファとアムジャッドと二人の手続き書類の面倒などで、夫は初めは文字通りたらい回しのようになり毎日あちこち駆け回ることになった。役所側も突然押し寄せたあまりにも多くの難民の数に、何からどう手続きすべきか手探りだった。夫が感心したのは、どこに行っても行列で目が回るほどの忙しさなのに、役人がみなそれは辛抱強く説明してくれることだった。ドイツ人は、何か使命感に沸くと張り切って力がみなぎるタイプなのかもしれない。

しばらくして弟のヘララが同じホテルに着き一緒に住みだした。あとから着いたヘララは、大きな船で普通に座って海を越えたということだった。シリア難民が大手を振ってドイツを目指せるようになった一時期だった。

夫はヘララの面倒をも見始めたけど、三人それぞれに付き合っただけで毎日のようにいろいろな役所に出かけて行くのには限度があり、別なボランティア女性にヘララの面倒を託した。

アムジャッドは役所から役所に移動する車内で夫に聞いたそうだ。

「奥さんが日本から来た時も、こんなにあちこち書類を出したのですか？」

「僕の妻の時は住民登録だけで終わり。生活費も部屋代も語学学校費も全部自分達のお金で賄ったからね。国からはお金は一銭ももらっていない」

ドイツの難民手当は本当に十分に出るので難民がドイツを目指すのも当然かもしれない。当時はバルカン半島の政治家達が「ドイツは手当てが良すぎるからうちの国民達まで経済難民になって行こうとする。わが国で医者の一月の稼ぎ分がドイツでは難民手当として支給される」と意見したほどだった。

「君達が国から受けている月々の手当は、僕達が大学生の我が子達に仕送りしたお金より多いんだからね」

ドイツで月々の手当てにも暮らしにも慣れたムスタファ達に夫は言ったことがある。その頃アムジャッドが我が家に来た時、大切そうに高価な新しいスマホを手にしていた。

当初はドイツ語は何も分からずほんの片言の英語だけが頼りだったが、熱心にドイツ語を勉強をした彼らは一年経つ頃にはなんとか普通に話せるほどようになった。言葉が通じると急に些細なことでもおしゃべりをするようになって、シリアでは日本の《たけしの城》も、漫画番組も子供に人気があるんだよとスマホで見せてくれた。

「難民にとってはスマホは水の次に大事」とは、やはりデュッセルドルフでシリア人難民の手伝いをしていた息子の言葉だ。二〇一五年秋、ドイツにわっと押し寄せた難民の波は、スマホやツイッター、フェイスブックがあってこそその現象だった。

あるシリア人はネットでドイツの手当が良いのを知り、息子が面倒を見ていたシリア人友人を頼りに、アメリカからデュッセルドルフに難民として引っ越して来た。息子はしばらくそのシリア人の手続きも一緒に手伝っていたが、やがてそのアメリカから来たシリア人は麻薬取引に手を出していると知って、ぎょっとしてボランティアから手を引いた。

ムスタファの通訳で彼の母親と電話で話したことがある。母親は戦火を逃れてサウジアラビアにいる二人の子供を頼りにそちらに移動した。スマホで無料のワッツアップ電話の向こうで母親が言った。

「息子達がいつもお世話になって本当にありがとうございます。シリアが平和になったら、是非私達の所に来てください。大歓迎です」

「シリアが平和になったら」耳にして悲しい言葉だ。家族で住んでいた家は爆撃にやられ跡形もなくなった。平和になっても、至る所がれきの山になってしまった故郷、一体どうやって何年かけて元通りの国にしようというのか。

近所の老夫婦がシリアが平和だった頃旅行した印象を語っていた。

「シリアは人々は親切だし、街中が整然として清潔で、教会があって、少し行った先にイスラム教のモスクがあって、すぐ近くにユダヤ教の礼拝所があって、寛容な様子に感心した」

その印象の通りにシリア兄弟はいつも礼儀正しかった。ドイツ語が話せるようになった彼らはシリア脱出の大冒険の話をしてくれた。

アサッドが支配していた故郷の町は、段々にイスラム国に包囲された。アサッド支配下の暮らしはひどいもので、水の供給があるのは一週間に3時間だけで、食料そのものが減りなかなか手に入らず何日も食べない日が続いた。あっても、食品は政府の物だということですから高かった。

二〇一一年には庶民がデモをしたり自由軍としてアサッドに抵抗するようになった。〈アラブの春〉と呼ばれた近隣諸国の改革に倣った結果だ。

アサッドは徐々に若者を捕まえ始めた。デモに参加した者や、路上にいたというだけでも拘束され刑務所に入れられ、そこでは毎日のように乱暴を受けては質問攻めになった。刑務所に入れておく理由がなくなると釈放されたが町からは出られなかった。

若者は大学生だと兵役免除になるのでみんなが大学に入ろうとしたけど、大学を卒業すると自動的に兵隊として取られるようになった。しかも住民は街を去ることを許されなかった。アサッドの軍隊の兵隊は、主にアサッドと同じ信仰の人だった。

エアコン関係の仕事で安定した暮らしをしていたアムジャットは獣医学部学生になった。二年経ってムスタファが大学を卒業すると早速アサッドの兵隊にとられそうになった。「兵隊になったらお前は私の息子じゃないからね」との母親の言葉もあり、行き詰った兄弟二人は故郷を後にすることにした。

その地方には飛行場が二つあったが、一つは破壊され、もう一つは政府の物で一般市民は使えなかったので徒歩で出発する以外方法がなかった。アサッドの支配下にある地域を隠れながら無事に歩き通してイスラム国に入った。

通り過ぎながらコントロールの兵隊にお金をあげると「道の真ん中を歩いたほうがいいよ、端っこには地雷が埋めてあるから。ついこの間も目の前で、家族全員が吹っ飛んだんだ」と教えてくれた。文盲で情報に欠けているから自分の軍隊の正しさを疑わないで兵隊になっている人も多く人間的な兵隊もいた。

そのうちにイスラム国のコントロールに引っかかった。「アサッドの町で何をしていたのか?」「自分の町だから住んでいただけだ」と返事すると怒りに触れて刑務所行きとなった。三日間、毎日三時半になるとナイフを首の前にピタッと付けら

れ目隠しされて質問攻めになった。兄弟別々の部屋で、わざわざ兄弟が言いもしないことを、お前の弟はこんなことを言ったと出まかせを言って困窮に陥るようにした。この三日間イスラム国兵隊は、兄弟のスマホを徹底的にチェックして何か問題になることを見つけようとした。アサッドの写真や女性の写真などスマホに見つけようもなく、無実の庶民と判断したらしく二人とも無事に釈放された。

当時イスラム国の首都となっていた街ラッカには、バスや水など文明的な物は何でもあり、その街の親戚の家で四泊しながら先のことを考えた。そこに居続ければ些細なことでまた刑務所に入れられ、隠れ家用の洞穴堀りなどをさせられ拳銃の果てに爆撃で死んでしまうのが落ちだった。いつもびくびくしながら暮らすよりは先に進もうと決心した。

一か月分の給料に値するお金を払ってミニバスとトラックを乗り継いでトルコ方面に向かい、最後の国境までの道のりは三時間歩いた。

トルコにいる友達の住所を頼りに行くと、その街はシリア人でいっぱいだった。友人宅に三日間、ホテルに二週間泊まりながら仕事を探したが仕事は見つからずお金も尽きた。

サウジアラビアに住む兄にトルコの事情とお金の相談をすると言われた。

「何とかして一人二千五百ユーロづつ工面するから、二人でドイツまで行け」

シリアの伝統で彼らの父親の亡き後、長兄の言葉は父親の言葉だった。

新たにお金と目的地ができたので張り切った。

イズミアの近くから EU 加盟国ギリシャに行けるボートが出ているというので、バスでボート乗り場まで行った。密航業者に関する情報も道中の乗り継ぎの交通機関情報もすべてフェイスブックが頼りだった。救命ベストを買ってボート代千ユーロを払ってボートに乗ったのは夜暗くなってからだった。

長さ六メートル、幅一、五メートル程のボートにたくさんの子供や女性も次から次へと乗ってきて、出発の際にはボートの中は五十人程の人であふれていた。

トルコのディキリからギリシャのミティリーニまでは海上直接航路三十キロメートル、所要一時間ということだった。

やがて、トルコの大きな海岸警備船がボートを止めようと、進行方向に向けて牽制のために鉄砲を鳴らした。トルコからギリシャにボートで行くことは公には禁止されていたからだ。ボートは幸いにも経験を積んだキャプテンが操縦していた。警備船がわざと波を荒くして航海を邪魔しようとしたが、それを翻しながら進むと、警備船がまた邪魔をしてきて、結局六回もぐるぐると回りながら苦闘した。

ムスタファ達の乗ったボートが警備船を避けながら苦難している間にも、その間をうまくすりぬけて通り過ぎる別のボートもあった。ギリシャ国境まであと二百メートルのところまで来て、ボートのキャプテンが降参するからとのジェスチャーと

して、二人の男が幼児を高く抱き上げて、子供も乗っているから手荒くするなど合図した。そうでもしなかったら、ボートをひっくり返すことさえ意に介さない様子だった。そうして注意を逸らしているうちに二百メートル先のギリシャ圏に入った。そこからはトルコの警備船は何の権限もなかった。

〈一時間でギリシャに到着〉と銘打ってはいたが、結局四時間かかった。ギリシャのレスボス島海岸に着いたのは、朝三時だった。ボートから降りると安堵感と疲労感で誰も彼も崩れるように、そのまま浜辺に横になって眠った。

翌朝、街まで歩いて行った。ホテルでは宿泊を断られたので、テントを買ってそこに六日間留まり、ギリシャに難民登録してアテネまでフェリーに乗った。十二時間の船代は五十ユーロだった。アテネから汽車とバスに乗って、マケドニアの国境まで行き、そこから汽車賃七ユーロで二百二十キロメートル先のセルビアに行き、十五ユーロでミニバスに乗って首都のベルグラードまで進めた。

ベルグラードで三泊した後、ハンガリーを目指して二日間森や村を歩いていた。どうも道を間違えたらしいと一緒に歩いていた人達と相談していると、セルビア警察の車が止まって辺りにいた難民十二人を集めて言った。

「お金出すなら、このパトカーで国境の向こうまで乗せてやる」
最初その警官が要求した金額は高くても誰も手が出なかったので交渉を続けて、みんなと一緒に五百ユーロを出し合うと、国境を越えてハンガリーまで乗せてくれた。そのセルビアのパトカーにお世話になった距離はほんの数百メートルだった！

ハンガリーはイスラム教徒を受け入れたくないのでは待遇がひどいらしいと聞いていたので、登録しなくても済むように役人にお金を払うと登録なしで先に通してくれた。フェイスブックで常にどこにそんな役人がいるのかが分かった。ハンガリーから十二人でトラックに乗りオーストリアを通り過ぎてドイツのバッサウに着いたときは初めて心の底からほっとした。

みんなで警察に直行すると、バスでアウグスブルクの難民センターまで連れていかれた。すでにそこには二百人程の難民達がリラックスしてのんびりと過ごしていた。シリアを六月中旬に出て、ドイツに着いたのは八月一日だった。

難民達は大きな難民センターから、さらに市町村自治体に急遽開設された難民収容所に振り分けられて移動した。そうして私達が面倒を見たシリア人達は、旧ホテルだった難民収容所に到着したのだった。

そこでの暮らしが落ち着いてきて、みんなが語学学校などに通い始めるとそれぞれに部屋探しが始まった。私達がボランティアをしていると知った友人知人は我が家にシリア人用にと家具の寄付を持ってきてくれて、我が家の車二台分のガレージ

は一時寄付の家具に占拠された。アムジャッドにマンションが見つかった時は、ガレージにまた場所ができると思ってほっとした。

まず最初に自分のマンションに落ち着いたアムジャッドは、私達を夕食に招待してくれた。テーブル一杯に並んだ野菜や果物をシリアの平たいパンに包んでご馳走になった。オープンキッチンで食事の後、リビングの方に移っておしゃべりしているとアムジャッドだけ祈り用の小さな敷物を持ってきて祈りだした。

「アムジャッド、メッカの方向はこっちだよ」

夫がアムジャッドのお尻の方を指して言った。二人の弟は見ているだけだった。イスラム教徒でも信仰度に程度があるようだ。

一年半経って元ホテルの収容所が閉鎖されることになった。難民たちは徐々にマンションやアパートなどを見つけ、市もどんどんコンテナ式アパートを建てたので、最後にはだれもがちゃんと個人として住む場所が確保できた。難民のための住まい確保のために市が助成金を出したので、新築や増築や改築などの可能性のある市民がそれに応じ、貸し出し用の部屋やマンションが普段より一度に増えた。

ムスタファとヘララは、そんな助成金でできたのだろと思うられる地下室と大きなガレージを改築してできた浴室寝室付のリビングキッチンの部屋を借りて兄弟で住み始めると私達を夕食に招待してしてくれた。沢山のシリア料理がガラスのテーブル一杯に並んだ。

「兄弟でレストランを開いてもいいぐらいね」

本気で言ったぐらい美味しかった。当時私の街にあった小さいアジア食料品店はこの頃アラブ食料品店になっていた。

それでもムスタファの夢はドイツでエンジニアとして働くこと、アムジャッドは空調技術関係で仕事をして将来シリアで役立つように準備すること、ヘララは化学と環境学を学ぶために正式な大学生になることだった。

三人のマンションには、寄付で集まった家具が立派に揃っていた。最初は我が家のガレージに集まった家具を持って行っただが、さらに良いのが見つかるとうちにそちらに切り替えたりしていた。難民用になっていたホテルが閉じたときに、ホテルの立派な木彫りのタンスなどをもらったムスタファはヘララと二人住まいで嬉しそうだった。街で文房具店をしているボランティアのマルコスは、顔が広くて面倒見の良い人なので、口コミでどんどんいろんな人から難民のために立派な家具を工面してくる。「マルコスは魔法の棒を持っているね」シリア兄弟の家に行く度に夫と感心したものだ。

別なボランティアのエリザベスが面倒を見ていたヘララは一年間の滞在許可しか得られなかったのも、ドイツ国相手に訴訟を起こした。

「ドイツでは《餌をもらう手は叩かない》という言葉があるのよ。シリアに戦争がある限りドイツはあなた達をシリアに帰したりしないんだから、いくら何でも訴訟までしなくてもいいでしょう」

私は見兼ねてヘララに言った。

「他のみんなも訴訟しているからやってみればと、エリザベスが勧めたんだ」

ドイツには《政治的迫害を受けている者は難民として守らなければならない》という基本法がある。その法律を守らないからと国を相手取って訴訟を起こした難民の数は当時二十八万人を超した。

訴訟金はもちろん国の負担となる。難民移民局が出した滞在許可が妥当ではないと不服の難民が、フェイスブックなどで他の難民の訴訟での勝利を知り、それに続く。その結果、難民移民局の再検査となり、正式の難民としての滞在許可が下りる例が少なくない。正式に許可が下りると手当でも増え、家族を呼び寄せる可能性もあるので、ただ容認されるだけより立場が確定するという。

ドイツに一度にやって来た難民があまりにも大勢だったので、初めは入国係員の手が回らなくなり、次は滞在許可有無を決める難民移民局員の手が回らなくなり、その後は裁判所裁判官の手が回らなくなった。

娘の友人はベルリンで大きな弁護士事務所で超多忙に働いていたが、これでは生きている意義が見いだせないと高給取りの弁護士業を辞めて、人間らしく生きたいと裁判官になった。収入は減ったけどお陰で時間ができて、恋愛して家族を持つまでになった。彼の近況を聞いた娘が言った。

「毎日、信憑性が疑わしい難民相手の裁判をしているんだ、って」

ドイツに来て二年過ぎた頃、シリア人兄弟は語学学校に行きながら独り立ちして暮らし始まった。独り立ちし過ぎたアムジャッドは、折角夫が一生懸命見つけてきた実習兼職場を提供してくれた会社を、夫に一言も言わずに断ってしまった。別な会社でも同じような条件の職場に付けたのに、何が不満かそれも断ってしまった。夫は後からそれを聞かされた。なんとかして三年間の難民資格を持っている間に、将来の可能性につながる実務訓練としての職場を見つけてあげたいと思っていた夫の失望は大きかった。難民支給金が良いので仕事を見つけるのに急がずに選り好みをしていたのではないか。それは支援が当たり前になりすぎた難民と、手伝おうと手を差し伸ばすドイツ国民の葛藤ともいえる体験となった。《初心忘るべからず》という言葉のことを教えてあげたくなった。

あれから、十一年が過ぎた。大企業から支援金を得てエンジニアの専門研修所に半年通ったムスタファは、今は正式なエンジニアとして新下水処理場の建設の仕事に携わっている。アムジャッドはバスの運転手になった。ヘララも大学を卒業して就職した。ベルリンとアウグスブルクにいた二人の兄弟もケルンに越してきて、家族の半分がドイツでお互いに近くに住むようになった。

ムスタファは以前からシリアで知っていた女性と書類上結婚し、呼び寄せて家族を築いた。一年前に元気な男の赤ちゃんが生まれ、若いお嫁さんは毎日赤ちゃんを連れて頭巾を被って託児所付きのドイツ語学校に通っている。

三人とも今では正式なドイツ人になった。シリア国籍も持っている。サウジアラビアにいる母親と兄と姉一家を尋ねるとき、ドイツ国籍だとビザがいらないので便利だと言っていた。それを聞いて私は笑ってしまった。

「そうか〜！私は未だに日本人。永久在住許可のある外国人」

当時のシリア人難民の一人で今では村長さんになった人もいる。緑の党元党首はその昔十一歳のときにイランからドイツに来た人だ。テレビではさまざまな国や文化圏の出身のキャスターが活躍して人気者になっている。人は見慣れて良く知るようになれば同じ人間としての理解も生まれるから、望ましい未来を踏まえた多様性（ダイバシティ）のある社会になるためには効果抜群だ。過去の暗い歴史を背負って、一にも二にも寛容をモットーにしてドイツは頑張っている。

ドイツで日が浅かった頃は外国人が珍しかったから、ブルンスビッテルという北ドイツの小さい町に住んでいた時は振り向いて見られるような体験もあったし、ケルンでの子育て中に砂場であからさまに「日本人はこんな風に見えるのよ」と子供に私を見るように促したお母さんがいた。これはかなり例外的に失礼なことだとは思うけど、まだそういう時代だった。白菜も大根もなかったのだから、無理もない。今では、行きつけのスーパーには海苔付きの三角のおにぎりも売っているし、アラビア料理も売っていて頭巾姿の女性も当たり前のように買い物をしている。食べ物の〈ダイバシティ〉は、美味しいとあらば、やはり一番問題なく普及しやすいかもしれない。

25 アイデンティティ考

日本人としてのアイデンティティは、心身がぎくしゃくしないように私には何よりもかけがいのないものだ。ドイツ入国二〇一五年当時手伝ってあげたシリア人難民が、もう今ではドイツ国籍を取得したことを知って、改めて思った。

シリア人の彼らにはドイツ国民としての意識はどのくらいあるのか分からないけど、ドイツ国籍を持っていたら便宜上いろいろと助かると喜んでいる。もうシリアが平和になってもシリア帰国は強制されないし、生まれた子供達には暮らしやすい生活があり、また老後の保障もあるから5人兄弟のシリア人達は休暇には帰るけれど、暮らすためには帰らないと口を揃える。

若いときは両親が生きている間はドイツ人にはならないというような考えもあったけど、両親も姉も他界してしまった今でもやっぱり日本国籍と離れることはできないと気が付いた。いくら長くドイツで暮らしても心は日本人だから、ドイツ人になった自分が想像できない。

ミニスカートが大流行だった頃の青春時代。ミニスカートを履く私に母が言った。「どうせ履くんだったら、もうちょっと短いほうが格好が付くね～」よく世間様を気にする母だったけど「世間様の手前、そんな物履かないで」とは言わなかった。日本人にとって行動の一般的物差しのような〈世間様〉は日本人の頭の中にあるかも知れないけど、それを無視しても罰されるわけでもなく見下されるわけでもない。地方の〈世間様〉が苦手な人は、往々にして大都会に引っ越してしまうし、今では〈世間様〉感覚は薄らいでいるかもしれない。

背が高すぎるから男の人には相手にされないだろうというコンプレックスはあったけど、そればかりはどうしようもない。〈世間様〉だって、そこまでは干渉しない。日本にいる限り自分が他の人にどのように見られているかなどとは根本的には考えていなかった。だけど人種偏見というとなんかそうはいかない。表面的な見かけで見下されたりすることもあり得るのだからこれはちょっと厄介だ。

アメリカで知り合ったドイツ人との結婚のことを考えていたときに一番不安なことがあった。五十年前の白人社会のアメリカで、黒人だとかアジア人だとかの違いを（特にバスの中などで）肌で感じたので一生アジア人ということで蔑んで見られるかもしれないという想像に不安があった。ドイツでもしかすると義母になるかも知れない人に英語で手紙を書いた。

「私は日本に住んでいる限り、自分の見かけのことで恥じたり蔑まれたりする気分を味わうことはありません。アメリカでは黒人ばかりではなくアジア人に対しても人種偏見があるという印象が私にはありました。ドイツでは人種偏見ということはどうなっているのか正直に教えて下さい。そのことがとても気になって仕方がないのでお手紙を書くことにしました…」

義母となるかも知れない人からすぐに返事が来た。

「残念ながら、まだ、ドイツにもまったく人種偏見がないとは言いきれません。それでもあなたがドイツに暮らし始めたら、あなたの行動交流範囲ではそのような人種偏見などを体験したり感じたりするようなことはないと確信します…」

事実、そのとおりだった。アメリカで感じた人種偏見という感覚はドイツでの日常生活では感じられなかった。知り合いの高齢のドイツ人男性は「日本はアジアのプロイセンと言うんだ」働き者で真面目なドイツ人と国民性が似ている日本出身の私への好意的言葉だった。明らかに外国出身と見受けられるいろいろな外見の人々が増えた今では、北ドイツのプロイセンなど歴史上で名前を知っているだけで、その住民の性格が日本人のそれに似ているなどと考える人はもうだれもいないだろうけど。

ドイツ語が読めるようになると知りたくない情報まで入って来た。ビジネスマン向けのシュテルン週刊誌の記事は少しばかりショックだった。ドイツ人がタイに行って、タイ人女性を千マルク（当時十万円相当）を女性の家族に払って奥さんにして連れて来るといふ。それから間もなく、スーパーの入口の花屋さんでランの花を買った。

「綺麗ですね。この花はあなたの国から来たのでしょうかね」

好意的な気持ちでわざわざ言ってくれた言葉だったと思うけど、それに、そのお店の店員さんがあの雑誌の記事を読んでいたとは思わなかったけど、つい、タイ出身で千マルクと引き換えにドイツに来た（タイ人の方、ごめんなさい）と思われたくなかったあまり言った。

「私は日本出身ですが、国にランの花が咲いているのはあまり見たことがないです」

家に帰って夫に言った。

「子供が生まれたら、日本語の名前を付けるって今日決めたの。千マルクでドイツにやってきた女性の子供に見られないように…」

恥ずかしながらこれは大分人種偏見の発言だ。当時はそれだけドイツで人にどう見られるかが気になる日々だった。偏見はいけないと思っていても自分がその対象になると、突然態度が変わってしまった。まだまだ修行が足りなかった。

考えてもいなかったけど、ドイツに来て数年もしないうちに私にはすっかり愛国心が芽生えていた。愛国心というのは、多分親を想う気持ちと同じだ。遠くにいればいるほど親への愛は増し強くなる。また自分が何者かとのアイデンティティを考えると親や母国への想いがホンワカするという感じだ。

子供が三人生まれて暮らしが落ち着いてきた頃、夫は会社に日本支社に勤務したいとの希望を出した。それを知った父が電話をしてきた。

「孫達が二つの文化社会の間を行ったりきたりすると大変そうだから、俺達を喜ばせようと思って日本に引っ越して来なくても良いんだよ。たまに会えれば、それで良いんだから」

父の心配をよそに学生時代に東京で楽しく過ごした思い出がある夫は言った。

「子供達にも日本の文化社会を体験させることは良いことだから、大変そうだとばかり考えなくていい。大変だったら、それなりに得るものも多い」

夫は《可愛い子には旅をさせろ》路線を選んだ。

日本語が話せる夫に日本駐在員としての使命が下りたときは、もちろん私も大喜びだった。思いがけなくまた日本で毎日暮らせる！桜の華やかさとのどかな空気の春。セミがミーン、ミーンと賑やかな夏。真っ赤な紅葉と運動会や秋祭りの秋。寒くても太陽が顔を出す冬。日本に一時帰国してトランクを開けたとたんに、またドイツに帰るための用意をしなくても、もういい。

それでも、九年ぶりに住む日本での日常は楽で楽しいことばかりではなかった。ドイツ人駐在員の家族の一員として暮らし始まった私は、もう純粋な日本人だと思われていないのに気がついたからだ。良きにつけ悪しにつけ、ガイジンの妻だった。

近くの長女の小学校で父兄会があった。クラスのPTA委員を選ぶ日、お母さん達は委員になれない理由を次々に述べて断っていた。その春には下の息子も幼稚園に入り少し身軽になっていた私は、子供達の迎えが気になって早く決めたかったので、「広報係なら良いです」と言った。教室中ヤンヤの騒ぎだった。後になってから広報係が一番なり手がなくて決めるのに時間がかかるというのを知った。

そうとも知らずに私は主婦の仕事だけではなく別な課題ができたので張り切った。広報部の小冊子を作る他にも何かできることはないかと皆で話し合った。

「日本に母親として住みだして気がつくのは、やたらゴミに捨てられる物が多いということです。子供達に物の大切さを教えるために、校庭でフリーマーケットをしたらどうでしょう」

提案すると前向きの人が多い広報部ではそれは良いと即座に全員一致。広報部長が言った。

「あなた言い出しっぺとして PTA 総会で提案してきてね」

総会には、一年生から六年生の十八組代表のお母さん達と校長先生と教頭先生が出席していた。そこで、私のアイデアを呈すると、できない、できないの理由が次々と挙がった。「前例がないから無理」「校庭でお金をやり取りするのは問題」

「子供が親に内緒で物を出店するかも知れないから問題」「あなたはドイツに帰る人だから、そんなことを考え出す」という意見まで出て、涙線が緩くなるのと戦った。幼稚園児の迎えが頭にあったので、どうせだめならだめと早く決めたかった。

「良い考えだと思って提案したのですが、そんなにも問題があるとは思いませんでした。すみませんでした。この提案は取り消します」

すると、今まで黙っていた校長先生がニコニコしながら言った。

「いや、やりましょう。良い考えです。学校にもだれも取りに来ない傘が百本ぐらい溜まっています。一本十円ででも売れるでしょう」

言い出しっぺの私はフリーマーケットの実行委員長になった。校庭でお金を使うことによる問題も、子供達が親に内緒で物を持ってくる問題も起こらず、初めてのフリーマーケット場になった校庭には、生徒や父兄ばかりでなく学校以外からも人々がやってきた。ドイツ人の友人まで売るものを提供しに来て思いがけないフリーマーケットを楽しんでいた。

お天気まで素晴らしい秋晴れで盛り上がった校庭には驚きにも新聞記者までご登場となった。二十五万円の売上金は五か所の子供の社会福祉施設に寄付して喜ばれたし、当時あった中国帰還者センターに売り残った洋服なども寄付してすっかり片付いた。

大成功に気を良くして「我が校の目玉行事にしましょう」と言って下さった校長先生は次の年に栄転し、私はドイツに帰ることになった。他のお母さんに頼んでみたけど、それだけのエネルギーがないという返事で一回だけの校庭でのフリーマーケットになった。

日本人でありながら〈ドイツに帰る人〉になってしまった自分の身の程を宣告された出来事だった。日本的考え方の〈勿体ない〉が下になった思い付きだったのに。

息子がいくつの頃だったろう、ふと言った言葉がある。

「ドイツに帰ってきた頃、まだ小さかったから時々思ったんだ。ママが他のドイツ人のママのようだったら良いのにな。でも今はそんなこと絶対に思わない。ドイツ人と日本人の親を持って良かったと思っている。だれとも代わりたいたくはない」

ドイツでさえ子供達はみんなと同じものを持ちたがるから無理もない…

息子はギムナジウムを卒業して大学に入るまでの間に、ドイツから三千キロ以上遠いトルコのイスタンブールまで自転車一人旅行をした。そのときドイツ国のパスポートを持っているというのがどんなに便利かを認識した。ユースホテル宿泊をしながらいろんな若者と知り合っては、しばらくは自転車で一緒に旅をした。道中を共にした他の国のパスポートを持っていた若者達は、国境などであれこれ尋問されたりして大変だったのを目撃したからだった。

自分の母国が世界で信頼される国だということがどんなに有り難いか、それは外国に身を置いて初めて知る。

大分以前、懇意にしている高齢の近所の人から夫に言った。

「フジヤマ、サムライ、ゲイシャ、スモウ。〈日本〉って言ったらそんな一般的な事が頭に浮かぶだけだったけど、君達と知り合ってから僕の日本像というのは大分違ってきた。〈日本〉に関して君は僕にとってはパイオニアだね」

彼は多数の著書のある作家だったから、そんな人にとってさえ遠い日本への印象がそんなものだったというのは驚きだった。日本はドイツからあまりにも遠いから、特に興味を持たなければ一般的なことしかわかりようもない。フェイスブックもツイッターもなかったし、年配者には日本は未だに遠い異国だ。

日本人にとっても、ドイツはソーセージとじゃがいもを食べビールを飲む人が住んでいてヒットラーの台頭を許した国だ。知識人でもゲーテ、ベートーベン、バッハ、ブラームスの生まれた国、東西ドイツ統一ができた国、あとはどんなことを知っているのだろう。

森の中を犬を連れて一緒に歩きながらドイツ人友人が言った。

「あなたを友人に持つことで私は豊かになった」

読んだ本のことをおしゃべりし合う友人のその言葉はすごく嬉しかった。本についての意見などの観点が違ったりすることから私の日本的考えを知ってそう思ったのかもしれない。外国に住むと人はそれぞれ出身国の宣伝塔になる。

二〇〇六年にドイツで開催されたサッカーワールドカップの期間中、ドイツ人は戦後初めて、普通に人々が国旗を大っぴらに振れるようになったという記事をメディアで読んだのは一度だけではなかった。

「一九七四年の西ドイツ開催の時は、若かった私達だって国旗を振る気になれなかったのに、今回は娘が大喜びで振りながら国旗を家に持ってきたの」

友人が言っていた。二〇〇六年のワールドカップは、「三位でちょうど良かった、優勝しなくてちょうど良かった」と人々は口にした。開催期間中サッカー日和のお天気が続く、各都市にパブリックビューイングの場所が設置され、例えばケルンでは街の中心にだけではなく、自国試合応援に来たイギリス人ファンのためにライン

川公園にパブリックビューイングが用意された。ドイツ国民はこの久しぶりの自国開催を成功させようと一心同体になって、まるでドイツ人の心の開放といったような喜びで沸いていた。《Sommermärchen ゾンマー メルヒェン 夏のメルヒェン》との呼び名まで生まれた出来事だった。これは過去の歴史を恥じ入る国民が、久しぶりに堂々と味わえた前向きなアイデンティティの確信だったかもしれない。

今ではドイツ国民の三十%が移民難民出身になっている。そんな中で保守派が〈社会の中心核としてのドイツの文化〉があることを言い出すと、リベラル派が今どきそんなことにこだわるのは不相応だと言い返す。右翼的な匂いのあるその言葉には夫もうなずけないようだ。

それでいてイスラム教徒女性の頭巾には違和感があって馴染めない。外国人の私も馴染めない。リベラルなドイツ人友人でも、折角私達が築いた男女同権の社会の中で女性を卑下するシンボルの頭巾を自ら身に着けるのを見るのは快くないと言う。

ドイツ人が過去の歴史的罪悪感を抱えながら民主主義のもとに、真剣に考え夢中になって議論し自分達の国がどうあるべきかを模索するとき、その基本になる考えが伝統的ドイツ文化に基づくものであるべきだと主張するのは、外国人排斥につながることはないと思う。

外国からやってくる人々のためにドイツ的なことを差し置いて、世界的普遍的な道徳心と文化だけを核としたら、ドイツ人達が自分のアイデンティティを失うような気がして外国人を煙たがったり、右翼の増長につながったりする。

私が精神的に安定した一人の人間であるために日本人であることをやめないのと同じように、ドイツも伝統的文化の中心核を守り続けることは健全な安定した社会のためには大事だ。極右翼党のAFD（ドイツのための選択肢）は難民がわっと押し寄せてきた当時に結成されたが、今では難民反対ばかりではなく今の政治が不満な人まで投票する。考えなしに投票した結果、ヒットラー台頭の時のように極右翼が強くなってしまうのはドイツでは絶対に許されないから禁止しようという意見が出ると、党を禁止しては民主主義に反するからできないという意見も出る。暗い歴史を背負っているドイツ人は自国を抱える意識は人一倍強い。

26 心のよりどころの日本語

コロナが世界中を麻痺させるまでは日本語を教えていた。とは言っても、夫と友人相手だけの同好会のようなもの。ビルギットは日本駐在員の妻として二年間日本に住んだだけなのにすっかり日本びいきになったドイツ人。ドイツに戻ってから成人学校で学んだだけだというのに、若い頃に日本の大学で日本語を学んだ夫としっかり歩調を合わせて頑張っている。《意志あるところに道あり》を実現している素晴らしい一例だ。

言葉の習得は何歳になっても希望が持てる脳トレだということで、私は夫が週一回宿題をあたふた済ませては教科書やノートを抱えて出かけて行くのを喜んで見ていた。が、成人学校で新しく来た日本人先生がいつも大幅遅刻してくるとの不満で二人止めてしまったためクラスが存続できなくなった。仕方がない、折角の脳トレ奨励のためにと私が先生として一役買うことにした。夫だけ相手の授業など絶対に長続きしないと思い、夫と一緒にそのクラスで学んでいたビルギットを誘った。正解だった。

今となっては六〇年近く前の話ではあるが、夫は日本に一年間留学して日本語を学んだ。ちょうど学生運動の真っ盛りで東大が封鎖された年。夫が日本語を学んでいた早稲田大学も封鎖された。

過激派学生達は過激とは言え、やはり日本人。試験真っ最中の外国人学生の教室がある建物は試験が終わるまで封鎖しなかった。試験が終わった途端にドヤドヤとなだれ込んできて机や椅子を積み重ね始まった。その不思議な光景は今でも夫の目に焼き付いているそうだ。

毎週ドイツ人二人を前にして日本語と対面していると、漢字とひらがなが交じりあっている言葉の日本語が、実に美しいことに改めて気づく。

アルファベットだけが並ぶ西洋語や、漢字だけが並ぶ中国語、長短のミミズがクネクネしているような形の文字が組み合わさってのアラビア語（失礼！）も、意思伝達を可能にする言葉だけど、それはある原則の基に種々の形をした文字の組み合わせで文章ができる。

日本語の文章は、漢字とひらがなとカタカナというそれぞれ異なった形式の三種類の文字が組み合わさって作られる。三種類の文字のどれを選ぶかによって、文章自体にも表情が生まれる。ドイツ語でももちろん書き手によって同じ内容が全く違ってくるのは当たり前だし、アルファベットで綴られる文章そのものでも選択され

る言葉で表情が出る。それでも、アルファベットを並べて文章を演出する、それはどうなのか？アルファベット文字の専門家から怒られるかも知れないけど、その可能性については考え込んでしまう。アルファベットを並び替えるだけで、一体どうやって？

それが、日本語ではいろんな演出が可能だ。できた文章は一目で意味が分かる。ドイツ語などは単語が同じように並んでいるだけなので、そう簡単に斜め読みができるわけでもない。ドイツ人の友人に言わせれば、ドイツ語でも斜め読みができるというけれども、多分日本語の斜め読みの可能性程ではないような気がする。まあ、自分の能力を棚に上げてのことだけど… それにしても日本語が母国語で良かった。これを後から大人になって習うのは大変なことだ。

日本という国にいと日本語が空気のように湯水のようにあるけれど、ドイツに住んでいる私にとっては日本語は探さないと見つからない存在だ。

今では日本語のお店の看板などもデュッセルドルフではいくらかでも見られるし、二件あるスーパーではドイツ人まで当たり前のように買い物をしている。

四十七年前は、デュッセルドルフにある日本食料品店は本当に小さな街角のお豆腐屋さんというような風格だった。ドイツに来る前は、ドイツで自分が一番恋しがるのは大好物の大福もちだろうと思って疑わなかった。その小さなお店には大福もちは売っていなかった。と、どうだろう。どうしても買えないとなるとチョコレートやケーキでも良しとなった。もちろん、あんの入った和菓子を口にする時は至福を感じるけど、それがないと生きられないわけでもないと分かった。

口から手が出そうに欲したのは日本語の活字だった。そればかりは他の言語でも間に合うというわけにはいかなかった。

両親が元気だった頃、乾物食品や羊羹や孫のための玩具や洋服等を段ボール一杯に詰めた荷物を事ある毎に送ってくれた。いろいろと考えた挙句のいろんな物が詰まっていた親心が身に染みた。

段ボールの梱包の一部として中に入っている新聞から、日本の空気がふわっと浦島太郎の煙のように私の顔と頭を包みこんだ。日本で暮らしている人々の雑踏やテレビのニュースが聞こえてくる。初めの頃はその浦島太郎の箱のような段ボールを開けた途端に漂ってくる空気によって、一時ホームシックになるというパターンだった。

今ではインターネットがあるし、心の拠り所として長年買い溜めてきた多数の日本語の本も家中そこここに並んでいるから、ドイツ暮らしを始めたばかりの頃の新聞や書物の活字への飢えは収まった。母国語に接していたい一心で、新聞の隅々ま

でまさに美味しい最後の一口を逃さまいと重箱の隅まで突つつくような読み方はしなくなった。

ところが、日本語が空気のような存在の日本ではどうも言葉がないがしろにされている印象がある。漫画や、テレビや、ソーシャルメディアを通してか、日本語がけたたましく単純表現になり含みのある言葉が使われなくなってきた感がある。

〈今は、そういう言い方はしない〉〈今の人は、そんな言葉分らないからね〉と。知識人は日本がより国際化するためには外国の表現を取り入れるべきと思っているのか、往々にして、従来からある日本語の代わりにカタカナの言葉を使う。

例えば、〈生活の質〉という立派な日本語があるのに、〈クオリティオブライフ〉という人によっては説明が付かないと分からない言葉を使い、それが通用語になる。若者にゴマすりのつもりか、頭に〈インプットする〉〈ゲットする〉という言葉を使った年配有名小説家がいた。人と〈関わりあう〉ことを、まるでそれが日本では今までなかったことかのように〈コミットメント〉という言葉で説明する。日本語にも、その意味が明白で器用で便利でれっきとした漢字の言葉があるというのに、時代に沿った特別な言葉だと強調する意味でか、カタカナが登場する。庶民は煙に巻かれて迎合してしまう。私だって、今はその言葉は使わないと言われて、受け入れるカタカナだってあるけど…

日本語という言葉が小説家や知識人が積極的に守ろうとしなかったら、出版界が意識して守ろうとしなかったら、そういう時代だからとどんどんカタカナに切り替えていったら、あと五十年もするうちには日本の出版物はどんな風になるのだろう。

ほかの外国語と違って、ひらがなと漢字が奏でる文章の日本語は見ても美しい。日本語を学ぼうとする多くの外国人が、日本語で益々頻繁に使われるカタカナの言葉に首を傾げる。カタカナそのものは機能的文字であっても美しくはないからだ。

ドイツ人から「私の名前を日本語で書いて」と頼まれることがある。ひらがな、カタカナ、漢字の三種類の可能性、漢字ではもっと別にも可能性があるという例を挙げて書き並べると、必ずや、漢字かひらがなを選ぶ。

外国人で日本語を学ぶ人達はどんどん増えている。もう大分前になるが夫がデュッセルドルフに日本語の検定試験に行ったとき、試験場は約五百人程の若者で溢れていたという。老人はもちろん夫も含めて数限られてはいたけど、それでも八十三歳の物理学者や七十歳位の元研究者などがいたという。

日本語は見ても、読んでも、書いても、興味深い言葉だ。日頃、相手に意思を伝えるために、無意識に日本語を使っている人達は考えもしないかもしれないが、見て一目で理解できてしまうというのが日本語は素晴らしい。

スマートフォンやコンピューターで簡単に漢字が書けてしまう時代に、子供達が辛抱強く一字一字漢字を習うのは大変かもしれない。それでも、一度習った漢字は頭の中に残り、後で本や新聞を開いたときに漢字がひとりで目に飛び込んで、そこに何が書いてあるか一瞬のうちに読む人に訴える。そんな魔法の力が、漢字にはある。ひらがなというなだらかな平野に囲まれて漢字が山のようにそびえ立ち、美しい景色の文章となる。

英語が世界共通語になって、英語圏社会の考え方までが世界の中心になってくる。ドイツに暮らしながら、同じ西洋人でも英語で話す国民（アングロサクソン）と他のヨーロッパ語で暮らす人達の国民性には大分相違があるのが理解できた。外国人との相互理解のためには英語も大切だ。でも、何より大切なのは、自分の言葉で自分が考えることを言い表せることだ。頭の中から母国語が消えたと悲しい思いをした者としてしみじみそう思う。自分が何を考えて何を言い表したいのか。

ドイツ暮らしがいくら長くなっても、とことん自分を表現することができるのは赤ん坊として聞いて覚えた自分の言葉母国語だ。日本語で話している限り、日本精神を保つ自分がある。アルファベットに囲まれて暮らしている者として切に思うのは〈いつまでもあると思うな美しき日本語〉。

この稀な言葉、日本語をもっと大切にしたい。日本国外で、この言葉の魅力に憑かれた人達が増えている。日本語を学びながら知る日本文化精神は、資本主義、利益主義、利己主義、消費主義など、あまり喜ばしくない方向に進みつつある文明発展ぶりの世界状況ににげんやりする人々の目に、きっと新鮮に映るのではないかと思う。

27 言葉の力

その一

大分前、南ドイツのテュービンゲン大学に留学している若い日本人友人から電話があった。

「クリスマスだからと、折角母が送ってくれた小包がなくなってしまったんです。

問い合わせても、知らないと言われるだけで。すごく残念なんです」

日本で発行されたという小包番号をもらって、関係者に電話をした。

「その担当者は休みですから、明日電話し直してください」

翌日、電話すると、その担当者が言った。

「それは私の担当ではありません。別な番号に電話してください」

別な担当者に電話をすると、今日は出先勤務でいないので明日掛け直してくださいという返事だった。翌日、電話を掛け直した。

「日本からの小包が届かなくて困っています。手持ちの小包番号の行方を調べてください」

「調べてくれと言われても、調べようがない。何しろこのホール、小包でいっぱいなんだから」

大分気のない返事だった。

「そうですか。私は日本からの留学生の代理として電話しているんですが、そういうことでしたら、ドイツでは小包が無くなるという評判になってしまいますね。知り合いの別な日本人学生の小包もなくなったというし、別な外国人の留学生の荷物も届かない、と学生の間で話題になっているそうです。あなたのお仕事はドイツという国を代表する貴重なお仕事ですが、留学生達が自国に帰ってから〈ドイツという国では荷物がまともに届かなかった〉というレッテルが付いてしまいますね。それは残念ですね。私は長年ドイツに住んでいますから、外国人の私でもドイツにそんな汚名が付いたら残念です。そんなでは簡単に荷物の消息が分からなくなる発展途上国と一緒にされてしまいますね。留学生のドイツでの印象はあなたの手中にあるんです。あなたはドイツ国の代表をしています」

すると、担当者が、ボソッと行った。

「もう一度小包番号を言ってください」

それから小一時間もしないうちに若い友人から電話が入った。

「お陰様で母からの荷物が届きました！一か月以上前に行方が分からなくなってしまった友人の荷物まで届きました！」

その二

家を建てるときに日本式のお風呂場を作りたいと思った。洋式の湯舟の隣にシャワー用にゆったりとした洗い場を作るために、淵用に小さいタイルを選んだ。小さいタイルなら、洗い場の仕切りに角ばった淵ではなく、ぶつかっても少しは安全な丸っこい淵ができるだろうと考えてのことだった。

タイル職人さんが手の平の小さい六角形のタイルを見ながら言った。

「六角形タイルで丸まった淵なんてできないですよ」

「ドイツの職人さんのマイスターという名前は世界でも有名ですね。でも日本の職人さんはマイスターなどと名前はつかなくても、六角形タイルで丸まった洗い場の淵を作るなんてだれだってやっていますけどねー」

職人さんの個人的能力にもよると思うけど、あまりにもチャレンジ精神に欠けているその若い職人さんに呆れて、やんわりと言った皮肉だった。

職人さんは何も言わないで、仕事にとりかかった。

やがて出来上がった丸みのある淵を見せながら彼の顔は得意満面だった。その小さいタイルでできた洗い場の丸みのある淵は、初めてやったとは思えない出来栄えだった。六角形の小さいタイルを手のひらで転がしながらの面白くなさそうな顔からは想像できないような、達成感一杯のにこにこ顔だった。

「どうです、ドイツ人の僕にだってできますよ！」

その三

出先から帰って家の前に停めた車から降りると、すぐ目の前で一人の男の人が自転車から降りて、私相手に何か大声で怒鳴りかけた。

「え、何のことを言っているのですか？」

訳が分からないので聞き返した。

「さっきの十字路で、俺の優先権を無視して、右折した！」

「さっきの十字路って、あのレストラン前の十字路ですか？」

「そう！」

「まあ～、あそこからここまでわざわざそれを言い到我的車を追ってきたんですか？」

「そう！」

「まあ、それはご苦労様でしたねー」

十字路からは二キロ近くもあるので、その執念に驚いて思わず言った。

「まあ～、気が付かなくて、ごめんなさい！危なかったですね！それにしても、あなたに何もなくて良かったです！気が付かないでごめんなさい！まー、恐ろしい！危なかった！でも、そんな黒い色のサイクリングウェアで、黒い自転車に乗っていたら、迷彩色で見逃してしまいますよ。まあ、無事でよかった！ごめんなさい！それでもこれからはもう少しカラフルに着た方が安全ですね。まあ、危なかった！怪我しなくて良かったです！ごめんなさい。それにしても、その色じゃねー。」

直進している自転車を見損なって右折してしまった自分にもドキッとするし、わざわざそのことで文句を言うために二キロ近くも自転車で追いかけてきたその男性の執念にも怒りにも、呆れ、驚き、動転して本気で同じことを繰り返した。

その男性は優先権を奪った運転手を怒って、こてんぱんにやっつけて自分が危ない目にあった腹いせをしてやろうと、車の後を追って文字通りカッカッと息巻いて自転車のペダルを漕いだに違いない。

が、思いもかけなく日本人女性が、さっさと謝っては無事で良かった、そんな色の格好をしていたら人の目に留まりにくくて危ないと心配する。気が抜けてしまったのか、あとは何と怒ってうっ憤を晴らせようかと考えているのか、それにしてももっとケチつきたいのにといいながら、彼は息をハアハアさせながら立っていた。

自転車を漕ぎながら、怒りがカッカとペダルを踏むエネルギーになって爆発させたい一心で来た挙句に、何だか黒で目立たない色を着ていた自分にも少しばかり落ち度があったかのように言われて、それはそうかもと気が抜けてしまったのか、呆気ないほど突然に「じゃ、」と自転車にまたがって今来た道を走り去ってしまった。

あんなに急に姿を消さなかったら、日本の舞台芸術には黒子という真っ黒の衣をまとして活躍する役がある話をしてみたかった。

その四

一年前、新聞配達人が変わった。前任者は辞めるときに、「残念ながら健康上の理由で、辞めなければならなくなった」とわざわざ挨拶の手書きのカードを郵便受けに入れてくれた。

新しく担当になった新聞配達人は月とすっぽんの差だった。全然やる気がなさそうに新聞はシワになっても平気らしく、少しばかり破れても平気らしく、毎日郵便受けに新聞を無造作に押し込んだ。雨が降ったときなど、新聞が半分以上顔を出していたので、新聞がびしょ濡れになった。暖房機に当てて、しばらく待ってからやっと読めるようになった。

家の前や前庭には配達書の紙や新聞束を閉じていたプラスチックバンドが、その日その日であちこちにひっくり返っていた。

夫が配達所に電話をして状況を説明しても、その後も様子は変わらなかった。

ある朝早くたまたま起きていた夫が新聞が配達されるのを耳にしたので、玄関を開けて少し気をつけるよう頼んだ。分かりましたと言う代わりに「配達所に連絡したのに、なぜ改まって直接言うのか」と返ってどやされたという。

その後しばらくの間は、夫から直接意見されたことでご機嫌を損なった配達人が、何か玄関先で変なことを考えないかと不安にさえなって、ガレージ前に置きっぱなしの車もガレージ内に入れることにした程だった。それでも配達仕方のいい加減さが変わらないので夫が言った。

「もうこの新聞を取るのは止めよう。もう、気持ちの負担になってしまった。デジタル版を購読するか、別な週刊誌の《シュピーゲル》を購読しよう」

気の荒んだ感じの配達の仕事方をここ数か月見てきた私も、夫の気持ちも分からないではなかった。それでも紙の新聞に未練があった。

「私にチャンスをちょうだい。手紙を書きたいから」

クリスマスの十二月二十四日早朝に、向こう二日間分の厚いクリスマス祝日用の新聞が配達される前の夜中、手紙を書いた。

— 新聞配達担当様、

私は日本人です。四十五年前に日本からドイツへ来ました。苦勞しながら、ドイツ語を話し、読み、書くことを覚えました。もう高齢になりましたが、私は好きな《Süddeutsche Zeitung（南ドイツ新聞）》が毎日配達されるのを楽しみにしています。

デジタル版で読むことも可能ですが、私は紙の新聞が好きです。紙の新聞には、ロマンがあります。ジャーナリストが調べて書いて、印刷屋さんが印刷して、電車に乗って遠いミュンヘンからここまで運ばれて、最終的には、貴方という配達の方が、みんながまだ寝ている時間に私達のところまで届けてくれます。

朝、新聞を手にするとき、私は夜の間に次々とそれぞれの位置で働く皆さんの結果としての新聞に重みを感じます。そんな新聞がシワだらけになっていたり、破れ

ていたり、濡れていたりすると胸が痛みます。配達書の紙やプラスチックバンドが、前庭やガレージの前に、時として路上に転がっているのを見ると、あなたに何か不満があるのかその意味を推し量ろうとしています。

私はこの《Süddeutsche Zeitung 南ドイツ新聞》を読むのが大好きです。読んで世界で何が起きているのか、人々が何を考えているのかを知りたいのです。私は、目が正常に機能し、脳が普通に機能する限り、ずっとこの新聞を読みたいと思っています。

毎朝貴方が配達してくれる新聞に、時間が許す限りかじりついているこの日本人老女のことを、お願いですからどうぞ想像してください。貴方が少しでも新聞を丁寧に扱って、配達書もプラスチックバンドも辺りに散らかっていないならば、とてもありがたく思います。貴方のお骨折りを前もって感謝します。――

封筒には恒例のクリスマス用のチップ十ユーロを同封した。

ちょうどクリスマスに泊まりに来た孫達にこの話をした。クリスマス祝日が終わった二十七日の朝、早起きの孫達は、祖母の手紙の効果を見たくてワクワクして騒いでいる。

「私、新聞取ってくる！」

「私！」

「一緒に！」

私は大人気もなく子供達を制して言った。

「待って、待って、新聞がどうなっているか自分の目で見たいから、私！」

新聞を取りに行くと、郵便受けに丁寧に入れられた、完璧な形の新聞があった。まるで、表彰状を差し上げるというような配達人の姿が目に見えようだった。子供達は私の手紙の効果を見て、飛び上がって喜んだ。

大晦日には、お寺の絵葉書に赤ワイン入りのワイングラスと赤ワインの瓶の写真をコラージュとして貼り付けて、〈お骨折りありがとうございます。良いお年を！〉の言葉と、手焼きのクリスマス用クッキーを入れた袋を郵便受けに貼り付けた。以来、ずっと毎朝、表彰状のセレモニー式的に丁寧に配達される新聞を嬉しく受け取って読んでいる。

日本で若かったとき、引きこもりたかったほど人が怖かった時期がある。人々があまりにも考えなしに言葉を発しては傷つけ合っているのに気がついたからだ。言い方次第で、コミュニケーションはどのようにでも発展する。ドイツで、次のことわざを知ったとき思った。人間はどこに住んでいても同じなんだ、と。

《Ton macht Musik トーン マハト ムージーク 音色が音楽を作る》

28 コロナ禍と地球温暖化の関係、そして、ボニーとの別れ

二〇二〇年新年早々テレビニュース。中国武漢にて原因不明のウイルス感染発生。武漢の凄まじい生死のドラマを息を潜めて見つめていると、次に、横浜埠頭のクルーズ船ダイヤモンド プリンセス号の乗客の感染が伝わった。中国の港で一時船を降りて市内観光をした乗客のクルーズ船内での感染。陸から離れて留まっている船の光景。目に新しいそのような出来事に啞然としていた。

すると、南ドイツバイエルンに出張した中国人社員から感染したドイツ人会社員のニュースが入る。ドイツ初のコロナ発生。幸いに社員全員休暇と隔離措置で、外部感染に至らなかった。と、安堵する間もなく、テレビには、軍用トラックで棺が次々と輸送されるイタリアの様子や、冷蔵倉庫に多くの棺が並ぶスペインの様子が映った。

初めは、中国だから国民の自由を徹底的に束縛できるんだろうと、人ごとのように見ていた。だが、それから一ヶ月もしないうちに北イタリアで全域閉鎖のコントロールに当たる警官の姿が映った。モード産業が盛んなミラノ近郊ロンバダイには多くの中国人労働者が暮らしている。中国直行航空便の入国が禁じられたにもかかわらず、パリやフランクフルト経由で着いた中国人はさらに電車でコロナ検査なしでイタリア入国ができた。

それからイタリア国内の右往左往する国民の姿がテレビに映った。

「友達と抱き合って挨拶できないなんて、死んだ方がマシだ」
街頭インタビューで、そう言って笑っていた気の良さそうなオジサン。あのオジサン、無事にコロナ禍を生き延びただろうか。

オーストリア南チロルの有名なイングルスキー場では、ヨーロッパ中から集まったスキー客で賑わっていた。スキー客の相手をしていたバーキーパーは、書き入れ時とばかり感染力を真剣に受け取っていなかったらしい。感染を知ったスキー客達は大慌てで蜂の巣から逃げ出す蜂のように逃げ出したが、時すでに遅し。イギリスやスカンジナビアの国々にも隈なく広がってしまった。

そんな他国の嘘のような騒ぎを、テレビで毎日呆気にとられて見ていた。まだまだ人ごと感覚だった。すると、どうだろう。ドイツでの本格的なコロナ感染発祥地は息子の住む地域だった。初感染者の動向はまるで推理探偵のように、いつ何の交通機関でどこを通過してだれと接してと感染経路追求となった。日頃の個人情報保護にうるさいドイツの国とはとても思えなかった。たった二、三日の間に感染は進み、ついに孫の通う保育所の先生が感染した。保育所や学校が閉鎖され始めた。

勤務する両親の代わりに保育所が閉鎖した後は、祖父母が孫を見るというのどかな新聞記事が載った。が、その二、三日後には年を取った世代や病弱の人は、孫や子供、若い世代と会わないようにとのお触れがあった。私達老夫婦はふたりとも肺に自信がないので恐ろしくなった。

〈マスクは効果はない〉と書いてあった新聞記事に、「アジアでは効果があるのに、効果はないと言い切るドイツ人専門家は傲慢だ」と夫相手に憤った。しばらくして、〈マスクは効果が抜群だから、着けるように〉とのお達しがあった。結局、マスクが医療関係者用以外には十分になかったことが判明した。

ここで縫い物好きの出番となった。テディのおむつを多量に縫った後壊れてしまったミシンの後釜の新しいミシンのデビューがマスク縫いとなった。コロナ感染への恐怖心を抱え、毎日毎日マスク縫いをした。それは早く世の中が平常に戻ってほしいという祈りの行為だった。縫って縫って出来上がる度に友人知人にクリスマスカードのように挨拶に送った。余った分は息子の友人や知り合いの運送屋の従業員にまで配った。後で数えると百五十枚になっていた。娘達も仕事の傍らマスク縫いをしていた。

もっといろいろな模様のマスクも作ろうと布の裁断をしていると、〈自作のマスクはもうだめ〉というニュース。医療関係者と同じマスクが十分に中国から入ってきたからだ。最初は六十歳以上の人は、政府からのマスク配布の手紙を薬局に持っていくと一人五枚五ユーロで買える知らせが入った。

学校が閉鎖されて子供達は画面での授業を受けるようになった。リモートワークが指定され、犬を買う人が増えた。毎日家にいるから夢だった犬を買って散歩に行けると。近くの森は、街がロックダウンになって、どこにも行けない人々の散歩で混み合ってしまった。

だれかが通報したのか、そのうち森にブルドーザが来て、散歩道が一幅広くなった。（コロナ禍後、可哀想に動物センターが犬で満杯になった。多くの人のリモートワークが終わって犬を買うのはやっぱり無理、と動物センターに連れてくる人が増えたからだ。長年愛犬と暮らしていた私達には信じられないことだ。）

そんな混み合う森の中でも、毎日ボニーと散歩をしていた。アキとテディのときに、私達が最期の日を決めなくてはならなかったのに懲りて、私はいつもボニーに頼んでいた。ボニーと私は目でコミュニケーションが取れた。

「ボニー、もうだめだと思ったら、私に教えてね。合図して教えてね」

コロナへの恐怖で頭がいっぱいだったその頃、ボニーが、じっと私の目を見つめることがあった。いつもなら「ボニー、散歩に行こう」とリードを手にとると、自

分のカゴで昼寝をしているボニーは飛び上がって喜ぶのに、いつまでも起きようとしなかった。

玄関口でも立ったまま動かなかった。一人で車に飛び乗るのもできなくなったボニーに、車まで登れる犬用の折り畳みスロープまで買って我が老犬の支援体制を取っていた。車に乗るスロープを面白がっていたボニーだったけど、もうその前で立ったままだった。森に着いても、嬉々として飛び回っていたボニーの姿はもうなかった。

そのうちに、森まで歩くのもスロープで車に乗るのも嫌がるようになって、自分の庭でいいと庭にしか行こうとしなかった。そのうちに、庭に連れ出しても一歩も歩こうとしなかった。

私の目をじっと見つめて、植え込みに首を突っ込んだ。テディが最期のとき、やたらと植え込みに入ろうとしたことを近所の女史獣医さんに話したとき、「それは、犬が最期の場所を探している印です」と言っていたのを思い出した。夫と私の判断は一致した。ボニーが私達に「もう良いんだよ」と合図をしてくれたのだ。

コロナ禍の真っ只中だった。老夫婦の自主隔離の決まり上、子供達がお別れに来ることはならなかった。あんなに周囲を楽しがらせたボニーに最期のお別れをしたのは、マスクを掛けた私達老夫婦と、マスクを掛けて近所から往診してくれた獣医さんだけだった。テラスに毛布を敷いてボニーを寝せると、いつものように尻尾をパタパタと振ることもなく、横になったままじっと私達を見ていた。獣医さんの手前マスクをしていた。どんなにか、マスクなしのいつもの顔を見せてボニーとお別れしたかったか！

子供達が巣立った後、アキとテディを見送った後、夫婦の子供代わりのようにもなった三匹目のボニー。旅立ちの見送りは夫と私だけだった。愛用カゴにボニーを寝かせ庭の花いっぱい飾り寝室に連れてきた。眠れないと悩む私のために子供達がプレゼントしてくれた幼児入眠用オルゴールを掛けて一夜を明かした。

それは、ボニーへの鎮魂歌のつもりだった。もう五年も経つというのに、そのオルゴールを掛ける度に悲しさが蘇ってしまう。コロナ感染に振り回されていた世界中の悲しみが蘇る。

ある日、夕食の支度をしながら聞いていた〈Deutschlandfunk ドイツ放送局〉のラジオレポートはショックだった。

— 地球温暖化により、北シベリアの永久凍土が融解し、凍土に潜んで凍っていたバクテリアが活性化した —

そんなサイエンスフィクションのようなこと信じられない、と料理中だった自分の耳を疑ってインターネットで調べてみると、あった。

— 北東シベリアで三十五度の気温を記録し、危険な病原菌が蘇った。凍っていた炭疽菌が七十五年ぶりに活性化し、風に飛ばされてトナカイが感染し、そのトナカイの肉を、そうとは知らずに食べた十二歳の少年が感染して死亡。他の村人七十人以上が入院し二十三人の感染者が確定された。トナカイ二千三百頭が感染死し、残りの四万頭のトナカイはワクチンを受けた。二〇一六年、シベリア北東のヤマル半島での出来事だ —

凍土のせいで土深く死骸を埋葬することができなかったため、トナカイは木箱に入れて処分された。そのトナカイから、高気温で融け出した昔のバクテリアが放出されて活動を始めた。まるで現実離れした出来事だった。

本来何千年も凍ったままの永久凍土が解けることで、大量のメタンと炭素の温室効果ガスが発生し、その温室効果ガスで地球温暖化は進み、シベリアはますます高気温になるという悪循環そのもの。北極圏は世界平均の二から四倍の速さで気温上昇しているという。

第二波ロックダウン中に流れたラジオのレポートも、またショッキングだった。
— コロナ禍は、森林採伐により地上の動物の種類が減少したために起こった現象だ —

人間は自分達の食料確保のために、森林を切り倒し自然を破壊し他の動物から生命活動の場を奪い命を奪ってきた。いつも宿主とする動物種が消えると、別な生命力の強い動物に宿主を見つける。

生命力が強いフクロウなどが現場屠殺により売買されるという中国武漢の魚市で、人畜共通感染症という感染経路により人間に感染するコロナウイルスが発生したという意見がしばらくの間強かった。が、二〇二五年現在では、感染発生は武漢の研究所の実験室での事故により発生という意見もある。この感染経由は未だに不明となっている。

思えば、コロナ感染のニュースが日々流れるようになる前は、地球温暖化に対するデモのニュースが多かった。

二〇一八年九月に、十五歳のスウェーデン人グレタ トゥーンベルクがたった一人で、地球環境問題のためにストックホルム国会議事堂で学校ストライクを始めた。〈未来がないのに、私達はどのようにして学校で勉強しなくてはならないのか〉という訴えだった。

ドイツでは生徒達以外にも、科学者達のデモ、祖母達のデモなど、この金曜日のデモ〈フライディ フォー フューチャー 未来のための金曜日〉はあっという間に

各地に広がった。地球温暖化を顧みずの経済優先主義の政治家や企業家に訴えるためだった。

コロナ感染の対策として、飛行機が制限され空路での旅行三昧を不可能にした。クルーズ船は、二酸化炭素排出が多すぎるので環境保護派にはにらまれながらも、益々増えるばかりだった。が、そのクルーズ船もピタッと止まった。

地球環境問題への意識は高まりつつあった。それでも、人々はそれぞれ自分の日々の暮らしの快適さや便利さも諦められない。休暇の楽しみも諦められない。環境保護団体や緑の党が、いくら地球環境危機を訴えても一向に変わりそうもない社会や人々の暮らし。コロナで、それが突然変わった。（ドイツでは一つだけ逆効果があった。コロナ感染を恐れて車購入が増えた）

ドイツではロックダウン中でも散歩だけは許されていた。二人きりの毎日、外に出るために私達は普段足を伸ばさないような所まであちこち行ってみた。環境保護のために車に乗らないで家から歩ける所をモットーにして。戦後ひたすら経済成長を合言葉にして考えなしに地球も環境も痛めてしまった。私達世代は加害者だ。

コロナ禍が過ぎ、また若い世代との行き来ができるようになったある日、孫がゲームをしようと持ってきた。何気なく始まって、ぎょっとした。カードに書いてある質問に答えよという八歳以上対象のゲーム。

九歳の孫がカードを読み上げて一、二、三の内正解を選べと言う。

「八つ目の大陸は何か？」分からない。

「太平洋にできたドイツ国土の少なくとも四倍で、30センチの深さのプラスチックのカーペット。海の周辺に魚がいないので不思議に思ったアメリカ人の海員が一九九七年に発見した」

「次、地球温暖化の大きな原因になっているのは何？」

「牛のオナラ！」

「正解！牛のオナラは、環境に悪いメタンガス。車一台が四百キロメートル走る時に排出する温室効果ガスを、一頭の牛は一年間で排出する。世界中で、牛は車より数が多いから大分心配だ」

「ビニール袋一つが自然の中で消えてなくなるまで何年かかるか？」分からない。

「答えは、四五〇年。りんごの芯は一ヶ月、ガムは五年。プラスチックストローは百年かかる」

孫達の世代はこんなカードゲームをしていた！ まだ、何も疑うことなく子供時代を屈託なく生きている孫達。この世代の子供達の三十年後、四十年後、五十年後

の世の中は、一体どうなっているのだろうか？この子達がもう少し大きくなって歴史や社会で前後関係を学んだら、きっと私達の顔を思い出すのだろう。

「まったく祖父母達はよくもこんなに自分勝手に地球を使い放題にしてきたものだ！」

《塵も積もれば山となる》とばかり、私はせめてもの罪の償いに、車なら家から十五分足らずで行ける最寄りの街にできるだけバスで行く。家からバス停まで歩いて二十五分位かかるけど、犬の散歩と思えば良いし健康にも良い。

でも、これは面倒で時間がかかる。バス停で待ってバスに乗って十五分で街の中央に着くとは言え、時間がかかる。面倒だ。お天気も気になる。バス停で待っていると目の前をほとんど一人しか乗っていない車がビュンビュン通り過ぎる。

最近はずが車が増えすぎて、アウトバーンは渋滞が多い。車産業と車好きの選挙民の顔を見て、新しくアウトバーンを作る提案さえする政治家もいる。遅滞が多くて信頼できない鉄道をもっと立て直すのが一番大切だというのに、車大国のドイツは今になっても頭の切り替えができないらしい。

環境のためになる政策には国民にもお金がかかるし不便になるから、それを主張する緑の党の人气が下がる。地球温暖化という警告が多くの人の頭の中では聞こえるけど、その対策として実際に腰を上げるのは面倒だ。不便だ。自分がしなくても、他の人がするだろう…。洪水、干ばつ、プラスチックゴミの山など、毎日のように地球が病んでいるニュースばかり。

時間が許す限り、健康が許す限り、若い世代への償いとして地球温暖化に対して老齡の我々ができることは何だろうと考える。

散歩していると必ずのように目に入るのは茶色に枯れきったトウヒ群。あるいは採伐されて片付けられた木の幹の山積み。地球温暖化で乾燥しきって害虫に抵抗する力もなく枯死してしまったり、嵐で総倒れになったりしている姿。生長が速く、経済効率が良いトウヒは、特にドイツ中部以北に多く植林された。経済効率が良い、つまり速く儲けになるという人間の欲望は、地球温暖化で見事に罰されることになった。

茶色のトウヒの木々の間を散歩していたとき、突然小雨が降ってきたと思って上を見上げた。それは、トウヒの枯れきった針葉が落ちてくる涙だった。

29 戦争は今も ― 二つの世界大戦の間接的犠牲者の義母

一九九一年にソ連から独立したウクライナではウクライナ語が公用語になった。ロシア語は依然として国民の間で使われていたが、二〇二四年ウクライナ政府は東のドンバス地方で公式の場所や出版物でロシア語を禁止する法律を可決した。ゼレンスキー大統領が選ばれる前から法案として提出されていたという。記事は小さな記事だった。

その昔フランスのアルザス地方で戦争に負けたためにフランス語が禁止されたときのことを語った物語の『最後の授業』の悲しさを思い出した。そこに生きる人々の言葉を、考えや心を表現する言葉というものを、国の都合で禁止したりして良いものなのだろうか。住民のアイデンティティである言葉を法律で禁止できるものなのか。嫌な予感がした。

モダンな明るいカフェで、洒落た装いの若い女性二人が楽しげにコーヒーを飲んでいた。その一人がインタビューの持つマイクに向かって言った。

「いくらなんでも、今になって、戦争など起こるわけではないです」

無数のロシアの戦車が国境沿いに並び始まった画像に並行しての、キーウでのインタビューシーンだった。

数日後の二〇二二年二月二十四日、ニュースの時間に信じられない画像が飛び込んできた。ロシア軍がウクライナを爆撃し始めた。あちこちの建物を片っ端からガンガン破壊する光景。

並行して、女性や子供達がポーランド方面に向けて逃げ出す様子。戦闘力確保のために六十歳以下の男性は国外脱出は禁止され、毎日のように国境で別れ合う夫婦や家族の姿がテレビに流れた。

隣国のポーランドを越えて、千七百キロも離れているドイツにもどんどん入国して来た。受け入れ先が足りない。ホテルも受け入れが間に合わない。地続きのウクライナから列車、車で、わんさと押し寄せてくる人々、バスの行列も続く。毎日蜂の巣をつついたような騒ぎ。悲喜こもごも。不安と安心の人々。

爆撃されては建物が次々と破壊されるシーン。

何もしないでいるわけにはいかない。夫と話し合って、二階の子供部屋二部屋を母子家族二世帯に提供することにした。二階にはバスルームもあるから、キッチンだけを共同に使えば、そんなに気を使う必要もないし、交流にもなる。小学校も近

くにあるし、少し大きな子供達の学校も二種類あるから自転車に乗れば登校できる。自転車はきっと寄付で集まるだろう。

夫は早速、市にメールでその旨の届け出をした。

私達は朝から晩まで、二部屋を空けるために二階から地下室へ子供達が置きっぱなしにしてあった不用品を運んだ。地下室から予備にと置いてあったテーブルを夫と二階に上げて、四日間忙しく片付けて、机、テーブル、本棚、タンスのある母子のための部屋が整った。壁には心が和むかも知れないようなポスターや絵を新しく飾った。インターネットラジオでウクライナ放送を見つけて部屋に置いた。

お母さん達が一緒にウクライナ語で故郷のニュースが聞けたら喜ぶだろう。母国が爆撃を受け、ワナワナと震えていることだろうといろんな想像が湧く。可哀想にも突然に人生が変わってしまった人達のために少しでも助けになればという気持ちと、それなりに変わるだろうという自分達の日々の暮らしを思っただけの緊張感が相混じった日々だった。夫がスマホにもウクライナ語とドイツ語の通訳機能を付けて練習した。

ウクライナからの母子世帯が来たら、あまり自由が効かなくなるかも知れないと、つい延ばしていた親戚のお婆さんのお見舞いにと遠くの病院まで一日がかりで行ったし、友人と会ったりして、ウクライナ人母子家庭を振り当てになる日まで落ち着かなく、益々本格的に戦争が進行しているテレビのシーンを横目に緊張しながら待つ日々だった。

そんなある日、小さい記事が偶然に目に飛び込んだ。それは大きくニュースなどでは取り上げられない情報だった。〈ウクライナでは、コロナの予防注射がまだ二五%程で、その予防注射は中国製かロシア製のものだ〉

どきっとした。夫と私は特に肺に自信がない。コロナが旋風を卷いていた頃は感染が恐ろしくて仕方がなかった。母子家庭を預かれば、近くの学校へ通学する子供達は、もしかすると知らずとコロナに感染してくるかも知れない。一緒にキッチンを使って食事したりしたら、今まで気をつけていたこと孫達ともあまり行き来していなかったことも水の泡になるかもしれない。夫といろんな状況を思い浮かべては、何か手伝ってあげたいと頑張っていた気持ちが一瞬にして萎えてしまった。とても情けないけど、そうなる隣人愛ではなくて自己愛が勝ってしまった。コロナに罹って死にたくない… そう言えば、トークショーで、ウクライナから来た女性が、お世話になっている家族にコロナをうつしてしまったと涙ぐんで後悔しているシーンがあったっけ…

翌日、夫はメールで市の担当者に二部屋提供の申し出を取り消した。すると、それまで受け入れ体制に入っている私達に何も連絡をして来なかった担当者か

ら、「大変残念です。また考え直した際にはいつでも連絡してください」との返事がすぐに来た。

本当に残念なことだけど、ウクライナ人が苦しんでいるというのに私達は怖気付いて、ニュースを通して成り行きを見守る傍観者になってしまった。破壊された町や村の様子、次々に掘られてできる無数のお墓。破壊された街で未だに住んで頑張っている人々。

《人間は何にでも慣れる動物であり、どんなことにも慣れる存在である》と書いたのが、かのロシア大文豪ドストエフスキーだというのは、かなり皮肉だ。同じロシアのプーチン大統領のせいで苦しんでいるウクライナ人達をメディアを通して見ることに、外国に住む人々は慣れ、政治家も慣れ、ウクライナ国民や兵隊達は疲労困憊になっている。無理もない、もう四年以上が過ぎてしまった。

ドイツに避難したウクライナ人達は、すっかり腰を下ろした人達も多い。今ではもう百二十万人以上がドイツに住んでいるという。

アラブ系難民からは、ウクライナ人はすぐに仕事が見つかるのに、自分達がそういう立場になるのに時間が経つという不平も聞かれる。

同じヨーロッパ人でキリスト教徒という同士の感覚があるウクライナ人避難民は、ほとんどが女性子供なので、受け入れて不安感のようなものがないのは事実だ。

反ユダヤ主義絶滅は国のモットーでもあるドイツが、人道上受け入れた難民のイスラム教徒の荷物に反ユダヤ主義が入っていたのは大分都合が悪かった。シリア人のムスタファは「僕は反ユダヤ主義という気持ちはこれっぽっちもない」と言い切るけど、イスラエル建国のために土地を奪われたと思うパレスチナ人の中にはユダヤ人に対する反感も生まれてしまったから、ユダヤ人の国イスラエルを支えなければならないドイツにとってはかなりややこしいことになった。

また、増えた犯罪の三分の一が難民というようなニュースを聞くと、普通のドイツ庶民でも隣人愛に基づいて受け入れたのは良いけれど…と受け入れ姿勢が変わってしまう。イスラム教のコーランには、〈豊かな者は弱者を支えなければならない〉と書いてあるそうだから、豊かなヨーロッパがイスラム教の難民を救うのは当たり前という考えがもしかするとあるのかも知れない。

ウクライナが戦場になっているのがまるで十分ではないかのように、今度はイスラエルが戦争を始めた。

二〇二三年十月七日、ハマスイスラム教過激団体がイスラエルを襲撃し、一千三百人もの人を暴行虐殺し、二百五十人もの人質を取ったことがきっかけになった。

戦場の惨たらしさの競争のようだ。それまでも十分生活に苦しんでいたパレスチナ人達は、イスラエルの怒りの仕返し爆撃を逃れるために、右往左往している。

それでも、ユダヤ人に対しては永遠に罪悪感に苛まれる運命の国となったドイツでは、いつもと違って正義やら不正やらとの中立の議論ができず、あくまでもイスラエル側を支持していたので、他の国々から非難批判が押し寄せていた。だが、イスラエル軍が、食料に困って飢え死にしそうなパレスチナ人援助のために頑張っている非営利団体ワールドセンターキッチン車を爆撃し、七人の命を奪ってから、ドイツがパレスチナ人の食料援助をするのも当然になった。

ロシアのプーチン、イスラエルのナタニアオなどの政治家の政策で、どうしてこんなにも簡単に罪のない人々が死ななければならないのか。自分達の土地所有欲信仰宗教などの都合で惹き起こされる、人間とは思えない憎しみ合いの残虐さだらけの戦争。人々の命を奪い、芋づる式に増えるばかりの人々の悲劇が生まれるだけの戦争。いつになっても止めない人間の愚かさに私は言葉を知らない。

幸いにもせめてガザ地区のイスラエルによる襲撃は二〇二五年の一月になって、やっと打ち切られ、人質となっていたイスラエル人はパレスチナ人囚人と交換に自国に戻ることができた。拉致された二百五十人のイスラエル人、人質としての二年半後の帰還者は百六十八人だった。やがて、イスラエルに捕らわれていたパレスチナ人の刑務所でのリンチなどもニュースになった。人間はどこまで残酷になり得るのだろう。

義母は、第一次世界大戦で戦死した父親を見たことがない。戦争未亡人の母親に一人っ子として育てられた。

第一次世界大戦敗北後、一九一九年ベルサイユ条約で国家総破産的な賠償金などの過酷な制裁を受けた国民は惨めさと屈辱感でいっぱいだった。それから十年間経済不況で失業者が増え、子供達の飢えや将来への見通しもつかない社会でアメリカなどへの移民者も増えていた。（ハンブルクの移民博物館で、その凄まじさを見た）民主主義政府の政策は実らず、国民の不満や怒りは頂点に達していた。そして世界恐慌に襲われ、ドイツの失業者は六百万人を超えるまでになった。そんな一九三三年にカリスマ性を持ったヒットラーが台頭した。義母が大人になったのはそういう時代だった。「当時、ヒットラーが政権を取ったら戦争になるって私は反対したんだけどねー」義母の友人が言っていた。

第二次世界大戦中、二十四歳で結婚した義母は二十八歳のときには三人の幼子を抱える未亡人になっていた。若い母親だった義母は旧ドイツ領ポーランドの家から

馬車で、最後に出されるという汽車に乗るためにブレスラウ市に向かった。ドイツのポツダムに住む伯父を頼って。

だれもかれも乗りたい一心で押し合いへし合いの真っ最中、身重で一歳の子を抱えた義母の手から、二歳の長男の手が引き離された。

「デトレフ！デトレフ！」

子どもの名を必死で叫んだ義母。白いオーバーを着せられた幼子は、人々が頭の上に伸ばした手から手を渡って窓から無事に車内の母親に手渡された。

それから三ヶ月半、バルト海海岸のニーンドルフに落ち着いた義母に三人目が生まれた。我が夫が生まれたその日は、第二次世界大戦のドイツの終戦の日だった。

戦後五年経ったある日、占領軍のアメリカ兵士二人が来て義母に義父の死亡証明書を手渡したそうだ。その書類には〈ソ連の戦車の下敷きになって死亡したとの目撃者がいた〉と記されていた。その日までは義母も子育てをしながら、いつの日か夫が戦場から帰ってくるのを待っていた若い母親の一人だった。夫も戦争のせいで自分の父親を見たことのない一人になった。

焼け野原になったドイツでも、社会は日本と同じように質素ながらも上向きだった。人々は平和な日々真面目にひたすら働いた。義母は三人の子供達を抱えて、ポーランド語とドイツ語の翻訳通訳をして生計を賄った。長男の健康の都合で医者勧めで転地療養先の南ドイツのバーデンウルテンブルク州に引っ越した義母は、生活の基盤を築いて一年半ほどして長女と末っ子呼んだ。二人の幼子がバルト海岸近くでそれまで面倒を見てくれた祖母に連れられて、シュットガルト駅に着いた。我が夫を見て大喜びでニコニコしている女性がだれか分からなくて、きょとんとしていると祖母が言った。

「お前のお母さんだよ」

あまり昔話を好まなかった義母が言ったことがある。

「あの頃、せめてクリスマスだけでも子供達の顔を見たかった。でも呼び寄せるお金も、自分達が行くお金もなかったの」

生活安定のために州の正式通訳者となった義母は、ポーランド人が関する政治裁判の通訳もし、アウシュビッツ裁判の翻訳もした。

義母は子供達が大人になって独立してからも翻訳通訳の仕事の続けながら、やっと得た穏やかな日々を楽しむのも積極的だった。毎年クリスマス前には必ずお世話になったポーランド人の家族に段ボールでプレゼントを送り、毎年ポーランド人友人を自宅に招いて一緒に夏を過ごしていた。

インドや南米にまで旅行をし、日本駐在員の息子の家、我が家にも二度訪ねてきた。三ヶ月間日本の秋の日々を満喫しながら、幼稚園に他のお母さん達に混じって孫のお迎えに行き、小学校と幼稚園の運動会をどんなに楽しんでいたことか。

父が近場の偕楽園を案内したときには、義母は雨上がりの飛び石ですべって転んで腕を折ってしまった。

「人生最悪の瞬間だった。ビーケアフル、ビーケアフルって言ったんだがな～」父はいつまでも後悔していたけど、義母は日本の救急車を中で観察できたから面白かったと言っていた。

二度目の来日には親友を連れてきた。戦争中に婚約者が戦死し、二人目の婚約者も戦死してしまった後、結局独身を通したフリーデルお婆さんは家族のように夫達の成長を見守った。二人はまるで女学生同士のように日本滞在を満喫していた。

そのドイツ老婦人二人を、父はブロークンイングリッシュで箱根、富士五湖、鎌倉へ案内して、自分も老学生の気分になって過ごし、無事に観光案内ができたで大満足だった。車内で義母達と座っていたら、隣席の人に「どちらがご婦人ですか」と聞かれたと面白がっていた。老齡の面白い思い出はありがたい。

ドイツに帰った義母は、職人さんに食堂の壁紙とカーテンを同じ模様で新しくしてもらった。〈これからは好きな読書と刺繍をしながら家で悠々と暮らしたい〉そんな思いの模様替えだったに違いない。

積極的な前向きの義母の人生設計は、でも、半年しか続かなかった。

義母は脳梗塞で右半身不随となってしまった。一年間のリハビリ入院にも関わらず、半身不随も失語症も回復することはなかった。

日本駐在からドイツに戻ってきた私達が義母を預かるようになった初めの頃、一人で緑の森が見える窓に向かって座り、ぼんやり外を眺めていることがよくあった。ある日、話しかけようと横から顔を覗くと、頬は流れる涙で濡れていた。リハビリの一年間が過ぎても、義母の涙は乾いていなかった。ひとりで積極的に暮らしていた自分の人生が終わってしまったことへの涙は、まだまだ乾いていなかった。

そして、十九年。最初は三人の子供達の家庭で交代に面倒を見た。そのうちに、一番若いアネッテが癌にかかり、義母は義姉と我が家を二か月毎に移動するようになった。そんな日々が続いた五年後、義母は老人ホームで一か所でゆっくり暮らすようになった。

気の遠くなりそうな長い間、義母は自分の体の不自由さを受け入れ慣れ黙々と生きた。老人ホームのヘルパーさん達は、そんな義母にいつも敬意を払っている印象だった。

最後まで、だれにでも「アンケ（Danke ダンケ）」と言うのだけは怠らないで。毎日午後七時になると、動く左手の人差し指でテレビの「ニュースの時間よ」と指摘するのだけは忘れないで。十九年間という壮絶な長い年月、自分の体に囚われたまま毅然として生きた。

一九九八年夏の真っ盛り。人生の真っ盛りの四十三歳のアネッテを見送った。墓穴に置かれた棺に向かって、左手で自分の胸を叩いては墓穴を指して「Ich! Ich! イーッヒ！イーッヒ！（私が！私が！）」と泣き崩れた。八歳から十六歳の四人の子達が、後ろから見ていた。

六年後、やはり真夏だった。子供達の父親である六十三歳のデトレフが急死した。息子の埋葬式のときには、嫁のときのように泣き崩れる力はなかった。「人生が、重すぎる」そう語っているやせ細った義母の肩が、力なく小刻みに揺れているだけだった。

その四年後の真夏、九十一歳で義母は天に召されていった。第一次世界大戦で未亡人になった母親に育てられた義母は、第二次世界大戦後自らも未亡人として三人の子供を一人で育て上げた。義母は二つの戦争の犠牲者の一人だ。

一九八五年五月八日ドイツ終戦四十周年記念日の西ドイツヴァイツェッカー大統領の記念演説は、ドイツにとっては特に歴史的な演説となった。それまでは国民にも戦後の敗戦に伴う屈辱感や自分達も十分に苦しんできたという被害者意識があったが、この演説では《終戦によって国民はナチスから解放されたのであるから、ユダヤ人に対しては加害者であることを認め、二度と間違いを犯さないように過去をしっかりと見つめて、未来への責任をもって社会を築こう》というような趣旨で国民の意識転換を図った。

《過去に目を閉ざすものは、結局のところ現在にも盲目となる》
特にこの一文は国民が深く心に刻んだ言葉だ。

我が子達はギムナジウムに入って、歴史の授業で、国語の授業で、宗教の授業で、自国のユダヤ人迫害の酷さを教え込まれた。自分達がした罪ではないのに、まるで手を貸したかのような気持ちにまでなるのか「もう聞きたくないぐらい…」とさえ呟いていた。次女は演劇部で《アンネフランク》の劇で私の白いエプロンをかけて、姉のマーゴットの役を演じた。

テレビでもドイツの過去の黒い汚点に関する番組は今でもやっている。戦後八十年も過ぎれば人々には遠い過去になって忘れられるおそれがあると思うのか、今でもいろんな観点から構成された番組がある。夫はよく見ているので感心する。

ユダヤ人マーゴット フリードレンダーは、ユダヤ人収容所からの開放後逃亡中に知り合ったユダヤ人と結婚して共に一九四六年アメリカに移住した。未亡人になってから六十四年間のニューヨーク暮らしに終止符を打ち、八十八歳（！）でベルリンに戻った。それ以来二〇二五年、百三歳で亡くなる直前まで、ドイツ中の学校や講演会場など招待されるとどこにでも出かけて、ユダヤ人迫害時代の話をし続け、人間同士お互いに敬意をもって、デモクラシーと平和的な相互関係の下に生きることを強調した。

ドイツ連邦共和国功労勲章を授与され、ベルリン名誉市民にもなったマーゴット フリードレンダーを称えるために、ベルリン州議会前の広場はマーゴット フリードレンダー広場と命名された。

マーゴット フリードレンダーは講演の終わりには、いつも次の言葉で締めくくった。

《 Seid Menschen ザイト メンシェン 人間らしくありなさい 》

30 テラスでのお花見

第二の人生が始まったばかりのドイツでのお花見。周りの人々の言葉が理解できなかった頃のお花見は、もう四十七年前の遠い思い出になった。

今、我が家のテラスの眼の前には、池の向こう側に植えてから三十年以上になる八重桜が見事に咲いている。故郷で何百本もの桜の木がある八重桜公園にちなんで植えたその八重桜の根元には、日本からドイツに戻ってくるときに記念にと購入した石灯籠がある。その斜め向かいには小学生の子供達が父親の誕生日にと、恭しく三人で運んで来たソメイヨシノが植えてある。モクレン。レンギョウ。ユキヤナギ。南天。池の周りに私の好きな日本の木々を植えた。幼い孫ができると夫は池の囲いを竹で日本的に作った。イースターに孫達が集まってきたとき、池の囲いの周りで泳ぐ金魚を見ながら金魚の数や赤白黒の模様について賑わっていた。ラリア、タクヤ、アキト、ネーレ、マリー、ニコラス、リリー。いろいろな色の服を着ている孫達を見ていたら、チューリップの花の歌が脳裏に聞こえてきた。

灰色の冴えない空を見て暮らす長い冬、太陽は滅多に顔を出さず、出してもおぼろ月のように、まだいるから忘れないでねという感じ。そんな空の様子にそろそろげんなりしてくる頃、夫は毎年一番先に庭に白いスノードロップ（待雪草）が顔を出したのを見つける。やがて紫や黄色のクロッカスが出てくる。

春が来るのを喜ぶのは人間だけじゃない。寒い中をじっと堪えていた花や木々の若芽もありったけ喜ぶ。長いどんよりとした灰色の冬の後、待ってましたとばかり元気な太陽が登場して木々の新緑が輝き出す。赤、白、黄色のチューリップが咲き出し、レンギョウの花が黄色く地味なりに存在を主張して、モクレンが開花した後、ソメイヨシノの番になる。自然から生きるエネルギーを得て、私まで元気が出る。

八重桜は満開になるのが少しだけ遅い。遅い分ちょうど暖かくなったテラスで、友人達と桜を愛でるお花見会をすることにしている。地球温暖化の最近では、いつ本当に暖かく春らしくなってくれるか、あまり見通しがきかなくなってきた。急に暖かくなってシメたと思って早々と招待しても、またお天気が悪くなってしまって、なかなかつぼみが開かなかったりするとがっかりしてしまう。朝一番に庭の桜のつぼみをしっかりと観察しては、みんなが来る頃にちょうどまく満開になるかどうか雨降りになったりしないか、夫婦ではらはらしながら開花の時機が話題になる。

《世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし》

千二百年もの大昔、同じような気持ちを抱いて暮らした、かの在原業平がとても身近な人に思えてしまう。

うまい具合に開花となる。可憐な白っぽいピンク、濃い目の薄桃色、光の中で色がさまざまに見える桜色の花がびっしり咲いているのを見ながらのひととき〈お花見〉を、お客様はみんなとても喜んでくれる。

まだ新米主婦だったとき、ドイツでは時々お客を呼んで夕食やお茶の時間を共にする習慣があると知って真似事をせざるを得なくなった。何をご馳走したら良いのか悩んでいると、お客様を招待しては、料理もテーブルセッティングも面倒がらないで実に楽しんでやっていた義母が言った。

「お客様は、一緒におしゃべりして過ごすひとときを楽しみに来るんだから、何を食してもらうかはそんなに悩まなくていいのよ」

まさにその通り。ドイツでのお客様に限ってはおしゃべりの種に切れたことはない。ケーキや日本料理は、まず初めの一口を厳かに口に入れたかと思うと、その後は箸休めならず、おしゃべり休めの役割となるからそんなに悩む必要はない。ケーキなり、前菜なりを囲んで座ると、それがきっかけになって滝のように流れるおしゃべり。招待客も若かった頃はおしゃべりに弾んで、夜中の一時や二時まで座り続けたことも稀ではなかった。

日が長くなるドイツの春の夕方〈お花見〉のお客様が帰った後、ケーキを焼いたりお料理したりテーブルセッティングをして、少々忙しい思いをした後の余韻をあらためて桜を見ながらゆっくりと味わう。夫はお皿などをキッチンに運んだあと、ゆっくりと新聞を読みだした。ワインだの水だのとの久しぶりの準備で慌ただしかったから新聞に目を通す暇がなかった後は、じっくりと活字に目を通す静けさが、またありがたいひとときになる。

私と言えば、そんなとき、テーブルにまだ残っているわずかのお皿やグラスを横目にどっかりと座ったまま、あらためて桜の花に見入る。こんな美しさをどうやって描いたらいいのかなどと思いながら。うまく描けたら両親に見せたかったのに、そういえば姉だって私の絵は見たことがなかった。家族はばらばらに遠くに住むようになると、それぞれの関心事を分け合うこともできなくなる。絵を描き始めたのはだいぶ遅かったから、両親も姉も私が描いた絵など見たこともなかった。そう言えば、母がドイツ人との結婚を反対していた時言っていたっけ。

「子供ができると、親に子供を見せたいものなのに、ドイツなんて遠い所に住んでいたらそれもできない」

八人子供の末っ子だった母は、我が子が生まれたときには年老いた両親はすでに他界していて見せることができなかったから真摯の言葉だったに違いない。

桜を見ながら、両親と姉相手におしゃべりする。姉が亡くなってから三か月位経った頃から、不思議にも姉が頭の中で私とおしゃべりするようになった。

「実はね、私が結婚するのにドイツに出発したあの朝、〈昌子ちゃん、今から親不孝するんだからね〉って言われたの。駅でお父さんが、ちょっとっていなくなった途端に。きっとどうしてもその一言言いたかったのね。私、本当に親不孝したのかな〜？ お姉ちゃん、そう言ったの、実はお姉ちゃんのお義父さんだったのよ。」

「え〜、そんなこと言ったの？ まー、明治生まれの人だし、そんな風に考えたのも無理なかったかもね〜、日本男児じゃなくて外国人選んじゃったんだから」

「まあ、いいんだよ。子供が自分で満足して暮らせれば、親はそれで良いんだよ。」

うなずきながら言ってくれる親の顔が浮かぶ。

植物は見る人に愛でられるほどに美しく育つという。庭に座っては、歩き回っては、花や木を飽きもせず眺めている夫は、特にこの我が家のお花見が大好きだ。自然と人間が一体となって春の到来を喜んで、みんな揃って地球に乾杯しているような季節。あとどのぐらい、二人でこのお花見を楽しむときに恵まれるのだろう。

《Mensch denkt, Gott lenkt》

(メンシュ デンクト ゴット レンクト 人は考え、神が舵を取る)

エピローグ

「悪いけど、帰るの、あしたじゃなくて、あさってでもいいかなー？」

茶の間でうつむき加減に座っている細い肩の姉に言った。

間近に迫ったドイツ帰りのフライトに合わせて、翌朝トランクの置いてある弟宅の元実家に帰る予定だった。身軽に電車乗り換えができるように大きな荷物は宅急便で発送して、あとは明朝バスと電車に乗るばかりだった。洗面用具を入れるだけで出発できるよう玄関先にリュックとハンドバックまで置いた。それなのに、夜遅くになって、急に、無性に姉の傍でもう一日だけ過ごしたいという気持ちで一杯になった。

五年前に突然目が不自由になった姉の支えにと、自立していた次男が家に戻って同居していたけど、遠い職場に通う甥は朝早く出勤して毎晩遅く帰るのが常だった。一時帰国して姉宅に泊まりに行き、姉と一緒にテレビの前に座って番組の内容をネタにおしゃべりをしながら、特に何をするでもない九日間は穏やかにあっという間に過ぎた。一昨年は、目が悪くても電車を乗り換えて近場の観光地に二泊の旅行に出かけられたし、去年は近くの浜辺に半時間ばかり歩いてピクニックにも行けた。今回はお天気が私達の味方をしなかったばかりか、姉も海に足を向ける気にならなかった。海に行くと波が寄せたり引いたりするのをいつまでも見ていられる私と違って、見えない姉にとっては吹く風までが肌にうるさく、波しぶきの音も慰めにもならないのかも知れない。

毎日一人でテレビやラジオを聴いているだけの姉に少しでも気分転換になるようにと、ドイツから月契約で安くなる国際電話を掛けては、毎週のように長電話をしていた。受話器を耳に当てて聞く姉の声では何も気が付かなかったけど、目の前にいる姉の声は何となく聞こえにくかった。余りほそそと話すので時々聞き返す。

「昌子は耳が悪くなってきたね」

「まあ、年を取ると皆それぞれに悪いところが出てくるんだね」

苦笑しながらのそんな会話が合った。

一日出発を延ばした最後の日の朝、二人でテレビを見るともなしに見ていたとき、出し抜けに姉が言った。

「介護のこと、もう一度考え直してみるね」

その一週間前、去年に比べると大分頼りなくなっている姉に介護の人に頼む話を切り出したときは、姉は「まだできるから大丈夫」とその話に乗りたくない様子だった。二十年以上前に新しくできた介護制度にお世話になる両親を巡って一緒にい

ろんな体験をしたことがあるから、まだ七十代の自分はそこまで弱ってはいないという自信と誇りがあったのかも知れない。それなのに、突然自分から介護の人を頼むと言い出した。

「それは良いね。介護専門の人達はよく心得ていて、だれにどんな手伝いをしたら良いかわきまえているから、お願いすれば少し楽になるし、まーちゃんも助かるし」と喜ぶと、姉自身も「そうだね」とほっとしたようだった。

前日の日曜日は、甥の運転で義兄のお墓詣りに行き、その後はレストランに行くと姉にとっては腕にすがってとはいえ、沢山歩かなければならない一日だった。

その二日前には、ショッピングセンターにタクシーで一緒に買い物に行った。それまでどこにも行きたがらなかった姉が、前夜に微熱が出たのに気が付いて解熱剤を二錠も飲んでまでも一緒に来ると言う。タクシーで着いてすぐに気に入ったカーディガンが見つかり、姉は「休んでお茶飲もう」と言った。目が不自由じゃなかった頃はバスに乗って来たというショッピングセンターは、姉には見えなくても見えるようなものだった。そのお店の斜め向かいにあるスターバックスは、九年前に義兄のガン宣告の後、偶然にも一時帰国中だった私と二人で立寄って言葉なく過ごした場所だ。

幸いにも空いていたソファでゆっくり抹茶ラテとワッフルを味わった後、大急ぎでドイツ向け買い物リストを片手に走り回っている私を待ちながら、姉はどんなことを考えていたのだろう。お土産買いを済ませて、帰国中には必ず食べたいモンブランとゆずレモンティーを頼み、二人で日本の秋の味覚を楽しんだ。やがて「もう、帰ろう」と立ち上がった姉のタクシーまでの足が心もとなかった。タクシーからやっと降りて家の中に入るとぐったりしてしまった。

以前は私が来ると姉は何かしら小さな遠出を考えてくれた。ショッピングセンターでの買い物もそのプログラムの一つだった。でも、思い出はやっぱり思い出で、現実は何々と変化している。日頃何もしないで時が過ぎるのに身を任せて暮らす日々の合間に、姉にとっては思い出通りの精一杯の外出だった。

その三日後、姉は介護のお世話になると決心したのだった。

でも、その決心は必要なかった。

その夜、姉は、妹の私がまだそこにいるというのに、先に旅立ってしまった。翌朝「じゃあね、いろいろありがと、お姉ちゃん、お互いに頑張ろうね」と私が発する前に、姉は先に、何も言わずに、逝ってしまった。

姉は私にとっては日本のシンボルのような人だった。謙虚で、誠実で、穏やかで、思いやりのある自己主張をしない人だった。何でも受け入れて、ぶつぶつ言ったり

するのは聞いたことがなかった。目が不自由になってからも、何も愚痴をこぼしたり嘆いたりしなかった。

ドイツに住む妹の私は、機会がある毎におよそ日本人らしくなくドイツ人相手に自慢した。

「私の姉は目が不自由になってしまったという運命を受けいれて、じっと耐えて静かに暮らしている。読むのが何より好きだったのに、ぶつぶつ不満や泣き言も言わないで、見えなくなった分ラジオとテレビを熱心に聞いているから呆けたりもしないし」

「仏教の影響での熟した日本人の老人を地で行く姉には感心しっぱなしなの」

三歳年上の姉はいつも冷静だった。まだ小学生だった頃、親の留守中にお風呂の焚口から窯の外に火が回ってしまった。お風呂の焚口は、台所の勝手口のコンクリートの地面にあって、すぐ目の前には板張りの床が広がっていたから、炎が大きくなってしまえば床板に燃え移るのは、子供の目にも明らかだった。パニックを起こして「タイヘン！タイヘン！」と炬燵の周りや隣の部屋までただ駆けまわっている私に、姉は「昌子、座布団！座布団！早く！持ってきて！」と言いながら手当たり次第に座布団を大きくなっては散らばる炎の上にバッサバッサと投げ掛けていた。恐ろしい光景に震えながら、子供ながらに黙々と火を消し続けた姉への尊敬の念で一杯になった。

姉は年頃になると、穏やかな明るい三歳年上の男性とお見合い結婚をして子供三人を生み育てた。大人しい母親の下に姪も甥達も生き生きとした楽しい大人に成長した。次女の私のドタバタ人生に呆れる両親にとっては、当たり前の人生の路線を淡々と生きていた姉は、ホッとする存在だったに違いない。

そんな姉が、ここ数年来何かと言うと電話口で口にした言葉がある。

「今の日本は、昌子が知っている日本とは違うんだよ」

寂しい気がしてあまり認めたくなかったけど、今になって、そうかもしれないと思う。ドイツ文化に関わりあうこと四十七年にもなる私の中の日本は、あの昭和時代の日本だったのだ。ドイツでいろんな体験をしながら、日本人として考える基準の物差しがだんだんに変化した。一方で私の日本はひと昔前の日本だったから、今の日本社会の出来事に驚くようなときや、「日本だったらこんなことはないでしょうね」と日本を美化しては、ドイツの出来事を嘆くとき、姉が受話器の向こうで戒めた。

「今の日本は、昌子が知っている日本とは違う。日本でもそんなことはある」

自分が今の本当の日本人と違い、どうやら大分ガイジンになってしまったらしいことを知らされて、なんだか一人で無人島にいるようで寂しかった。

まあ、姉にそう言われれば、今の日本だけに見られる現象には気が付かないわけではなかった。よく耳にする〈社会の閉塞感〉と言う言葉。それは私の知っている日本ではあまり聞いた覚えがない。当然かもしれない。私の育った昭和時代は、戦後の高度経済成長期で誰も彼もが張り切っていた。戦争には負けたけど、頑張ればきっと良い時代が来る。みんなで暮らしが楽になるようにと過ごしていた時代は目的が同じだったから、特に何も考えなくてすんだのかも知れない。洗濯機、掃除機、冷蔵庫、テレビ、そんなものを手に入れる満足感を共に共有していた。なんて幸せだったんだろう。

あれから世界第二の経済大国になって、民主主義と資本主義とで世界一に繁栄していたアメリカはお手本で目標だった。日本はそのまま真似するだけでいいのか、何だかおかしいと思う人もいたかもしれないけど、みんなで一緒に頑張る社会では、何だか変だという考えは邪魔になるだけだった。でも人は勉強をして考えるようになれば、それぞれに色んな考え方があるのに気が付く。そのことを言えないで言えない雰囲気でだんまりを決めたらどうなるのだろう。

ドイツの新聞や雑誌などで、〈ヒキコモリ〉というドイツ人には発音の難しそうな日本語まで記事になることがある。無理もない。今ではもう百五十万人の〈ヒキコモリ〉がいるという。そして、ヒキコモリ者の親が年老いて他界した後には誰がヒキコモリ者の面倒を見るのか、というのが私が購読する《南ドイツ新聞 Süddeutsche Zeitung ツートドイツェ ツァイトング》の最新の記事だった。何年も前のドイツの雑誌《シュピーゲル》の特集記事によると、〈ヒキコモリ〉にはどちらかというと高学年で、親の経済状態が恵まれている人が多いという。

ドイツでは自分の考えを持つのも自分の意見を言うのも当たり前だ。学校や体験を通しながら自分の考えが生まれるのは当然だから。幼い頃から親達は「君はどう思う？」と聞くのを怠らない。まだ幼い子供が食べたい物や着る物を自分で決めるのも尊重する。甘やかすことと紙一重の違いだからとても難しいことではあるけれど、子供が何か親と違うことを望んでも「わがまま言うんじゃない」とあしらうこともなく、本気で話し合う。

日本では《十人十色》という言葉はあっても、実際に人と違う考えがあったりすると、そのような人に対して《出る杭は打たれる》から黙っていた方がいい、《波風が立つ》から《長い物には巻かれろ》と、伝統的な態度を取ることを無言のうちに促される。私だって若かった頃「女の子は理屈を言うもんじゃない」と言われた。

なぜだろうと考えても、それはマイナスではあるけどほめられることではなかった。白い大きなかぶと二つの赤いラディッシュの絵に《和而不同》と書いてある色紙が茶の間に掛かってあった。和するためにみんなと同じように考えなくちゃと思いながら、自分を保つ、難しいなと思った。〈引きこもり〉が日本の社会問題として話題になってきたとき、思春期の頃そんなことを考えた自分を思い出した。みんなで当たり障りのないことだけを話して、何かあっても《臭い鍋に蓋をして》いたら、鍋の中にはいつのまにか臭いガスが溜まってしまう。社会は行き詰って、至る所に閉塞感が充満する。

ドイツではみんなが意見を言うのが当たり前なので後腐れがない。人に何と思われるか気にしないで発言できるので〈家に引き籠る〉こともない。意見が合わない人や気が合わない人とはお付き合いしなければいいだけのこと。大人になるまでに見事に個人が確立する。

以前はフェイスブックもインスタグラムもなかったから、留学するような人以外は外国の人がどんなことを考えているのかは知る術もなかった。今は茶の間に居ながらにして、外国の人との交流ができる。自動翻訳機能で他の言葉ができなくても意思が通じるので、自分の考え方が他の外国人とのそれとどんなに違うかまで分かってしまう。それでも周囲が自由な意見交換を、グループのハーモニーを壊す《波風を立てる》と煙たがっていたら、閉塞感が充満するのも無理はない。自分が意見を言って相手の意見を聞いてという習慣がないと、意見交換も気まづくなって嫌がられたりする。考えて言う意見でも自己主張するヤツと眉をひそめられる前に、家に引き籠って自分を守ろうと部屋に閉じこもる。それが一番楽だし他の人達にとっても《波風立てる》嫌な人が消える。

去年、知り合いの娘さんが高校留学で日本に一年間留学した。帰ってきて我が家に来た時に印象を聞いてみた。

「それで、どうだった？」

「みんな優しくかったから、楽しく過ごせた」

多分日本人の私相手だったから礼儀正しくそう言ったのかも知れない。さらに、それで、と聞くと付け加えてきた。

「なんだかクラスのだれ一人違う意見を言う人がいなかったのが印象深かった」

「それに先生の悪口とかのおしゃべりも生徒同士でしなかった」

生徒達は多分、教師や親などの大人達が期待する模範的な生徒の姿で学校生活を送っているのだ。高校上級生というと、普通はこれから自分を待ち受ける社会について考えたり、大人の色々な態度をあれこれと批判したり、からかって面白がったものだったけど。

子供の頃はいつも本を読んでいた姉を見ていたから、私も本が大好きになった。里帰り中の一番の楽しみは書店とブックオフに行くこと。書店では、新作が並んでいても、老齡の私の知る作家の新作はもうあまり見かけないから、ブックオフに行くと値段が嬉しいばかりでなく良く知った作家の読みたい本がいっぱい並んでいる。それでも行く先々の書店に入って書棚を眺めていると日本独特のタイトルで社会が見えてきそうだ。

『自殺するなら引き籠れ』『二度目の鎖国』『いい人をやめると楽になる』『日本人は、なぜ世界一押しが弱いのか？』『なぜ日本人は日本を愛せないのか』『だから日本はズレている』『幼児化する日本人』『日本語が亡びるとき』『日本語どこへ行く』『日本人という病気』

『二度目の鎖国』というタイトルにはドキッとした。翻訳原稿を持ち歩いて出版社を探していた時、出版社から聞かされたのは一度ばかりじゃない。

「今は、翻訳物があまり読まれないので」「外国の本に興味がないんですよね、今の読者は」

出版社ばかりじゃない。知り合いの一流大学の教授がボヤいていた。

「折角、ロンドンの大学と提携して、単位を同等に扱って留年と言うようなことがないように配慮したのに、外国に行きたいという学生が名乗り出ないんですよ」

何年も前に親友からニュースが入った。

「長男が新入社員としてニューヨーク勤務になったのよ」

「えー、いきなり？」

「そうなのよ。外国勤務を望む社員がいないというところに、息子は面接で自分は父のハンブルク駐在中ハンブルクに住み、その後ロンドンの寄宿舎付き高校で勉強したので、父のように是非外国で勤務したいですと言ったら、入社して準備期間が過ぎたらすぐニューヨークに行って下さいと言われたんですって」

息子さんは入社早々結婚して、ニューヨークでは管理人の付いた立派なマンションに住まいを提供された。ニューヨーク駐在の後一時日本勤務をしていたが、今はカリフォルニア駐在を楽しんでいる。

日本の書店では、多くが翻訳物は翻訳書専用の棚に並んでいるので、わざわざそこまで行って外国の本を選ぼうとしないのかも知れない。ドイツでは、ドイツ人作家の本も外国人作家の本も全部混じってタイトルがアルファベット順に並んでいて、そこから一冊を手にとって初めて、イタリア人の本だったりフランス人の本だったりに気が付く。

随分前の話だけど、日本人学生が我が家に来た時に言った言葉は忘れられない。

「ドイツでは、何から何まで自分で考えて決めなくてはならないのよ。例えば車を買う時だってね。初めから付いているのは車体と座席とハンドルと運転装置位のもので、後は全部自分で決めて注文するから、注文車が来るまでに何か月も待つことになるのよ」

一流大学の大学生のお客さん曰く。

「そうか〜、じゃあ僕には日本の方が楽で良いですね」

考えるのも決めるのも、面倒と言えば面倒かもしれない。〈決める〉ためには〈考え〉なくちゃならないし、〈決める〉と〈責任〉が付いてくる。言ったことに〈責任〉を取るとなるとちょっと面倒。やっぱり《長いものには巻かれ》た方が楽。

『日本語が亡びるとき』には鎖国時代が終わる頃、福沢諭吉を中心にオランダ語ができる少数の人が集まり、世界事情の扉のオランダ語書籍を朝夕寝ずに頑張って日本語に翻訳し、日本が鎖国をしている間に世界がどのように変化発展をし続けてきたかを知ろうとしたと記されている。

二百六十五年という長い長い間の鎖国状態があったからこそ、日本独特の文化芸術学芸や武道など、その他の国民的特異性が生み出されたという一面もあるけれど、その鎖国によって、日本はまるでおとぎ話の『いばら姫』のように長い間眠り続けるように、世界から閉ざされて時が過ぎていた。

一六二〇年にメイフラワー号でイギリスからアメリカに移住した人々が、百五十年以上経ってアメリカの独立宣言をしてさらに発展を続けている間、日本と言えば、相変わらずさらに九十年間も自国内で平和に眠り続けていた。そこに突然、見慣れた漁船の十倍も十五倍も大きい黒い船が近海上に現れたのだから、人々の驚きと恐れはどんなだったか！今だったらまるで、突然東京上空に金色に輝くもう一つの太陽が現れたような感じ？ドローンや飛行機が飛ぶのには慣れているけど、もう一つの太陽だったら、驚くかも。

当時の寝るのも忘れて世界を知るために翻訳を続け、世界を知りたい、知らなくてはならないと夢中で頑張った日本人の姿こそ、日本精神の極ともいえる姿勢だったのではないかな？

今から五十五年年前、父が仕事の関係で銀行でのコンピューター導入の様子の視察旅行にヨーロッパに行くことになった。学生で東京に住んでいたのが羽田空港まで行くと、出発ホールには父の見送りに七、八人の人が来ていた。それぞれに挨拶をして、いよいよ父が出掛けようとしたとき、一緒に水戸から出てきた人々は一同で大声を出して手を上げた。

「バンザーイ！」「バンザーイ！」

一九七〇年の羽田空港での一コマだった。

今ではスマホやコンピューターの翻訳機能で本の内容はある程度分かるし、インターネットで外国の事情も知ろうと思えば沢山の情報が得られる。でも、みんなの興味はどうも内向きで事なかれ主義で暮らしているように見える。世界中が地球温暖化やAIの発展と危険性という大きな人類的問題を共に抱えている今、独裁者が世界平和を脅かす今、日本も今や島国だと呑気ではいられない。もっと外の世界を知りたい、学びたい一心の心意気最高潮の昔の日本人がこの様子を見たらどう思うだろう。

《人のふり見て我がふり直せ》長年ドイツの〈ふり〉を見続けてきて、つい我が母国の現状に思いを馳せてしまう。

年中ドイツで暮らしている私が、姉の家で過ごした短い間に、姉は逝ってしまった。「今の日本は昌子の知っている日本と違う」と私に言い聞かせるように言っていた姉は、きっと、やっぱり日本の真髄を私に伝えたかったのに違いない。

姉の死を通して日本人の根本的な謙虚さがとことん身に沁みた。姉の尊厳を思いやりながらてきぱきと医療措置を下してくださった救急車救助隊員の方々、夜遅くの集中治療室のお医者さん方。夜中の二時過ぎに白装束の姉を厳かに白い寝床に寝させてくれたお葬式会社の担当者。お通夜お葬式に備えて、横たわっている姉をタオルで全身を覆いながら、寝床で丁寧にシャワーで姉を清め洗いしてくださった二人の担当者。さっぱりとした姉はきれいにお化粧を施され、鏡を見ることができたら姉はどんなに喜んだことだろう。亡き姉に関わった方々は誰もが敬虔な思いで心から接してくださっていた。

姪が言った。

「叔母さん、一緒にお母さんの着物を選ぼう」

二人で姉の旅立ちの着物を選んだ。着物箆笥に大切に保管されていたその一枚を見たときは、思わず二人で「きれい！」と声を上げた。からし色でもないし、山吹色でもないし、と何とも言えない色に感心していると、美術専攻だった姪が「叔母さん、これ刈安色って言うのよ」と言った。日本にはなんと多くの微妙な品の良い色と名前があるんだろう。その刈安色の地に控えめにくすんだ薄橙色の大ぶりの花模様に霜降りがかかって、内気だった姉の雰囲気がよく合っていた。普通だったら、「まあ、これは素晴らしい着物だから、お母さんに代わって着ればいいじゃない。お母さんもきっと、そうしてって言うと思うわよ」とでも言いそうな私だった。でも姉の人生の仕上げにそんな合理的な考えは微塵も湧かなかった。姪もきっと同じ

思いだったに違いない。両親は特別に喜ばしい機会があると娘に着物を贈り物にして気持ちを表した。もうあまり着物を気軽に着る機会はなくなってきたとは言え、戦中戦後頑張ってきて、こんなに立派な着物を娘達に着せられる時代になったという満足感のなせる業だったかも知れない。これは両親が姉に贈った物だと直感した。新品の着物の証拠に袖に抑え糸が控えめに付いていた。姉は素敵な着物を大事に箆笥にしまって密かに喜んでいた。両親は地味ながらも華やかさの香る美しい絹の着物を娘に贈って満たされた気持ちになったに違いない。その着物が娘の永遠の旅立ちの晴れ着として、ただ一度だけ身に着けられるとは思えないで。

日本人の謙虚さ、誠実さ、粋な想い。姉が私に教えてくれた日本文化。昔の日本にあり、今の日本にもしっかりとある文化。これからも、ずっと残って欲しい日本人的特性によって保ち続けられる日本文化。四十七年間ドイツ文化の中で暮らしているけど、やっぱり日本人であることをやめられない。

完